397.5
Y24
ウ

0057852000

0057852-000

397.5-Y24ウ

日本海軍陸戦隊史

山口喜代松・著

大新社

昭和18

AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

ト工4S-68
397.5
Y24

山口喜代松著

日本海軍陸戰隊史

大新社刊

969
14

自序

昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭勃發するや、日本海軍陸戰隊は、ウエーキ島、グアム島攻略を始め、香港、ヒリッピン、馬來、ボルネオ、蘭印、アリユーシャン列島攻略に陸軍部隊と協力華々しい活躍を示し、半ケ年にして約七十數回の敵前上陸を敢行した。更に『空の神兵』として、皇國最初の落下傘部隊は、セレベス、チモール島に降下して、無敵陸戰隊の眞面目を發揮、或は太平洋から印度洋にかけての敵據點たる諸島嶼、或はギルバート島その他占領地守備に、その精强無比の鬪魂を發揮して、敵陣をして顏色なからしめてゐる。

各國海軍には何れも陸戰隊の組織があり、敵國アメリカには『マリン』なる陸上專門の海兵もあるが、陸軍部隊の先頭に立つて、大規模な敵前上陸を敢行したり、市街戰を展開したり峨々たる山岳地帶まで進擊して匪賊を討伐、或は人跡未踏のジャングル地帶の掃蕩戰を行ふ等、わが陸戰隊は他に類例がないのである。

この勇猛陸戰隊の目覺しい活躍を聞き偲ぶにつけて、我らの念頭を離れぬものは、その輝く歷史である。この歷史を知ることなくしては、世界無比のわが陸戰隊の傳統的精神の眞髓に觸れることは出來ない。いはんや、その必勝の祕鍵を握ることは至難と云はねばならぬ。然るに今日まで、陸戰隊多彩の歷史を傳へる書は一冊もないと云つてよいのである。玆に於て著者は陸戰隊の出現以前にまで遡つて陸戰隊發達の全貌を紹介し、その正しき理解に資せんと欲したのである。

本書は努めて史實に忠實ならんとしたのであるが、何分、處女地を開拓するに等しく、資料の蒐集調査の上に、萬全を期したとは云ひ得ず、なほ不備の點は免れないことと思はれる。この點專門家の叱聲を乞ひ、他日補正を期したい存念である。讀者幸ひにこれを諒せられんことを乞ふ。

第三十八回海軍記念日を前にして

著　者

日本海軍陸戰隊史

目　次

陸に戰ふ海兵……三
陸戰隊の濫觴……六
一、神功皇后の三韓征伐……七
二、三韓征伐以後……一〇
三、阿部比羅夫の肅愼征討……二一
四、胡蝶軍の活躍……二五
五、豐太閤の朝鮮役と水軍……三九
海軍の創設と海兵隊……五一

一、佐賀の亂と海兵隊の活躍……五七
二、臺灣生蕃討伐と海兵隊……六五
三、江華島事件……七一
陸戰隊の誕生……七五
一、西南役と陸戰隊……七六
二、朝鮮事變と十七年の變……八五
日清戰役と陸戰隊……九三
一、威海衞夜襲に魁け……九九
二、澎湖島攻略と速射砲隊の活躍……一〇二
三、臺灣鎭定戰……一〇四
北清事變……一一一

一、聯合陸戰隊重圍を突破……一一五
二、わが陸戰隊の奮戰……一一八
日露戰……一二七
一、第二軍の上陸を支援……一三二
二、陸戰重砲隊の誕生……一三六
三、樺太征討戰……一四二
第一次歐洲大戰……一四六
一、青島攻略戰……一四七
二、勞山灣の上陸作戰……一五〇
三、青島總攻擊と海軍陸戰重砲隊……一五五
四、南洋諸島占領……一五七

浦鹽警備……一六六
一、尼港事件……一七四
二、スキー陸戰隊の誕生……一八一
上海特別陸戰隊の誕生……一八四
一、滿洲事變と陸戰隊……一八七
二、上海事變と鐵血陸戰隊……一九〇
支那事變……二一二
一、上海陸戰隊遂に應戰……二一四
二、漢口攻略戰……二三一
三、廣東攻略戰……二四三
四、海南島攻略戰……二四六

五、海州攻略戰……二四九
六、鄱陽湖制壓……二四九
七、汕頭攻略戰……二五三
八、舟山列島に敵前上陸……二五四
九、その後の陸戰隊の活躍……二五五
一〇、湖南大作戰……二五九
大東亞戰爭(一)……二六二
一、グアム島攻略……二六四
二、比島截定作戰……二六五
三、ボルネオ攻略……二六九
四、ウエーキ島の激戰……二七〇

大東亞戰爭(二)

一、蘭印諸島戡定戰……二七六
二、セレベス島攻略と落下傘部隊……二八八
三、アンボン島攻略……二八三
四、バリ島及びチモール島占領……二八四
五、ジャバ攻略と陸戰隊……二八六
六、小スンダ列島戡定……二八七
七、ビスマルク群島戡定……二八八
八、ニューギニヤ攻略……二八九
九、ソロモン島奇襲……二九〇
一〇、アラフラ海域制壓……二九二

一一、印度洋諸島攻略……二九五
一二、アリューシャン兩島攻略戰……二九六
一三、マキン島反擊の敵擊退……二九八
一四、その後の大陸作戰……三〇一

— 目次終 —

日本海軍陸戰隊史

陸に戰ふ海兵

海軍の兵隊は、本來艦船に乘つて海上で戰鬪するのが立前であり、海洋をわが庭とし、平時の國防はもとより、戰時の制海權確保を主要任務としてゐる。しかし海軍と雖も陸上の戰鬪に參加しなければならぬ場合が屢々ある。即ち主要作戰に於て、海軍は陸軍部隊の先驅を承り、陸軍の上陸地點を占領確保し、その上陸作戰を容易ならしめ、或ひは現地警戒に當る海軍は陸軍の派兵が緊急事態に間に合はない場合、陸戰隊を組織して、陸軍部隊の到着まで敵と激戰を交へなければならぬのである。

海軍陸戰隊が、陸軍の先驅的任務を果した例は、戰史上、到るところに、これを見ることが出來、また現地警戒の海軍部隊の華々しい戰ひは、上海事變以來、鐵血陸戰隊の名と共に、我の胸に深く强く刻み込まれてゐる。即ち昭和七年一月廿八日、支那の抗日侮日と挑戰に端を發して戰端が開かれるや、わが上海陸戰隊は、雲霞の如く押し寄せる數十倍の敵を向うふに廻

し、陸軍部隊の到着せる二月十三日まで、不眠不休の戰ひを續け、居留民保護の重責を完うしたのである。

この時勇戰奮鬪した海の勇士の多數は、引續き原隊に殘り、その體驗を基礎に各種の研究を重ねたのであつた。この結果、土嚢陣地一つでも、實に見事な位置に、巧みに造られ、昭和十二年支那事變勃發し、日支兩軍再び上海に戰ふや、流石の頑敵も、多數を恃んで襲擊を繰返へしたが、絶對に陷し得ず却つてわが少數の陸戰隊のため擊滅されてしまつたのであつた。

即ち當時來襲した敵は支那陸軍中の一番精強と稱された蔣介石直系の中央軍五萬、これに對して日本租界を守るは、僅か三千足らずの少數の陸戰隊であつたが、激戰七十五日間、敵をして一歩もわが警備區域に足を踏み込ましめず、累卵危機の上海を守り通したのであつた。その戰鬪は陸軍の專門家ですら舌を卷いて驚いたと云はれる。

海軍陸戰隊にとつて、支那事變こそは、實に生きた猛訓練であつた。この戰ひを通じて、裝備、術力等も格段の進歩を遂げ、時に臨み、機に應じ、戰車や機械化兵器を操り、馬に乘り、陸軍の兵力と協力、或は海軍單獨で作戰し、敵の陸軍兵を相手に華々しい戰鬪を展開、市街戰はもとより、山岳戰、要塞攻略戰、或は敵地上陸作戰を敢行するなど、世界無比の陸戰隊へと

『育成長養』され、不敗の術力を保有するに至つた。この術力は、大東亞戰へ移行、各地の目ざましい戰果となつて、結實してゐる。

然し乍ら、前述の上海戰における輝く武勳の祕鍵は、第一次世界大戰の青島攻略戰、更に日露戰爭、北清事變、日清戰役、江華島事件等々の陸戰隊の活躍に求めなければならず、またその濫觴期とも稱すべき近代皇國海軍創建以前に遡つて考究しなければならぬのである。

皇國海軍陸戰隊の濫觴はいつ頃か、更にそれは如何なる徑路を辿つて變遷發達して、今日に至つたか——。海軍陸戰隊の歷史はまた一面皇國海軍史の側面をなすと共に、わが海外發展史でもある。以下篇を改めて詳述することとしたい。

陸戰隊の濫觴

海兵は海上においてのみ戰ひをするものでないことは、前述の如くである。艦隊行動のあるところ、常に海兵の陸戰が伴つてゐる。從つて、わが陸戰隊の濫觴を廣義に解すれば、まづ神武天皇の御東征に求めなければならないと思ふ。即ち・神武天皇は甲寅十月五日、水師を率ゐ給ひて日向國を發せられ、速吸門を經て筑紫國兎狹（筑前遠賀郡蘆屋町とも云はれる）に一ケ年止まらせられ、それから更に戰備を整へさせられて海上を御東進、阿波國多邪理宮（廣島市附近と云はれる）に七年間軍を留めさせられ、後更に東進して吉備の高島宮に八ケ年（三ケ年とも云はれる）滯留せられ、そこでその地方を平定せられつゝ前進を完了せられてから、更に軍を東に進め浪速を經て大和に入らんとせられたが、長髓彥等に妨げられ、再び舟師を率ゐて熊野より御上陸、長髓彥および、土蜘蛛等を征伐せられ、附近一帶を平定せられて畝傍山の東南橿原の地に皇居を定めさせられたのである。

この神武天皇の御東遷に關し詳細な點については史家の間に一致を見ないが、天皇が水軍によつて御東遷を實行し給ふた點については、全く疑ふ餘地のない事實であつて、水師（海軍）の陸戰はここに見ることが出來るのである。

神武建國から約五百年間、水師の活躍に關する記錄を缺くため、その狀態を確めることは出來ないが、海事は漸次發達し、朝鮮、支那との間の交通が開かれてゐたことは想像に難くない。仲哀天皇八年の熊襲叛亂に端を發して決行せられた　神功皇后の三韓征伐（紀元八百六十年）、及びそれに續く半島の勢力爭ひを繞つて行はれたわが救援においては、水師の活躍が相當重要な役割を果してゐる。

一、神功皇后の三韓征伐

神武建國三千年、金甌無缺なる皇國において武威を海外に輝した國際戰の序幕を開いたのは神功皇后の三韓征伐である。

景行天皇十二年（紀元七四二年）九州に熊襲が叛亂を起した。熊襲とは、天孫民族でない他の

民族の總稱で、海外より移住し、日向・大隅・薩摩の地にゐて、　天皇の統治を受けるのを好まず、反抗の態度を執つた。　天皇には九州に赴かせ給ひ各地を巡幸、賊徒を平らげ給させたが、同廿七年又も叛いたので、皇子の小碓命（日本武尊）が御征討あらせられた。

賊將卑彌呼は　仲哀天皇の八年（紀元八五九年）新羅に使を遣はし、新羅と漢とに援助を求めた。新羅は朝鮮半島を制覇し、その勢力を日本に伸ばし、兵を派してこれを援助した。

かくして　仲哀天皇の熊襲親征となつたのであるが、　天皇は翌九年二月六日俄に崩御あらせられた。　皇后は喪を祕し　天皇の御遺志を繼がせ給ひ、國内における熊襲等の叛賊を平ぐるには、これを敎唆せる背後勢力たる新羅國を征して、禍根を斷つことが先決なりと、御決意あらせられたのであつた。　皇后は大臣武内宿禰と御相談遊ばされ、別將を遣はして熊襲を討たせ、御親らは水軍を率ゐて新羅征討の御用意をなされたのであつた。

まづ四月から輸送機關の兵船を建造するため長門國舟木山の木材を伐採し、豐前國宇佐において四十八隻を建造され、一方水軍の强弩や兵甲を練ると共に、海人烏麻呂と名草を派遣し日本海を偵察せしめられ、更に九月諸國に命じ船舶を集め、着々と軍旅を整へさせられた。

かくして　皇后御親ら斧鉞を執り、陣容堂々、筑前の深江から御出發、十月三日朝鮮青島の

南海岸迎日灣に入り、全軍無血上陸に成功したのであつた。新羅は兵一千を、吐含山下の斧峴東原に進めて、われを邀擊しようとしたが、わが水軍のため忽ち擊退されてしまつた。新羅軍は、その武威に畏れて姿をかくしたので、皇軍は蕭然として進み、鷄林の半月城に入つた。

新羅王の奈解は、蓬頭にて自然木の弓を携へ給ふ　神功皇后の御前にひれ伏して罪を謝し、朝貢を誓つたので、皇軍は十一月凱旋して唐津灣に入つた。この水軍の活躍は今日の海軍陸戰隊を彷彿させるものがある。

その動機の純潔公明、用意の周到、軍令の嚴肅、陣容の堂々、態度の雄々しさは　天皇の軍隊の威力を遺憾なく發揮、たゞ一回の交戰で、皇威を輝かし、その餘威は隣國の高勾麗、百濟を歸順せしめ、新羅同樣に朝貢をなさしめるに至つた。そればかりでなく、漸く脅威を逞うしようとしてゐた鮮卑民族、漢民族も恐れをなして皇土に襲來しようとする野心を捨て、これがため皇國内の叛徒は海外と握手する道を失ひ、逼塞してしまつた。正に　皇后の明は、萬里の外に達し、　皇后の智は千載に遍く、國運はこれによつて大いに進むこととなつたのである。

二、三韓征伐以後

神功皇后は、天皇幼くおはします爲萬機を攝行せられたので、半島三國は長く朝貢を續けてゐたが、皇后攝政四十九年に新羅朝貢の不正を發覺、千熊長彦を問罪使として遣せられた。これに對し新羅は服さないので、荒田別、鹿我別を將軍として、久氐等を率て、再び新羅を征伐せられた。又同六十年　皇后は大矢田宿彌を任那日本府の將軍として三韓鎭撫守護の任に當てさせられたが、さきに日本兵のため殺された新羅の徐弗耶の妻が、大矢田を殺したので、三度び兵を派して征せられた。これらの征討軍は前回同樣水軍を主とするものであつた。

應神天皇は母后の御遺志を繼がせられ、新羅より來た船匠を使用して攝津の渡部、伊勢の員辨などで大船を造り、諸國に詔して船舶を造らしめられた。その最大のものには、伊豆で造られた枯野と稱する長さ十丈のものがあつた。多數の船舶を諸國の港灣に碇泊せしめて、一令のもとに大行動をなす準備を整へさせられた。之は朝鮮半島諸國が叛いた場合に對する國防計畫で、その航海造船事業の盛大なことは上古史中稀有のものであつた。諸國よりの船舶獻上五百

隻、航運に從事する海員は萬をもつて數へる狀態で、今日で云へば海軍省の如き監督機關海人部を置いて、その總裁に皇子大山守命、副總裁に阿曇連、凡海連を任命された。海人部に屬する海員は當時におけるわが海軍の勢力を形成したものであつて、常備水兵ではなく、應變臨機、或は水兵となり、或は陸兵となり、主將の命に從つて動いた。いはゞ組織的な水軍陸戰隊とも稱すべきものであつたのである。

朝鮮半島の諸國は、わが國威に恐れて朝貢を續けてゐたが、機に乘じ、時に應じて譎詐を行ひ、叛服恒なく、貢獻、聘問、應接、問罪、膺懲など、交渉は絶え間なく、その度毎に水軍が活躍してゐる。應神天皇の御代にも高勾麗は支那の魏と握手し、新羅は高勾麗と結び百濟を攻めんとしたが、百濟は日本の援助によつて、事なきを得てゐた。

然るに百濟第十五世沈流王の死後、叔父の辰斯が國を簒つて王となり、新羅、高勾麗と結び日本に反抗せんとした。これが露見して、日本より紀角、羽田矢代、蘇我石川、平群木菟などが水軍を率ゐて征討、在留七年、百濟國民は狗原に逃げた辰斯を捉へて殺したので、紀角は阿花を立てて凱旋した。高勾麗はその隙に乘じ勢力擴大を企て、百濟を攻め、忽ち要地を攻略した。阿花王もこれがため戰死した。そこで次子の訓解が國政を執り、日本にゐた直支の歸る

のを待つたが、訓解の弟磔禮は兄を殺して自立した。日本は兵五百をもつて直支を護衛して歸國させ、王位につかしめ、國政を刷新したのであつた。

仁德天皇は（應神天皇の跡を承けて國力の充實を計り、對韓策も平穩に行ひ給ふた。しかし五十三年新羅が朝貢しないので、竹葉賴を遣はして問罪せしめたが從はないので、更に田道に水軍精鋭をつけて派遣した。新羅は勇將百衡をして邀へ擊たんとしたが、田道はこれを破つて降伏させた。その後　履仲・反正・允恭・安康の四朝は平穩無事に過ぎたが、　雄略天皇の御代となつて國の內外は頗る多事となつた。

任那國司の吉備田狹は新羅と結び、謀叛を圖るに至つて、半島におけるわが國の勢威は漸く影薄くなり、反對に新羅は强盛となつて、外交工作を弄して貢物を減じ、七年も朝貢をしなかつた。そこで天皇は吉備の海部（當時の海軍司令官）の直赤部と、吉備上道臣田狹の子である弟君とに勅して新羅を討たさせ給ふた。新羅は高勾麗と結託して日本に敵對しようと圖つたが、新羅が疑ひを起し、高勾麗の兵を殺したため、高勾麗は新羅を攻め、筑足留城を包圍した。

こゝにおいて新羅は飛使を任那の日本府に走らせて救援を乞ふた。任那日本府の行軍元帥であつた膳斑鳩は兵を派遣して新羅を援け、大いに高勾麗を擊破した。かくの如く新羅に恩を施

したにも拘らず新羅はなほ朝貢を怠るので、　天皇には親征し給はんと志されたが果されず、九年三月、紀小弓、蘇我韓子、大伴談、小鹿火などに命じて征討の軍を派遣された。

諸將は新羅を攻め行城を陷れ、進んで喙の地に進んだので、新羅王は大いに驚いて數百騎を從へて遁走した。紀小弓等はこれを追擊して破つたが、敗殘兵が大擧して反擊し激戰となり、紀小弓、大伴談は相次いで戰死した。紀小弓の子、紀大磐は急に兵を率ゐて新羅に急行したが小鹿火と蘇我韓子などと意見合はず、日本軍は統一を失つて歸朝してしまつた。

この時、高勾麗は北に靺鞨を略し、南に新羅を侵し、その勢ひに乘じ百濟を攻めこれを殆ど滅亡同樣にしてしまつた（日本を憚つて滅さなかつた）。蓋鹵王はこの戰で急逝したので、弟の文周が王位について國家改造を行つたが、重臣が權を弄し、解仇に弑せられてしまつた。文周の子の文斤が即位したが、在位二年で病死したので王位につく者がなくなつた。

そこで日本は來朝中の腆支王第二王子未多に軍資と武器を與へ、筑紫の兵五百をつけて、護送して即位させた。これが東城王である。日本は更に安致臣と馬飼臣とに舟師（水軍）をつけて派遣、百濟を扶けて、高勾麗を伐ち、吉備臣尾代をして新羅を征伐させたので、百濟は漸く恢復の機運に向つたが、王は暴威を揮ひ、その臣苟如のため弑せられたので、蓋鹵王の子の斯

摩が即位、武寧王と稱した。

繼體天皇六年十二月（紀元一一七二年）百濟の武寧王は使節を日本に遣はし、任那國の上哆唎、下哆唎、娑陀、牟婁などの割與を乞ふた。當時百濟の北方は高勾麗が全盛を極めてをり、南は日本の縣邑があつて、南北に伸びる可能性がなかつたので、日本に請ふて南の地を獲て、北守南進の政策を執るべく企圖したのであつた。日本では哆唎の國司である穗積臣押山の奏請によつて、大連の大伴金村は廟議を決して、同七年十一月これを割讓し、已文帶沙の地である多沙津（蟾津江口河東縣）をも與へた。

百濟の南進政策の成功を見た伴皺國（智異山麓丹城附近）は、日本に蟾津江附近の地を要望した。日本はこれを許さなかつたので、伴皺國は已呑帶沙に城を築いて烽候を置き、日本に對抗して、爾列比麻須比に築城して兵を集め、勢ひ猖獗を極めるに至つた。

そこで日本は物部連に兵五百をつけて征討させたが、敵はなか〳〵手強く、帶沙の陣營を燒かれ、物部連は、僅かに身を以て汶慕羅島に逃がれた。百濟は物部を已汶に迎へて優遇し、洲利耶爾將軍を物部に副へて、已汶の地を賜つたことを感謝して好を結んだ。次いで、新羅亦任那を侵すの報に接したので、日本は近江の毛野臣に、兵六萬をつけ出征させた。新羅はこれを

知つて、筑紫の國造磐井が叛逆の心あることを見拔いて賄賂し、毛野の軍の渡韓を遮らしめやうと圖つた。

こゝにおいて朝廷は物部麁火を派して、磐井を征伐平定せしめたので、毛野の軍は無事任那に渡つた。毛野臣は安羅の久是木羅に居つて政令を施したが、その處置がよくなかつたため任那人は百濟と聯合して擾亂を起した。そこでわが朝廷では更に目頬子を遣して、毛野臣を召還し、筑紫の娜津（今の博多）に官家を置いて、對韓策を行ふことにした。これが太宰府の濫觴である。

新羅第廿三世法興王は日本の勢力圏内の任那を攻めた。天皇は大連大伴金村に詔し、その子の磐と挾手彦とを派遣し、任那を救援すべしと命ぜられた。二人は勅を奉じて筑紫に至り、兄の磐は娜津の官家にあつて對策を講じ、弟の狹手彦は任那に渡つて戰亂を鎭めることとなつた。しかし任那の勢ひ强く、任那の日本府所在地の加羅は遂に新羅の略取するところとなり、次いで南加羅、碌、卓淳、已呑等も奪はれた。

こゝにおいて日本は對韓政策を改め、百濟をして任那を復興させる策を執つた。百濟の聖明王は大いに盡力するところあつたが成功しなかつた。そこで　欽明天皇四年十一月（紀元一二〇

三年）津守連を派遣し、任那復興を宣せられた。同六年三月日本は膳臣巴提便を派遣し、新羅を伐ち、城を築いて百濟をして高勾麗を防備させた。

高勾麗は欽明天皇九年、濊人（ツングース族の一種）と共に百濟の獨山城を攻めた。この時新羅の眞興王は百濟を援け、高勾麗軍を破つた。百濟は日本に援兵を求めたので、日本は三百七十人を派して援けた。更に高勾麗は同十一年再び百濟を攻め、馬津城を圍んだ。百濟は又も日本に援兵を乞ふて來たので、日本は大伴狹手彦を大將軍として兵數萬を以て赴援させ、高勾麗軍を破り、王宮に攻め入つて還つた。然るにその後、新羅が高勾麗と同盟したので、百濟は已むなく、平壤及漢城の地を棄てゝ日本の援兵と共に新羅を攻め函山城（今の沃川）を圍んでこれを占領した。しかし聖明王は虜となつて斬られ、その子余昌が即位した。これが威德王で、同十七年、威德王は弟の惠を日本に派し援兵を乞ふたので、日本は兵仗良馬を與へ、阿倍臣、佐伯連をして護送し、百濟を援けて新羅を攻めたのであつた。

欽明天皇の二十三年正月、新羅は兵を擧げて任那を滅し、日本府をも倒すに至つた。天皇は、紀男麻呂を大將軍として河邊瓊缶を副將軍として問罪の師を起され、男麻呂は新羅軍を破つたが、瓊缶は敵に俘虜となり、調伊金儺も捉へられて殺された。その子の舅子は父の屍を抱

いて死し、妻の大葉子は擒にされた。かくして任那の日本府は、神功皇后御外征後三百六十年にして遂に全く滅亡するに至つたのである。

新羅は第廿六世眞平王時代、最も隆盛を極めた。而して彼は支那の新興勢力隋と結び、日本及び百濟に對抗せんとし、更に唐と結び　齊明天皇六年（紀元一三二〇年）唐の蘇定方を大總管とし、劉伯英、薫寶亮と新羅の金仁問を副總管として、水陸十三萬を以て百濟を侵略した。

蘇定方の引揚げと同時に、百濟の遺臣は一齊に蜂起して恢復に立ち、日本に援けを請ふた。齊明天皇にはこれを容れさせられ、七年三月廿五日大蘇を九州筑紫に進め給ひ、軍兵備を整へて駿河國に令し船艦を造らしめられた。而して、　天皇には戰ひが長期に亘る御覺悟のもとに筑前國朝倉郡宮野村字須川に橘廣庭宮を建てさせられた。かくて大陸平定の軍兵を召募され、將に征途に上らんとせられた際、御病氣に罹らせ給ひ、七月廿四日卒然として崩御あらせられた。

諒闇中であるが、軍國火急の際なので、皇太子中大兄皇子は服喪十二日の後、八月十三日磐瀬行宮（筑紫郡の岩戸又は高宮とも云ふ）に到り、素服にて軍政を聽斷し、阿倍比羅夫を後將軍として、河邊百枝臣、物部連熊などを從へさせ、戰艦百七十隻を以て百濟救援軍を派遣せられた。これが第一次出兵である。

更に九日、豐璋に職冠を授け、狹井連檳榔、朴市秦田來津等に兵五千を從へさせて、娜大津より第二次出兵をさせられた。翌年正月、持久戰を策し數多の軍需品を輸送せられた。次で後續部隊送られ、更に同年三月、上毛野君雅子を陸將とし兵二萬七千を以て赴援せしめ、かくて前後五回に亘る出兵がなされたのであるが、その先遣隊は水軍のいはゞ陸戰隊であつた。

日本から乘り込んだ豐璋は、禰制二年五月、百濟に歸着して王位に即き、都を僻城(今の金堤)に置いた。唐の蘇定方は大軍を以て增援、劉仁願と戮力させ、また唐の高宗は、謀將李世勣の大軍を向け、新羅の武烈王は嗣子の文武王と名將金庾信とに增援隊をつけて派遣した。百濟の福信等は、眞峴、臨江の高險に據つて、彼我兩軍は互角の勢力を以て對峙した。日本軍の作戰は、豐璋をして周留城と白村江口の要害を固守せしめて敵軍を引寄せ、別働隊を以て新羅軍を衝き、更に西北に躍進して敵軍を脅かし、奔命に疲れさせて戰鬪力を減殺し、新鋭の日本軍は白村江に現はれて、周留城を救ふといふ才略であつた。

然るに豐璋王は、糾解の讒言を容れて最も信賴すべき良將たる福信を捉へて斬り、日本軍の未だ到着しない前に、城を出て白村江に到つて、後ち高勾麗に走つた。唐羅軍は、百濟の內訌を知つて與し易しと見て、八月十三日、周留城に殺到してこれを占領、百七十餘の戰艦を以て

白村江に浮城をなし、水陸相擁して戰備を整へ、日本軍の來るのを待つといふ有樣となつた。

白村江といふのは今日の白馬江であつて、公州の錦江と、良丹浦及び金剛江と合流して、扶餘の扶蘇山下を流れる河川である。この戰ひに於て、唐軍は劉仁軌を將とし、杜爽を副將として、百濟の義慈王の子で唐に降伏し司稼卿となつた扶餘隆を參謀官として、戰艦百七十隻に、多量の糧食、物資を搭載して、熊津江より進み、周留城に向ひ、陸上には新羅軍が廿八將をもつて各地に配備守備し、劉仁願と孫仁師とが、進歩した築城術によつて防禦工事を施し、互に連絡を保ち、統一した作戰計畫の下に命令一途に出る行動をとり、その總兵力七萬乃至十萬を以て攻勢に出たのである。

これに對し日本軍は豐璋王の誤りで、當初の作戰計畫に大齟齬を來してゐた上に、前中後の三將軍は各對等の位置にあり、全軍を通じての參謀官もなく、軍隊といふよりは一つの集團として進み、兵力も二萬七千の少數であり、兵船兵器も劣り、敵の士氣、軍律、陣形も研究せず攻擊據點の選擇もせずに、曾つて經驗したことのない國際的戰鬪に臨んだのである。

日本の前將軍は上毛野雅子と間人大盡、中將軍は巨勢神前譯語と三輪根麿、後將軍は阿倍引田比羅夫と大宅鎌柄で、この六將は六月熊津口を發して新羅軍の占領してゐる沙鼻岐奴江の

二城を略取したが、先鋒隊として白村江に當つた我隊は、八月廿七日猛然敵を衝き、白兵戰、肉彈戰を演じ、突擊すること四回に及んだが、衆寡敵し難く、上陸することが出來なかつた。

翌廿八日は陣容を改めて火攻めを以て敵艦を燒き、先を爭つて進んだが、隊伍大いに亂れ、唐軍の左右挾擊に遇つて、須臾の間に水に溺れ死ぬる者夥しい數に上つた。朴子秦田來津は天を仰いで歎じ、切齒して戰ひ、敵の數十人を殺して戰死し、わが軍は最後の一兵になるまで退かず、屈せぬ健鬪を行つたが、遂に二萬有餘のわが生靈は犧牲となつた。

こゝにおいて日本の諸將は弓禮城（今の全羅南道原府求禮城）で殘餘のわが兵と、百濟の王族餘自信及び達率木素貴子、谷那晋首等を收め、九月廿五日日本に向け歸還したのであつた。

白村江における我が救援軍の苦戰は、わが國に多大の刺戟と教訓を與へ、進取的な任那日本府は、變じて退嬰的となり、攻勢は轉じて守勢となつて、神功皇后の三韓征伐以來、幾度か繰返へされた半島への出兵は、茲に一應終止符を打つこととなつた。

半島への出兵は何れも領土侵略の目的からではなく、悉く國際信義を破る非人道的行爲に對して膺懲を加へる道義的信條より出た正義の軍であり、また弱國の窮狀を憐れみ、その民族の獨立を助けるため多大の犧牲を拂ふ仁義の軍であつた。

上古のこの戰ひを見ても判るやうに、日本の國際戰においては非人道的の行動は更になく、時に勝つもあり、敗けるもあるが、皇軍には三種の神器の鏡（公明正大）璽（仁愛）劍（正義）の傳統的民族精神が發露してゐるのである。

上述の半島出兵の皇軍の悉くが水軍と云ふことは出來ないが、その先遺を承つてゐるのは常に水軍であり、海戰陸戰隊的な活躍の跡を殘してゐるわけである。而してこれらのうち水軍としては白村江の激戰が最も大きい。敗れたりとは云へ、最後の一兵まで戰つたといふ敢鬪精神は、今日脈々として海軍陸戰隊に傳承されてゐると云へよう。

三、阿部比羅夫の肅愼征討

白村江の戰ひによつて、支那・朝鮮は大陸聯合軍を結成して、わが邊土を窺ふに至つたが、天智天皇は全國に關塞・斥候・防人・驛傳・鈴契を設け、兵を練り武を講じ、馬を牧し、或はまた主船司を置いて航路の安全を期する等國防總動員態勢を整へられ、國民の熾烈なる敵愾心を誘起せしめられたので、彼等は乘ずる機會がなく、爾後六百十餘年の間、大陸との國際關係

は平穩無事であつた。實に　天皇の御英明は、わが國史に燦として輝き後世のものをして讃仰せずには居られない感を覺えしめる。

半島への數次に亘る出兵の經驗によつて造船術は著しく發達し、巨船の製造も出來、航海も開け水軍の練武も進んだ。日本は神功皇后以來、西海において海上權を擴張したが、北海においては、日本武尊が東夷を征されたものの錦旗の向ふところは金華山沖までに止つてゐた。それは、陸上に道路なく、海上に船舶なく、集團的に兵力を進め得なかつたからである。然るに上述水軍の組織が發達すると共に、漸く北海へ乘り出す機運が熟して來たのであつた。

齊明天皇四年四月（紀元一三一八年）越の國守阿部比羅夫は、船艦百八十隻を敦賀に集め、水軍を整へて、北海宣撫に出發した。まづ初めに鰐田（今の秋田）・渟代（今の能代）に渡り、進んで津輕海峽の有間濱に到つて、軍備を整へて渡島に着船した。この時、北海にはアイヌ民族と肅愼民族とが居り、アイヌより肅愼の勢力が强大であつた。比羅夫はまづアイヌを宣撫して後、肅愼を伐ち、生羆二頭と羆皮七十枚を獲て歸つた。

同五年三月、再び軍を起して北海に渡り、飽田・膽振・渡島を平定して肉入籠に行き、郡領を後方羌蹄（後志地方）に置き、樺太までを境とし、肅愼を攻め、俘虜四十九人を獲て歸つた。

同六年三月、三度び舟師二百隻を率ゐて、陸奥及渡島のアイヌを嚮導として肅愼を討つた。肅愼は大河の河上にあつて反抗するので、柵を攻めて戰ひ、六十人を俘虜として凱旋した。ここにおいて北海は全く鎭定して皇化に浴し、わが本土と北海の航路が開けたのであつた。

肅愼とは滿洲一帶を總稱する地名又は民族の呼稱であつて、支那の堯舜時代から魏晉時代まで滿洲に國をなした民族であつた。わが　崇神天皇の御代、扶餘族の高勾麗が興つて、滿洲の政權を握つたため、彼等は沿海州から樺太・北海道方面に移り住むやうになつたのである。肅愼の名が日本の史上に見ゆるのは　欽明天皇五年十二月（紀元一二〇四年）であつて、佐渡の御名部崎に肅愼船が來たのが最初である。阿部比羅夫が征討した時は、肅愼の故地には高勾麗が威勢を極めてをり、肅愼は長白山脈の北方にゐて、常に船を以て日本海を渡り、わが北海道からベーリング海峽あたりまで航海して歩いたやうである。比羅夫の征討は殆んど宣撫行で、陸戰的な華々しい戰はなかつたが、水軍の威力が物を云つたので、案外早くその目的が達成されてゐる。

天武天皇五年十一月（紀元一三三六年）には肅愼人七名が、新羅の沙喰金清平に從つて來貢、その後、肅愼とわが國とは長らく親交關係を續けた。

白江村の戰ひにおいて唐の艦隊と戰つて失敗して以來、前述の如く、外寇の恐るべきを自覺し陸上に於る防備を嚴にしたが、それと共に大いに海軍の擴張計畫を實行に移した。　元明天皇の和銅二年（紀元一三六九年）越前・越後・越中・佐渡の諸國に命じて、戰艦一百隻を造らせ聖武天皇の天平四年（紀元一三九二年）には、東海・西海・東山・山陰の四道に、百石以上を載積する凡ゆる船を造らしめて兵船とし、同十八年には安藝國に大船二隻を造らしめた。　淳仁天皇の天平寶宇三年（紀元一四一九年）屢々朝貢を缺いてゐた新羅が兵を派してわが國と事を構へるとの說があつたので朝廷は再び新羅征討の議を定め諸國の壯丁を太宰府に集めて大いに水陸の練兵を行ひ、次いで百濟敬福、吉備眞備、惠美朝獵を節度使として勅を各道に下し、三ケ年を期して軍艦を造らせ兵士の募集をなさしめた。これがためわが海軍は非常に强大なものとなつた。當時の水軍の狀況を見ると、

◎百濟敬福の所管（南海道十二州）

軍船百二十一隻・兵士一萬二千五百人・水手四千九百三十人

◎吉備眞備の所管（西海道八州）

軍船百二十一隻・兵士一萬二千五百人・水手四千九百三十人

◎惠美朝獵の所管（東海道十二州）

軍船百五十隻・兵士一萬五千七百人、水手一萬七千二百八十人

即ち軍船の合計は三百九十二隻、兵士四萬七百人、水手二萬七千百四十人に達し、別に山陽道百六十一隻・山陰道百十五隻・北陸道八十九隻・通譯官數十人、船は一隻百五十人乘せ得たといふから相當の勢力である。而して太宰府、攝津職及び沿海の國々に多數の官船を配置、常に航海の訓練を重ねると共に水軍の陸戰的訓練を行つた。しかし　天皇は御雄圖を果されずして位を去り給ふた。この時代からわが海權は漸次に衰微したのである。

四、胡蝶軍の活躍

淳仁天皇御退位以後、所謂平安朝の一時代を劃し、唐の物質文化を模倣して、風流閑雅を尊び、尙武の氣象はとみに銷沈した。國民は泰平苟安の夢に耽り、航海造船の業は漸く頽廢に傾いて行つた。かくして朝鮮半島諸國も、日本に對し輕侮心を起し、來貢を絕つのみでなく、却つて日本に攻勢の態度をとるやうになつた。　淳仁天皇の新羅征討が決行されるに至らなかつ

た爲、新羅は增々つけ上り、朝貢を絕ち、　嵯峨天皇の弘仁四年（紀元一四七三年）新羅國の兵船五隻は肥前の小近島に來襲、島民九人を殺し、百一人を虜にし、財物を掠奪して引揚げた。同十一年新羅の歸化人七百餘が駿河遠江にて叛亂し、伊豆の穀殼を奪つた。　清和天皇の貞觀十一年には新羅船二隻で筑前の博多に襲來、　宇多天皇の寬平六年九月（紀元一五五四年）新羅の兵船四十五隻が二千五百人を以て對馬に來た。

一條天皇の長德三年（紀元一六五七年）頃、朝鮮半島は旣に百濟も、新羅も、高勾麗も滅亡し高麗一國が全盛を極めてゐたのが、同年兵船を以て筑紫を襲ひ、更に翌四年貴賀島に來襲した。

後一條天皇の寬仁三年三月（紀元一六七九年）には滿洲の渤海國を倒して滿洲に國を建てた元耶律阿保機が、戰艦五十餘隻（五千人）を列ねて來襲、對馬を占領、筑前の今津附近に上陸して民家を燒き、財物を襲つて男女四五百人を捉へた。更に早良川の河原三郎浦に上陸、船越津を襲ひ、肥前松浦郡に殺到した。これに對し肥前の人、源知（松浦氏第十三世）が郡內の兵を用ひて戰ひ、太宰府また水軍を派して赴援し、これを擊退したが、暴掠の被害を受けたのは對馬・壹岐・肥前・筑前の四ケ國の一部で虐殺者三百八十七人餘、俘虜千三百八十人（何れも肥前を除く）その大部分は殺されたり病死したりしてゐる。これが刀伊賊入寇と稱される（刀伊とは刀夷と書き朝鮮語で北方の夷狄といふ意味）。

寬仁四年閏十二月には南蠻船十餘隻が、薩摩灣內に來襲して擊退された（多分これは契丹民族であらうと推定される）。その後二百五十年間は外船の來寇はなかつたが、鎌倉時代に入つて元の忽必烈は高麗人趙彝の建議に動かされて日本征服の野望を實現せんとした。彼は再三再四、日本に降伏勸告を行つたが、日本はその都度默殺し、對外强硬の態度を堅持したので、忽必烈は龜山天皇の文永十一年十月三日（紀元一九三四年）船艦九百隻、總兵力三萬七千人、高麗軍を嚮導として征日軍を進發させた。十月五日對馬を、同十四日壹岐を侵し、同十七日には肥前の西北浦に侵入した。松浦黨の奮戰に手を燒き、敵は筑前に向ひ、絲島郡今津灣に入り、二十日未明長濱沿岸に六、七千の兵を上陸せしめ激戰を展開、夜に入つて敵は疲れ矢盡きて船艦に引揚げたところへ神風が起り、二百餘隻の船が沈沒、溺死するもの夥しい數に上り、敵は錨を拔いて遁げ去つた。生還しないものは一萬三千五百人（全軍の三分の一）であつた。

文永の役に懲み、鎌倉幕府は敵の來寇を待つより進んで外征し、元を討たんと積極的戰備に乘り出したが、元軍は再び陣容を整備して來襲する準備にかゝつたと知つた北條時宗は、急

に方針を變へ、攻勢から守勢に轉じた。

後宇多天皇の弘安四年五月（紀元一九四一年）忽必烈は艦船千五百隻、總兵力十四萬を以て再度の遠征軍を進發させた。我が軍は既に博多を中心として左右十三里に石壘を構築し、これに備へてゐたので、元軍は、前回の如く上陸することが出來なかつた。わが兵船も出擊してよく戰つた。七月に入るや又もや神風が起り、敵船は激浪のため相次いで覆滅、流屍は潮流に漂ふて水面を蔽ふ有様で、敵は全く戰意を失つて遁げ走つた。元軍總兵力十四萬のうち、東路軍の生還二、三萬、江南軍の死者約八割、わが西海に生命を失つたものは十萬以上であつた。忽必烈はなほも懲りず第三次征日軍を計畫したが、實現する前に病死してしまつた。

元寇の役以來、わが國民の間には退いて守るよりは進んで攻むるに如かずとの敵愾心が旺盛となつたが、鎌倉幕府はそれを組織する術を知らなかつた。即ち、沿岸防備は益々嚴にしたものの、海上防備の主體たる水軍の建設には何等の策も施さなかつたのである。かくして數次に亘る外侮に、憤懣やる方なき國民の一部は、個々に、或は集團的に、對外行動に乘り出すに至つた。

この集團を支那で倭寇乃至胡蝶軍と呼んだのである。この行動は國家の手によつて組織したもでなく、個々別々に行ひ、連絡も統一もなかつた。かうしたものは、胡蝶軍の起つた前にもあり、高麗時代にも、南宋時代にも、朝鮮と支那の沿岸を荒れ廻つた。

しかし最も猛烈に武力を揮つて活躍したのは、建武中興時代から室町時代の末期にかけての二百八十一年間である。而してこれは單なる海賊ではなかつた。中には海賊を專業とするものもあつたかも知れないが、相當の家柄の者もあり、學識ある者もあり、建武中興時代の忠臣も戰場を馳驅して武勇の手腕を現した勇士もあり、海賊の搖籃地瀨戸內海の豪族もあり、種々雜あり、多であつた。

しかし何れも最初敵愾心から、更に下つては日本の孤島に寵居することに滿足せず、外に向つて力を伸ばさうといふ雄心に燃えて動いたのであつて、彼等は私利私慾のための物質本位の單純な海賊ではなく、その活動によつて、大和民族が如何に勇敢であるかを海外に認識させ、變則ではあるが、これがため、失墜した國權は幾分か恢復することが出來た。

彼等は尋常の場合は貿易業者となり、有事の場合は胡蝶軍で、常に武裝した航海者であつた。わが商人も、この航海者に從つて支那、その他の地方に渡航して貿易を行つたので、わが海外貿易は、彼等の活躍と共に大いに發展し國力を膨脹せしめ、國運を伸張した。

徒手空拳、輕舟を御して萬里の波濤を乘り切り、三尺の日本刀一本を賴りに荒れ廻つた意氣は、正に壯とすべきで、彼等の活躍は必然にわが造船業・航海術・海戰法・陸戰を發達せしめ、後年における水軍の素地をなした。彼等は外國の造船術・航海術を研究し、船は二本以上五本の帆柱を使用、船底を二重として、浪を能く破るやうに構造し、糧食の貯藏・應急衛生・水路探檢・天文風向などを研究して、航海に練達した。スクリュウの觀念などは歐洲よりも早かつたやうだ。戰鬪はまことに巧妙で、常に偵察を行ひ、防禦の手薄な地點に上陸攻擊したので、少數で多數の敵を破つた。

元寇の役後、九州等の邊民が敵愾心に燃えて朝鮮沿岸に出沒した頃の船は、大船で廿八尺乃至卅尺で四十人を容れ、中船は廿六尺乃至廿七尺で三十人を容れ、小船は廿五尺以下で二十人位であつたが、天文年間になると、一隻に五百六十二人を載せた。造船の發達と共にわが國の水軍も次第に整備し、水戰が流行し、室町時代に至つて水戰の技術、兵船の造り方、陣形の得失、航路視察、天候風向などを研究し、後には自家の見を立て、一流の戰術を考案するに至つた。即ち村上流・三島流・野島流・磐井流・一品流・菅流・逸見流・和泉流・甲州流・九鬼流・川上流などがあつた。大將は全體の司令官で、その乘船には多數の乘組員があり、長臣・船奉

行・軍奉行・旗奉行といふものがをり、船奉行は副司令官であつた。次に大船頭（船長）・小船頭（士官數名・中に航海長・楫取頭・矢倉者等の分隊長）、次に千索丸（鳶口・熊手にて敵船に進む）、次に鎖鋏役（鎖又は綱を敵船に投げかける）、次に大筒係・小筒係・醫者・船釣合直役（荷積する船大工・鍛冶・水夫）などがあり、さながら今日の艦艇のやうな編成ぶりであつた。

朝鮮、元を襲擊

元寇役の弘安四年から永祿五年（紀元二二二二年、桶狹間戰の直後）に至る二百八十一年は、わが邊民の對外活躍の時代であると云へよう。乘船はバハン船、或は八幡船とも云ふ。最初は九州沿岸のわが國人が、屢々期鮮、又は元軍に惱まされたので復仇の念禁じ難く、元寇の役後、頻りに船舶を造り、航海術・海戰方法を練習し、まづ朝鮮半島の各地を攻めた。常に朝鮮海峽の海上權を把握して、巨濟島・古今島・馬山浦の要所を根據地として、全羅・慶尙・揚廣・江原・咸鏡の諸道に進擊した。

その活躍は、大舟團を以つて敵地に上陸し、或は敵前上陸を敢行、或は陸上要地を占領し、或は敵の陸上部隊と交戰するなど、國家の手によつて統率されたものでないことを除けば、邊

民の集團とは云ひ乍らその戰鬪方式は昔の水軍陸戰隊の觀があつた。最も激しく進攻したのは正平五年（紀元二〇一〇年）から天文年間までの二百年であつた。これを年代順に示すと次のやうになる。

（一）徳治二年、わが九州の邊民初めて、元の慶元路を攻め城を陷れて燒く。

（二）正平五年、吉野の士、高麗の巨濟島及び合浦を攻む。また順天府を襲ひ諸郡を脅威。

（三）同六年八月、船百三十隻にして高麗の諸島を襲ひ南陽府を脅かす。

（四）同七年、南海縣を襲うて彼が水軍を走らせ、江陵・全羅二道を攻めて、到る所敵するものなし。

（五）同九年、全羅道を襲ひ、船四十餘隻を捕獲す。

（六）同十年、半島西南海岸を襲ひ、船二百餘隻を捕獲。

（七）同十一年、喬桐を襲ひ、李玄收、李蒙古の二將軍を擊退。

（八）同十三年、角山を襲つて火を放ち、船三百隻を燒きその水軍を破る。

（九）同十四年、全羅道を襲つて、その追捕使と戰ふ。

（十）同十五年、全羅・揚廣二道を襲ひ、十餘縣を燒き、江華島を攻めて三百餘人を殺し、米四萬俵を鹵獲。

（十一）同十六年、東萊・蔚州を襲つて船若干を捕獲。

（十二）同十九年三月、固城・泗川・梁州を攻め二百餘戸を燒きその水軍を擊破。

（十三）同廿一年、喬桐を襲つて燒き、京城を震憾せしめた。

（十四）同廿二年、吉野の士船數千隻を率ゐて元及高麗を襲ひ元兵を敗走さす。

（十五）建德元年、內浦を襲つてその水軍を破り兵船三十餘隻を擊破、また山東・浙東・福建を襲擊。

（十六）同二年、明の溫州を襲擊。

（十七）文中元年、明の海鹽・澉浦を襲ひ、高麗の海邊咸州・陽州を襲ひ、その水軍を破る。高麗王出で戰ふを擊退し、白馬山に走らす。次いで江華・漢陽を攻める。

（十八）同三年、三百五十隻の船を以て慶尙道を襲ひ、その水軍を擊破し、大將を捕へ兵五千人を殺し、明の膠州を攻め、その水軍と流球沖で戰ふ。

（十九）天授二年、全羅道の元帥營を襲ひ軍船若干を捕獲し、轉じて羅州を燒き、公州に金斯革の軍を破り、石城を攻め、全州・晋州・蔚州を占領。

（二十）同三年、會原・窄梁を攻め、戰艦五十餘隻を略取、斬首千餘、進んで江華府に入る。次で揚廣道を襲ひ、五十餘隻を捕獲し、兵數千人を俘虜とする。

（廿一）同四年、泰安・南陽を攻め、水原府を燒き、進んで鼎天府に屯し、京城を脅かす。

（廿二）同五年、順天府・延安府・鷄林府を襲ふ。

（廿三）同六年、五百餘隻を以て光州・西州・鎭浦口を襲ふ。

（廿四）弘和元年、江陵道を攻め、伊山を伐つ。

（廿五）同二年、林州・丹陽・慶山・大邱・鷄林を襲ふ。

（廿六）同三年、慶尙道を襲ひ沃州を占領し、大將を斬り、進んで江陵・淮陽を陷す。

（廿七）元中元年、鎭浦を脅し、長淵を攻め、その元帥の軍を破る。

（廿八）同二年、甕津・麒麟島・咸州・平海・沃原・北靑を攻め、連戰連勝。

（廿九）同四年、光州を攻める。

（三十）同五年、船八十隻を以て鎭浦を脅し、光州を攻める。

以上の如き襲擊に高麗も大いに苦しみ、正平廿二年二月（紀元二二〇七年）使節を派して、これが制止を請ひ、天授元年（紀元二〇三四年）にもわれに修好を求めたので、朝廷に於ては、藤原

經光を派遣した。然るに全羅道の元師である金光致が、經光を暗殺しようと企てたため事態は惡化し、わが邊民の襲擊は一層激甚となつた。同三年高麗は使節をもつて隣交を請うて來たので、九州探題の今川了俊は、使節を厚く遇したが、なほ依然として、わが邊民高麗に武力を揮つた。

高麗の恭讓王は退いて守るより進んで日本を攻めたならば、襲擊を止めるであらうとの考への下に、元中六年二月（紀元二〇四九年）、元師朴威を總大將として、兵船一百隻を以てわが對島の淺茅浦を襲擊させた。守護職の宗賴茂は、藤宗永の水軍を以つてこれを邀擊させ、海上戰を展開し、忽ち敵を擊破した。遁れ歸つた船は僅か七、八隻に過ぎなかつた。水軍の力によつて外寇を退け得たといふことは、當時のわが海事思想が如何に進んでゐたかを明らかにするものである。

明德三年、高麗の將、李成柱は、恭讓王を廢して自立し國號を朝鮮と改めた。彼もまた、自力によつて、わが邊民の襲擊を防ぎ得ないところから、應永五年と同十六年（紀元二〇六九年）の二回に亘つて使節を派遣し、これが禁壓を要請して來たが、依然としてわが邊民は朝鮮及び明を侵し、金鄕・浙東・慶州・松門・平陽・岐山等の各地を脅かした。李朝第四世の陶世宗は

慶永二十六年六月二十日、明國と聯合して、李從茂を大將に、戰艦二百十七隻、兵一萬七千を以て再び對島の淺茅浦に來襲せしめた。守護職宗貞茂これを邀擊、激戰二十六日で敵は殆ど全滅してしまつた。これがため、朝鮮は武力の自信を失つて、われに修好を求めて來たのであつた。

明帝國征討を計畫

胡蝶軍は以上の如き活躍によつて朝鮮半島沿岸の海上權を掌握したので、更に進んで支那の沿岸を襲ひ、威海衞附近を攻め、南下して遂東より廣東に到る八百餘里を蹂躙し、寧海・南京・杭州・寧波・台州・温州・福州・泉州・潮州・惠州などを襲つた。明國の洪武帝は正平二十四年（紀元二〇二九年）・文中二年・建德元年の三回に亘つて使節を派して、倭寇の抑止を切望したが、足利幕府の力を以てしても、これを抑制することは出來なかつた。

彼等は八幡大菩薩の旌旗を掲げ、幾十百の艦隊を列ねて、福建以北、直隷以南の沿岸を攻めたので、明國は大いに恐れ、沿海各省に行郡司を置いて防禦した。彼等が甲冑に身を固め、大刀小劔を揮つて活躍する樣は、さながら胡蝶の花に戲れるやうであつたので、明國ではこれを

胡蝶軍と呼んで恐怖した。享祿三年、明國の汪直（安徽省の人、その黨を山峯船王と云つた）は二千人を收容する巨船を造つて、わが村上圖書に對し大倭寇軍を編成して、明帝國征討を提議した。汪直は村上一族を以てすれば明國征服の如きはいとやすきことであると煽動したので、雄心勃々たる彼は直ちに同意して、聯合軍を編成、數百の船を連ね、一萬餘人を率ゐて、まづ大倉を侵し、上海縣を破つて揚子江を溯り、江陰・乍浦・金山衞・崇明・常熟などを攻略、翌年には蘇州、松江・通泰・吳江・嘉興を攻略・川沙窪・拓林を本據として四方を占領したのであつた。彼等は到るところ連戰連勝、その來るや疾風迅雷、その去るや電光石火、その敏捷な行動には、明の兵もその後を追ふのに疲れた。

明の兵部尙書張繼は一騎當千の大軍を嘉江に集結せしめて、これを邀擊したので、こゝに大會戰が展開された。ところが汪直の部下は本來掠奪が目的であつて、村上軍を先頭に立てゝ甘い汁を吸はうといふズルイ考へなので、彌次馬的に立ち廻つて眞劍に戰はず、決死的に戰ふのは村上軍のみであつた。これがため村上軍の精兵千九百人が戰死し、征明の壯圖に大支障を來した。村上圖書の無念、さこそと推察し得られる。この戰鬪において本隊を離れた七十名の一隊はその後蕪湖に入り、南京城を攻め、四千人を殺傷し（これによつてもその豪勇のほどが判る）

城門十二を閉し、揚子江に三ケ年ほど駐つて日本に歸國したのであつた。

その後、嘉靖四十一年、上杉謙信・武田信玄が川中島で戰つてゐた頃、胡蝶軍は再擧して、福建省を襲つて、興化府を陷れた。府城を破つたのはこれが初めてで、陷落の報が傳はるや、全明を震撼するに至つた。今回は、薩摩軍・長州軍・博多軍・四國軍と各州出身地は異なつてゐたが、攻守同盟を結んで興化府を攻略したのである。興化府は城壁を以て圍繞され、壁の周圍千八百三十丈、壁の高さ二丈四尺、城外は濠溝があり、背後に山があつて金城鐵壁を誇つてゐたものである。

急を聞いて南京都督劉顯が援兵を率ゐて馳せ參じ、興化府城外に駐在し、密使を密かに城內に送らんとした。これを胡蝶軍が發見、逆用して、胡蝶軍の一人が明の都督劉顯の密使であると偽つて城內に入り、

『明日の夜明けに城門を開いて頂きたい。明の援軍入城して諸君を救ふであらう』

と云はしめた。城將は大いに喜び、早速城門を開いたところを、胡蝶軍は大擧入城し難攻不落の府城を一擧に陷落せしめた。胡蝶軍は更に進んで廣東を攻めたが支那だけでは滿足せず、安南、東京・交趾・東埔寨・泰・馬來・爪哇・呂宋・ボルネオまで遠征の範圍を擴大したのであつた。

明國は初め日本を威嚇し、後には機嫌を取つたが、共に成功しなかつたので、自ら倭寇を防ぐ外はないと、各方面の防備施設を行つた。福建省四郡だけで築城十六ケ所、巡檢使を四十五名增員し、兵一萬五千を徵募、船百隻を集めた。浙江省では兵五萬八千七百を集め、廣東省では船二百隻を用意した。その他の各域でもそれ〴〵備へるところあつたが、胡蝶軍はこれを悉く擊破した。しかしこの胡蝶軍も、安土桃山時代になつて禁じたので全く消滅するに至つた。

五、豐太閤の朝鮮役と水軍

建武中興時代から潮の如く亞細亞大陸に活躍した胡蝶軍は、朝鮮と支那の國基を動搖せしめ、大和民族の勇敢さを海外に示したが、豐臣秀吉が天下を統一すると共に、これを禁止したため、わが國民の對外觀念は貿易航海として現れて來た。この形勢を打つて一丸として、國家統制の下に、日本民族の海外進出を試みたのが秀吉の大明征討並に朝鮮征伐の動機であつた。秀吉のこの考へは、天正十五年（紀元二二四七年）に島津義久が降伏して、海內統一が一段落したので

發端したやうに歴史は傳へてゐるが、事實は、それより十年前から考へてゐたのであつた。

織田信長も海外發展を考へた一人であつて、秀吉は信長の意を繼承して、まづ朝鮮を仲介者として、對支貿易の再興を企圖したが、實現の可能性がないので、武力解決に訴へたのが眞相であらう。秀吉はまづ朝鮮にその意向を傳へたが、朝鮮が明と秀吉の雙方何れにもよいやうな仲介をしたため、埒があかず、遂に明國征討の旨を朝鮮に傳へ、その嚮導をするやうに交渉した。

然るに朝鮮は、秀吉の言を鬼面人を嚇かす手段だと考へて、これを容れず、明國また、これを單なる威嚇と見て、警戒するまでに至らなかつた。秀吉は、この朝鮮の態度が不快で堪らずまづ朝鮮を征伐、武力に訴へても、對明交渉を成立せしめようと決意したのであつた。彼が始めて幕僚に告げたのは天正十八年三月九日である。これに對し德川家康が賛成したので、直ちに準備に着手、同十九年正月二十日には沿海の諸國に船準備を命じ、祿高十萬石に、二隻の戰艦を造らしめ、浦々の百戸に十人の水手を徵し、輸送船は、祿高十萬石に大船三隻・中船五隻を造らしめ、翌年春まで播磨・攝津・和泉の各港灣に集めることにしたのであつた。

次いで同年三月、軍役規定を公布し、各地の標準を示して、徵兵・出征準備は急轉直下に進

捗、八月二十三日、加藤清正・小西行長・黑田長政等に・名護屋に大本營設定の準備を命じた。かくして同十九年三月十三日全軍に動員令を發した。動員した總兵力は三十萬七千九百八十五人、うち海軍は、九千四百五十人である。

秀吉の失敗は、海軍に對する認識不足にあつた。神功皇后の三韓征伐によつても明らかなるが如く、皇后はまづ第一に水軍の訓練に意を用ひ給ひ、更に水路偵察をなさしめられたのである。然るに秀吉は、多數の船舶さへ造れば、優秀なる海軍と考へ、平素の訓練については更に考慮を拂はなかつた。しかも、久しく倭寇を禁じたため、海外に飛躍し、作戰・航海に長じたものは四散してしまつたので、水軍の基幹部隊を構成したものは、俄か徵募による、全く無教育の兵ばかりであり、航海訓練も調査もなつてゐなかつた。その上、海軍の諸將は、何れも互に功を爭ひ、軍としての統一がなかつたのである。

尤も造船方面では相當見るべきものがあつた(大阪天滿の船工はこの時から著はれた)。戰艦は船體二千石以上で、二重の矢倉を構へ楯には窓を作り、艫の口は鎖綱、總楯の圍楯船も出來、全體を龜甲の形の楯で被ひ、自在に開閉する裝置をした。偵察通報船の打櫂船・小早船・石火矢船があり、水船・馬船・荷船も造られた。總數七百餘隻(その大部分は伊勢で製造)、この船は攝津

から瀨戸内海を經て馬關海峽に入り・輸送船の不足を感じて紀伊・備前の船を徵發して名護屋に到つた。その海軍の組織は、九鬼嘉隆千五百人・藤堂高虎二千人・加藤嘉明千人・脇坂安治千五百人・久留島康親七百人・桑山重勝千人・堀田氏善八百五十人・杉若傳三郎六百五十人・菅正陰二百五十人で、陸軍の二十分の一である。

この海軍は名護屋を出發し、四月二十七日釜山浦に着いた。陸軍の先發隊より遲れること、二週間である。かくして陸海相應じ北進することになり、兵船を數隊に分け、釜山を拔錨して南岸に沿つて進航、初め慶尙道右水師の元均と、加德島近海で會戰した。わが海軍は夜襲によつて敵船百餘隻と火砲軍器を擊沈したので、元均は部下の李英男、李雲龍と四隻の船で昆陽に敗走し、全羅左水師營の前洋にある全羅左水師の李舜臣に援助を請ふた。李舜臣は板屋船二十四隻、挾板船十五隻、鮑作船四十餘隻を率ゐ、五月四日釜山の東北、麗水から、巨濟島の松來浦の前洋に出擊して來た。

かくして五月七日わが藤堂高虎の水軍五十餘隻はこれに應戰したが、敵の火箭のため二十餘隻を焚かれ、將兵は巨濟島に上陸して他船によつて釜山に歸つた。舜臣は巨濟島北方の永登浦に退いて左水營に歸つた。わが軍は釜山で陣容を整へて、巨濟島以西の敵を襲つた。舜臣は泗

川に急行してこれと戰つた。わが軍の十餘隻は昆陽に迫つて、露梁の洋上で、舜臣が戰艦二十三隻と戰つた。

この時、泗川には日本軍が、長蛇の如く陣を張つてゐるので、敵は海上から箭を射り、砲を擊つて來た。これに對しわが軍は峻崖を背にして銃擊し、敵船數隻を擊退した。舜臣はわが銃丸のため左肩に輕傷を負ひ、敵將數人が仆れた。六月一日、敵は船を蛇梁の洋上に停め、二日より五日まで唐項浦において、七十隻の船を以つてわが船隊と戰つた。わが將兵は大いに奮戰したが、舜臣は船隊の操縱に非凡の能力がある上に、兵器・兵船もわが軍より優秀であつたので、われは十二隻の船を燒かれ、士卒は殆ど死傷した。六月六日、閑山島東方の會戰では、わが將來島通久は力戰して敗れ、附近の島に上陸し屠腹して斃れた。

この敗報を聞いて、龍仁を守備してゐた脇坂安治は、守備の任を宇喜多の隊に任し、六月十九日、熊川より六十餘隻を以て、巨濟島に向ひ、見乃梁（シャットル灣）に進んだ。舜臣は、この灣が狹隘で戰船の操縱が自由でなく、陸地より射擊される虞れもあるところから、日本軍を洋上に誘ひ出すべく、退いて洋中に出た。九鬼嘉隆と加藤嘉明は七月五日夜、釜山で軍議を凝らし、六日、大船三十隻・中船十四隻・小船十三隻を以て出發、七日、加德島に假泊し、八日

安骨浦に移つた。八日、敵は閑山島西北の洋中で戰ひを挑んだ。彼は鶴翼の陣を以て、脇坂の追擊部隊と戰ひ、三十九隻を破つた。わが將兵の戰死夥しく、脇坂安治も數箭を受け、從將脇坂左兵門、渡邊七右衞門も殪れ、久留島康親・森村泰も戰死した。脇坂は遂に、洛東江の河口金海に逃がれた。八日、敵は風浪激しいため、巨濟島北方の漆川島に假泊、九日、安骨浦口に出て、われを閑山島の洋中に誘致しようと圖つたが、日本軍がその策に乘らぬので、舜臣も退却し、十三日、左水營に歸つた。八月十三日、敵は金海及び龜浦にあるわが兵船を擊たんとしたが、江口狹いため斷念して釜山に向つた。釜山にはわが兵船四百七十餘隻がをり、山に據つて反擊するので、敵は空しく左水營に引揚げたのであつた。

陸上の陸軍部隊は、破竹の勢ひで敵を破つて前進した。一番乘りの小西行長は、七月十五日朝鮮救援の明軍五千を破つて平壤に駐つてゐた。彼は明軍を追擊して、一擧に明國に攻め入らんとしたのであつたが、側近が水陸の連絡なくしては、成功し得ないと進言したので水陸呼應並進の機を待つたのである。然るにわが海軍は李舜臣の海軍に阻まれて釜山から北上せず、彼の期待を裏切つてゐた。九月一日、舜臣は釜山浦を襲擊した。わが軍は船より下り、陸上から敵と戰ひ、多大の損害を與へた。流石の舜臣も、これには辟易して遁走、再び襲擊を繰り返へ

さなかつたが、かくの如く、日本水軍は、陸上戰には强いが、海上では弱く、その行動意の如くならず、敵沿岸基地を奇襲してこれを占領するとか、或は陸軍と協同して陸戰隊的行動を採るといふやうなことは出來なかつた。

平壤にあつて焦慮する小西行長の許へ、明の講和使沈惟敬が來て行長は彼の巧みな術策に乘つて休戰條約を結んだが、これはわれに油斷をさせ、新手の出兵を完了する手段であり、再び日明兩軍が平壤に戰ふ結果を招いたに過ぎない。日本軍は平壤を撤退し京城に據り更に京城を去つた。明國側も敗戰と疫病流行のため戰意を喪失し、講和交渉に乘り出した。かくして外交交渉が開始されたが、秀吉は和戰兩樣の策を執つて、京城を撤退した兵を釜山に集中、浮田秀家は金海、加藤清正は梁山、島津義弘と海軍の諸將は巨濟島に據り、蔚山、西山浦から東萊・金海・熊川・巨濟の間に十六屯を設けて守備してゐた。この間朝鮮側は、日本軍の撤退を强硬に主張し、武力を以て、日本軍を追はんとする形勢を示し、遂に晉州城で兩軍衝突、次いで明軍の海軍が釜山を襲ふなどの小ぜり合ひが行はれた。

秀吉は通商貿易の復興、朝鮮王子の入朝、朝鮮國の謝恩、明國の謝罪等を要求したが、明國側はこれには一言も觸れず、秀吉を日本國王に封ずといふ虛名を與へんとし、朝鮮側はまた在

鮮日本陣營を毀てといふが如き不遜侮蔑の要求を行つたので、彼は烈火の如く怒つて、再び朝鮮を伐たねばならぬと決意した。

かくして四年の星霜を空しく費して成立せしめようとした講和談判は遂に破裂した。前役は明國征討が目的であつたが、後役は朝鮮征伐が目的で、宣戰の理由は、朝鮮が禮を失したのを懲さんとするにあつて、領土侵略の意はなかつた。從つて、目的も小さく、規模も小さく、戰線は朝鮮の南部に限られて行はれた。わが出征の兵は陸海軍合せて十四萬千五百人、これに對し敵明鮮聯合軍の總兵力十四萬二千七百人であつた。

慶長二年七月十五日戰ひは海戰によつて始められ、同日夜半、藤堂・脇坂・島津の率ゐるわが海軍は、密かに行動を起し、閑山島を根據地として、唐島沖に出てゐる朝鮮の艦隊を襲ひ、陸上の島津義弘の兵三千と連絡して攻めた。この時強風が起つて敵の船艦を離散させ、敵將元均は加德島に避けたが、高橋直次と筑紫元澄は、これを追擊して、敵の將士四百餘人を斬つた。

十六日黎明、元均は數百隻を以て、巨濟の泰川島に據つたので、藤堂高虎の兵はこれを擊破し、加藤嘉明の軍と共に、敵艦に躍り込んで十餘人を斬り、脇坂安治軍も激戰の結果、敵の十六艦を奪ひ、陸上の義弘の軍二千は敵の逃走上陸兵を悉く殺した。また竹島にあつた鍋島勝茂

も藤堂の兵を援けて奮戰し、成富茂安の軍は敵七百餘人を斬つた。この海戰で、藤堂軍は敵艦六十隻を奪ひ、數千人を斬り、敵の溺死者無數、島津軍は敵艦百六十隻を奪ひ、沿海諸浦の船二百餘隻を焚いて、水路を塞いだ。元均は僅かに身を以て逃げ、全羅右水師李德祺は溺死し、慶尙右水師金羅瑞は遁走したので、わが艦船は凱歌を奏して兵を收めたが、小西行長は、元均が巨濟島に逃避してゐると知つて、數十隻の船を以てこれを夜襲し元均の首を刎ねた。

陸上軍は八月朔日三道より全羅南道の門戸南原に向つて進み、二十日これを占領して京城に迫つた。一方わが海軍も閑山島の海戰に勝つたので長驅して京城に逼らんとし、二十六日、藤堂高虎の水軍は、稷山の水寨を攻め、敵兵三百を斬り、進んで忠淸道の諸壘を破つて安骨浦に築城し、長曾我部元親を居らしめた。朝鮮役において、わが水軍が陸戰隊的行動をとつたのは、この時である。わが海軍が西南沿岸に廻航して半島一帶を制壓しようとするのに狼狽した朝鮮政府は、再び李舜臣を起用し、三道水軍總制使に任命した。

彼は珍島の碧波亭に在る斐楔の兵船十二隻を主力とし一船隊を編制、全羅の西南岸と珍島の東岸の嗚深渡との間の海峽に鐵鎖を横亘して、日本船を顚覆する施設を行つた。かゝる施設があらうとは知る由もなかつたわが軍の菅正蔭は九月十六日兵船二百隻を以て、この海峽を通過

して十三隻を覆へされた。この時、李舜臣は直ちに船隊を率ゐて出撃し、潮流の上位から旺んに砲火を浴びせたので、わが船隊は敗れ、菅正蔭は戰死した。この報を聞いてわが海軍は三百三十餘隻を以て反撃、これを撃退した（李舜臣はその後に根據地を古今島に置いて大いに兵船を募り、兵五六千を集めた。その翌年四月には明の陳璘が、水軍の都督となつて兵船五百餘隻を以て合流したので、陣容は著しく整備された）。

陸上軍は九月七日稷山を占領した。加藤清正は西生浦にあつて、十一月十日より蔚山に築城を始めた。明軍は翌三年十月までの間に前後三回蔚山城を包圍したが、悉く失敗に終つた。明の海軍は泗川を攻めたが、島津義弘と寺澤正成のため撃退され爾來明軍は大いに畏れ、わが陣營を襲ふ者なく、敵將茅國器・劉綎等は講和を申込んで來た。

慶長三年八月十八日、秀吉が病死したため、その遺言によつて朝鮮出征の諸將に歸朝命令が出た。日本軍の朝鮮撤退を知つた明鮮軍は、日本軍の歸路を襲つてこれを撃破せんと企圖し、朝鮮海軍總司令官李舜臣は、明の都督陳璘と謀つて千餘隻を以て古今島を出で、東航して左水營前に進み、陸將劉綎と協力して水陸挾撃の方略を定め、順天を襲つたが成功しなかつた。更に南海島の東北岸と昌善島の南岸の中間の海峽觀音浦沖を扼して島津義弘の軍を襲つたが、却つ

て反撃され李舜臣は斃れ、敵將鍾金と陶明宰は射殺され、その他の襲撃は何れも失敗、わが軍は無事博多に到着したのであつた。

かくして約七年に亘る戰役はこゝに終りを告げるに至つた。この戰ひにおいて陸軍は百戰百勝であつたが、それが好結果を得なかつたのは海軍の失敗がその大いなる原因であつた。即ちその原因はわれに常備海軍がなく、海戰に就いての素養訓練がなかつた事、團體としての統制を缺いたこと、わが兵船が敵船に劣つてゐたこと、航海の調査研究が不足してゐたこと、海戰についての精密なる頭腦の持主たる參謀官がなかつたこと、などがあげられる。海上爭覇において敵に追ひまくられた結果、前役には海軍が上陸して陸戰隊的行動を以て陸上基地を占領するといふやうなことは出來なかつた。僅かに後役において、藤堂高虎の水軍が稷山の水寨を攻め忠清道の諸壘を破つて、安骨浦に築城したに止まる。

朝鮮征伐以後

秀吉は朝鮮・支那の征服を企圖したばかりではなく、印度及南洋の經略をも志したが、空しく雄圖を抱いて逝いた。徳川家康は熱心な開海論者で、海上貿易を勵め、航路を各方面に開き

朱印押捺の渡航免狀を交付して、これを保護したので、貿易は大いに發展し、慶長九年から寛永元年までの二十一年間に、朱印船は百九十七隻にも上つた。しかし海軍の施設は考へなかつた。二代將軍もその事に氣づかず三代將軍家光になつて、國防は海軍によらなければ、その實を擧げ得ないとなし、寛永七年大地丸を品川沖に浮べ、兵船を集め、操練を行ひ、翌八年には船奉行向井忠勝に命じ、大軍船を造らしめた。その長さは三十一間・幅十間三尺・深さ一丈二尺、船員四百人と武器二十五種を搭載した。家光は兵員を增加し一大海軍を組織せんとし、各要所に海軍根據地とも稱すべき闘所を設け、二斤の大砲百餘門を鑄造した。水戸の光圀も那珂港で長さ二十七間の大船を建造、次いで仙臺藩でも長さ十八間の洋式大船を造るなど、海軍組織の機運が漸く萌芽したのであつたが、島原における天主教徒の叛亂に懲りて絶對的な鎖國政策を執ることになつて、つひに寛永十二年、五百石以上の船舶製造を禁じ、同十三年五月には朱印船廢止となり、同十四年には五百石以上の船舶を沒收し、海軍擴張計畫を中止した。かくしてわが海事思想は、これを轉機として衰退の一路を辿り、幕末を迎へたのである。

以上皇國の近代海軍創設以前における水軍と、その活動の中の陸戰的史實を明らかにし、わが陸戰隊の濫觴と見られるものを大略述べたのであるが、しかし乍ら皇國海軍陸戰隊の活動

は、明治維新以後における　天皇の海軍に求めなければならないのである。

海軍の創設と海兵隊

德川幕府の執つた鎖國政策は、絶對的の鎖國ではなく、朝鮮とは信書の往復をなし、支那・和蘭とは制限的に貿易し、國を鎖した暗黑な井底にも、外國との接觸は、和蘭を通じてなされてゐた。而して、太平洋に於ける列國の競爭熱の高かつた延寶年間から嘉永年間にかけて、日本にも通商の門戸を開かんとする米・英・露艦船などが頻繁に來航した。幕府はこれに鑑み、寛政三年（紀元二四五一年）沿岸の諸侯に航海操船を習得するやうに命じた。同十年には和蘭船を眞似た小舟を造り、これを江戸灣の本牧附近の海上に泛べ、天保二年四月には、天保丸を修補して、將軍家定がこれに乘つて海軍の兵備を奬めた。これがため同十三年には全國で四千七百七十五隻を數へる船が建造されたが、それは悉く日本型の船舶で、外國の軍艦と戰ふことが出來ると云ふ代物ではなかつた。

幕府が自覺しない間に、鹿兒島藩と水戸藩とには、歐式戰艦建造の機運が進んだ。薩摩藩主

第二十七代の島津齊興は蘭學による西洋砲術を普及し、鐵砲製造所・火藥製造所を創設したが、二十八代の齊彬も、永く米國に在つて航海造船に精通した土佐の中濱萬次郎を招き、家臣の田中清左衞門・田原直助に造船法を習得させ、戰用に供する琉球大砲船を製造せしめた。更に米國のペリーが浦賀に來た翌年の嘉永六年七月、幕府に建議し、大船製造の禁を解き、軍艦製造に着手し、海防の事を水戸老公に委任すべきであると說いた。黑船來に驚愕せる幕府もその建議を容れ、九月十五日大船製造の禁を解いて、軍艦製造に一歩を踏み出したのであつた。

齊彬は大船十二隻、汽船三隻建造の計畫を立て、櫻島の有村と瀨戸村とに造船所を設け安政元年四月、長さ十五間の昇平丸を造つた。これが日本に於ける歐式造船の嚆矢である。

幕府も大船建造解禁と共に、江川英龍に命じ軍艦製造に着手、安政元年五月、浦賀に於て歐式の汽船長さ二十二間の鳳凰丸を建造、水戸藩では、嘉永六年十二月五日、江戸の石川島に造船所を造り、蘭學者鱸半兵衞を主任として造船に着手、安政元年一月二日、汽船長さ二十三間の旭日丸を造り上げた。同年十一月四日、伊豆下田に碇泊中の露艦ディヤナ號が海嘯のため流失し、使節プーチヤチンは乘組員を指揮し代用のシコナ號を伊豆の君澤郡戸田灣で建造す

ることになり、戸田の船工・鍛工を使役することになつたので、石川島造船所よりも木工・鍛工二十餘人を派遣し洋式帆船製造法を習得させたのであつた。

幕府は更に和蘭艦の買入れを行ひ、地理學・窮理學・星學・測量學・機關學・航海學・造船學・砲術などの移入に努め、蘭艦長フアビユスの意見に從つて安政二年七月二十九日、海軍兵式を歐式に準據することとし、長崎に海軍傳習所を創設、諸藩から傳習生を選拔して、これを習得させた。

安政四年四月、江戸築地の講武場內に、軍艦教授所を置いて、長崎傳習所の卒業生を教師として諸藩士を入學させた。かくして幕府を始め諸藩が競うて歐式船舶を求めたので、數年を出でず、俄かにその數を增し、文久年間には、幕府の所有軍艦八隻・汽船三十六隻・各藩（二十九家）は九十四隻を數へ、海兵の總數（下士・海兵・水火夫を含む）四萬八千を數へるに至つた。

文久三年の薩英戰爭、及び馬關砲戰によつて、海軍思想は一段と昂揚した。幕府はその後、佛海軍々人・英海軍々人等を教官として海軍の研究を續けた。尊皇倒幕運動の進展によつて、慶應三年十月、將軍慶喜が大政奉還の奏請をなし、十二月九日、王政復古の大詔渙發、同月二十五日萬機親裁を示され、天皇の近代海軍が創設されたのである。

慶應四年三月十四日、五條の御誓文を發せられた詔勅に、

列祖ノ偉業ヲ繼述シ一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス親ラ四方ヲ經營シ汝億兆ヲ安撫シ遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ國威ヲ四方ニ宣布シ天下ヲ富嶽ノ安キニ置カンコトヲ欲ス

と宣はせ給ふた。日本海軍創建の精神は、この聖旨に副ふべく基礎付けられてゐる。三月二十六日天皇は大阪灣口の天保山沖に行幸あり、海軍の操練を天覽あらせられた。これが日本における最初の觀艦式である。

慶應四年四月十九日、徳川家は軍艦四隻・汽船一隻を朝廷に獻上したが、主戰論者の榎本武揚は他の艦船を引きつれて函館に籠り最後の抵抗を試みつゝあつたが、明治二年六月、函館五稜郭陷落と共に降伏、官軍の艦隊が品川沖に凱旋した。かくして一路兵制改革の機運に向つた。同年九月十八日築地安藝橋内に海軍操練所を創設、諸藩より貢進生を徴募、翌三年二月二十九日濱御殿を海軍所とし、艦船の淘汰を行つた。この時、兵部省所管の軍艦となつたのは、富士山・

甲鐵・千代田の三隻（總噸數二千四百九十六噸）、それに運送船・大阪・飛隼・飛龍・快風の四隻を加へたものに過ぎなかつた。これが明治海軍の鼻祖である。ところが全國諸藩主が版籍奉還を行ふと同時に、艦船の獻納があり、鹿兒島藩よりは、春日・乾行の二艦、山口藩よりは第一丁卯・第二丁卯・雲揚・鳳翔の四艦。佐賀藩よりは日進・孟春の二艦、熊本藩よりは龍驤艦、靜岡藩よりは行速丸、豐津藩よりは虹橋丸を獻納し、政府は英國より筑波艦を購入したので、艦船の數は急速に增大した。同年十一月五日、海軍操練所を海軍兵學寮と改稱し、生徒は悉く官費で養成することになつた。十月二日、海軍を英國式として、海軍大尉ホースを聘して、横濱で操練を開始し、明治四年二月十七日には沿海地方漁業者の子弟中、年齡十八歲以上二十五歲未滿の强壯な者を選んで、海軍水夫に任用した。

同年十月、海兵士官學校を設立し、各藩から入校生徒を募集、海兵隊（陸戰隊の前身）幹部の養成に乘り出した。徳川幕府はオランダの指揮下に各艦にマルニール（海兵）を置いたが、明治維新によつて、海軍は英式、陸軍は佛式によつて整備され、艦船乘組員中にマリーン（海兵隊）が創設された。これはオランダ語のマルニールである。艦船の操縱並に裝砲の扱ひ方は、總て水夫（今の水兵）の任務であるが、儀禮に要する衛兵や野砲隊は海兵隊の受持ちとされた。海兵は砲

兵及び歩兵の兩科に區分され、水兵本部がこれを統轄し、各艦の定員に應じて分乘した。指揮は海兵士官並びに各科軍曹及び伍長等が當つた。この海兵隊の本部は芝山内海軍屬舍内に置かれ本部・砲兵科・歩兵科に分れ、外に樂隊・鼓隊などが配屬された。

海兵隊員の服裝は、殆ど英國同樣で、赤線入りのズボンに劍帶並びに肩襷は白皮、なか〳〵派手であつた。毎年一月の海軍始式には砲兵・歩兵共に築地海軍兵學寮前の、所謂海軍原に於て操練並びに分列式を天覽に供し奉つたが、その訓練の上達するのには、毎時、御感極めて深かつたと洩れ承る。

明治五年一月二十日官制を更定し、二月二十八日、兵部省を廢し、陸軍省と海軍省が置かれることになつた。當時の艦船は十七隻、總トン數一萬三千八百三十二トンであつた。六年一月左院に提議して、戰備の主力として甲鐵艦二十六隻、常備として大・中・小艦六十二隻、練習艦二隻、運送船十四隻、合計百四隻を整へることとし、毎年六隻づつ建造して十八ヶ年で完成することに決定した。

同月十日徴兵令が發布され、陸海軍とも兵士は滿二十歳の壯丁中より採用される事になつた。かくして皇國海軍は、年を逐うて着々整備擴張されて行つた。函館戰後の約六ヶ年は、内外

とも平靜で海軍の活躍は見られなかつたが、明治七年、佐賀の亂が勃發し、こゝに始めて艦隊が出動し、海兵隊の活動を見ることとなつた。

一、佐賀の亂と海兵隊の活躍

明治七年の佐賀の亂、同十年の西南の役は、明治維新以來の皇國における實に悲劇的な最後的騒亂であつたと云へよう。發端は明治新政府と朝鮮との交渉に始まるのである。王政復古によつて國内の面目を一新したわが國は、明治元年十一月、書面を以て、その旨を通知し、『將來益々國交の親密ならんことを望む旨』述べたのであつた。然るに當時、朝鮮は鎖國主義を以て外國との交際を好まず、その書面を受理しなかつた。

外務省では三年二月、佐田白茅を派遣して直接交渉せしめたが、その甲斐なく、同年九月更に外務權少丞吉岡弘毅を遣して交渉せしめたが、これにも應じなかつた。

そこで佐田白茅等は『兵を出して朝鮮の無禮を責むべし』と强硬に主張した。その後明治五年正月、宗重正が周旋に當り、同年九月、外務大丞花房義質が國交を促したが、何れも效果な

く、却つて朝鮮政府は明治六年五月、日本人を國外に退去せしめようと企圖したので、排日熱も次第に昂まつた。かくてわが朝野は大いに激昂し、參議板垣退助・後藤象次郎・江藤新平及び陸軍少將桐野利秋・篠原國幹などは、『兵を出して在留日本人を保護し、且つ朝鮮の罪を糾問せざるべからず』と熱心に主張した。參議西郷隆盛も朝鮮のわが國に對する態度を一大國辱と考へると同時に、新政府に對する不平者の心機を一轉させ國内人心の刷新を圖らんがため、朝鮮問罪に贊成したが、しかし西郷はあくまで兵を向けることには反對であつた。本當の肚は外交で朝鮮を納得させたい心算であつた。このことは、彼が板垣に送つた書翰によつても判る。

即ち、

『兵隊を先に御遣はしは如何に御座候や、兵隊を御繰り込み相成候はゞ、必ずや彼方より引揚候樣申立候に相違無之而此方より不二引取一旨相答候はゞ此にて兵端を開き候半、左候へば初よりの御趣意とは大いに相變じ戰を釀成候場に相當り可申と愚考仕候』

とある。要するに彼は、朝鮮の無禮を詰問する遣韓大使を送り、本當の日本的外交談判をやると主張したに過ぎず、武力には反對してゐた。而して彼は、

『公然と使節を被二差向一候はば、暴殺も可致候に付、何卒私を御遣被下候處、伏而奉願候』

と手を合せて自分を使節として派遣して欲しいと懇願してゐる。從つて西郷の主張を征韓論の名で呼ぶことは妥當ではない。三條實美も之を承諾し、御勅裁も出かゝつてゐるのを取り消さねばならなかつたのは、大久保が頑强に西郷に反對したからであつた。しかし、西郷と大久保とは共に維新奉公の同志であつて、西郷が滯米中の大久保に送つた手紙、又大久保が英國から西郷に送つた手紙を見れば、二人の意見が岐れてゐるやうな點は些かも認めることが出來ないばかりか、君國への御奉公の赤心が、遙かに海を距てて相通つてゐたことが判る。然らば、あのやうに事態を大げさに發展させたものは何か。御奉公のためには私を忘れる日本人同志の喧嘩ではなくて、その背後にイギリスの謀略の手が伸びてゐたといふ事が、次第に蔽ひかくせない歷史的事實となつて來てゐる。

これまでの史家は、大久保が海外視察で外國の物質文明の偉大さに驚愕し、歸朝後、急に內治の急務を唱へ、決りかけてゐた西郷の朝鮮使節派遣を喰ひ止めたと傳へるが、大久保が西郷に送つた手紙を見れば寧ろその物質文明には極めて冷靜であつたことが判る。物質文明に驚いた位で、かの頑强なる反對論を持する筈はない。彼の七つの理由の中の最大なものは、『政費多端出入相償はず』といふ一項であつた。外役が起るものとして、さうなれば賦斂を重くしな

ければならぬ。

『賦斂重くなれば、則人民怨む、紙幣增さざるを得ず、紙幣增せば、則物價昂る、外債を起す、外債をおこせば價還のすべなし』

といふ、これは大久保の頭に何者かによつて注入された、經濟的非戰論であつて、特に外債の恐怖は當時における最も大きな威嚇であつた。

『今率然として兵を起せば百事中止し、前效悉く廢せん、輸入輸出超過し、金貨流出す……復物品を製造し、以て貿易に資する能はず』

といふ貿易論はイギリスの世界征覇の中心問題であつた。當時のイギリスは次第に保護貿易に移らうとして然も未開諸國を自分の經濟範圍の中に藥籠化し、ドイツ及びアメリカの進出を防がんとして、ヂスレリーの帝國主義政策の躍動にうつらんとするの時であつた。勿論大久保は、イギリスの野心を知らぬではなかつた。彼は、『魯國に次ぐを英國となす、我多く債を彼に負ひ、之を償還すること能はず、彼必ず以て口實となし我內政に干與せん、是我を印度にするなり』と云つてゐる。『我多く債を彼に負ふ』ことの大久保の恐怖こそ、イギリスの經濟思想に征服されてゐた。イギリスの文明におどろかされ、その經濟理論の中に大久保が捉はれてしま

ひ、こゝに悲慘なるアングロサクソンの對日思想謀略が始つたと見るべきではないだらうか。それは昭和年間における軍縮會議において、わが軍備を縮小せんとした米英の謀略とその撥を一にする。明治六年の西鄕の使節問題は、イギリスの謀略によつて、遂に征韓論といふ名前に置き替へられ、大久保・西鄕の分裂となり、到頭佐賀の亂、西南役にまで進み、イギリスは懷手して、その對日侵略の上に最も大きな障碍となる强硬分子を一掃することに成功した。この亂を起したものは實に英國であるとの感が深いのである。

それは兎も角として、西鄕等の說は、大久保利通・木戶孝允・岩倉具視等の反對に遭つて敗れ、西鄕は明治六年十月辭職、同二十八日鹿兒島に歸つた。副島種臣・後藤象次郎・板垣退助・江藤新平も二十四日辭職したが、近衞の將校中には西鄕と進退を共にするもの多く、陸軍少將桐野利秋・篠原國幹・陸軍少佐別府晋介、陸軍大尉逸見十郎太を始め、將卒・邏卒に至るまで職を辭して、薩摩に歸るものが多かつた。

明治七年正月十四日夜、右大臣岩倉具視は赤坂皇居から退出の際、喰違門に於て高知藩士武市熊吉外八名に襲はれ負傷した事件などがあつて、物情穩かならざるものがあつた。佐賀縣では朝鮮問罪が行はれなかつたことを不滿に思ふ者が多く、これら不平家凡そ二千人を以て征韓

黨を組織してゐた一派が居り、一方、封建時代の舊制を慕つて現政府の施設を厭ひ、機を見て亂を起さんとしてゐた一千餘名の憂國黨があつた。江藤新平は同年一月十三日病氣保養に名を藉り、政府に歸縣の願書を出したまゝ歸鄉して征韓黨の首領に推され、島義勇も、二月七日東京を發して、十四日佐賀に入り、憂國黨の首領となつて、兩黨聯携が成立した。これより先き二月一日、兩黨の壯士が小野商會を襲つて金錢を掠奪した事件があり、熊本鎭臺に進擊するなどの報が頻りに飛び、縣下は鼎の沸くが如き騷ぎであつた。

江藤等の暴動の報は二月三日東京に達した。佐賀縣の權令岩村高俊は數日前任命を受けたばかりで、當時まだ東京にゐたが、命を受けて直ちに出發。まづ熊本鎭臺に急行し、その兵一大隊を隨へて二月十五日佐賀縣城內の縣廳に入つた。その日叛軍は佐賀城を圍み、十八日これを陷れ、岩村等は筑後方面に遁れ、城內は叛軍の本陣と化したのであつた。

これより先き政府は、勅を奉じて二月四日まづ陸軍省に對し、『鎭臺兵を出し縣官と商議し速に鎭定すべき』旨命じ、次いで熊本鎭臺に對し、一大隊の出兵を命し、海軍に對しては、『軍艦三隻を至急品川發、九州に出動せしめて之が鎭定に當らしむべき』を命した。而して參議兼內務卿大久保利通に全權を委ねてその鎭撫に當らせることになつた。

海軍では二月十六日、まづ運送船大阪丸に海兵二小隊と砲兵半座（一小隊）より成る海兵隊を乘せて品川を出發せしめた。大阪丸は十九日兵庫に寄港して、同地において東艦（艦長少佐伊東祐亨）及び雲揚艦（艦長大尉今井兼輔）と會合し、即日出港、二十一日下關に到着した。海兵隊はここで兩艦に分乘して長崎に廻航し、大久保は博多に上陸した。これを聞いた江藤は兵を兩筑、の國境方面に出して、急に砲壘などを設けて防禦したが、官軍は二十一日より兵を進めて二十二日開戰、苦もなく鳥栖方面の敵を破つて中原を略取し、翌二十三日更に進んで神崎を占領、大久保は本營を轟村に移した。東艦は二十二日福岡に寄港の上、翌二十三日長崎に到着した（雲揚艦はまづ征討軍の本營所在地福岡に向ひ、二十三日以後、伊萬里・唐津及び鹿兒島方面の警備に當つた）。大阪丸も同日長崎に入港した。

海兵隊は即日長崎に上陸、陸路佐賀城に向つて敵の背後を衝くべく宿陣し、諫早及び大村方面に斥候を派遣して敵情を探つた。二十五日海兵隊は、島義勇から武雄邑主宛の密書を入手して、愈々その叛意を確めた。かくして二十六日海兵隊は長崎を發して、彼杵驛に宿陣、斥候を武雄に先發せしめ、翌二十七日海軍中尉志岐守行の率ゆる一隊は、彼杵驛發大町に先行し、本隊は武雄に到着したが、佐賀方面の官軍苦戰の情報に接して、直ちに進發、大町に宿陣した。

この時、多久・武雄・小城・須古等の諸兵も海兵隊の先鋒隊に從つて征討軍に參加した。

二十八日午前六時三十分、海兵隊が大町を出發して小田を經、牛津附近に到着すると、叛徒は牛津川の橋梁を毀し、海兵隊の進擊を阻止せんとした。しかし忽ちこれを擊攘し久保田に進擊した。この時、村山長榮なる者が、『使』の一字を記した白旗を揭げて降伏を申出で、『今般の事件は本來王師に抗する意志はない。午後六時までに謝罪狀を持參する』と述べて進軍の猶豫を願ひ出た。海兵隊はその請を容れて一旦歸城させ、全軍を嘉瀨に駐め、その時を待つたが使者は遂にその姿を見せなかつた。そこで直ちに進擊することになり、即日午後六時三十分、但馬大尉・志岐中尉は、各半小隊を提げてまづ佐賀城に進入し、次いで木藤中尉・下田少尉は二箇分隊を率ゐて入城した。この夜叛徒は城內を退き、各所に散亂遁走したので、但馬大尉は步砲兵各半小隊を以て脫走した敵を城外に追ひ拂つた。

三月一日午後六時より、海兵隊の先鋒隊は續々佐賀城に入城し、同九時海兵隊は全部入城して城の內外を警備した。城內に於ける捕縛者は三名で、押收物件の主なるものは、佛式短斤砲二門、火藥・砲彈・小銃若干及び玄米數百俵等であつた。二月二十二日博多本營より進軍した野津陸軍少將の率ゐる一隊（步二大隊・砲一大隊）は途中賊軍を擊攘しつゝ三月一日午後、前山精一郎隊の嚮導の下に佐賀城に入城したので、海兵隊は城を陸軍に引渡して、城外に撤退し、翌二日歸途に就き、八日長崎に歸着したのであつた。

朝廷に於ては、二月廿三日　嘉彰親王を征討總督とし、陸軍中將山縣有朋・海軍中將伊東祐麿を參軍とし　親王は近衞兵を率ゐて三月一日東京御出發、八日博多に御上陸、十四日佐賀に御着陣になつた。この日江藤・島は位階を褫奪された。江藤等は鹿兒島に逃れ、西鄕の許に寄らうとしたが、西鄕がこれに應じないので、島等十七名は三月七日鹿兒島に於て捕縛され、佐賀に送られた。江藤は尙も逃れて日向の飫肥に行き、更に土佐に渡つたが遂に捕へられて、佐賀に送られ、四月十三日、江藤、島の二人は梟首の刑に處せられた。かくして佐賀の亂は勃發以來約一ケ月半で全く鎭定したが、初陣の海兵隊の活動が大いにその威力を發揮したことに因る所多いのである。

二、臺灣生蕃討伐と海兵隊

佐賀の亂と相前後して、臺灣の生蕃征討の議が持ち上つてゐた。明治四年十月十八日、わが琉

球の宮古島の十二反帆船(乘組員六十九名)が那覇港を出帆したが、海上において暴風に遭ひ、三名溺死し、六十六名が臺灣の東岸南部の八瑤灣に上陸、人家を求めて彷徨ひ歩くうち、高士猾社(今の高士佛社)土蕃のため五十四名が殺害され、生存者十二名は保力庄の楊友旺父子に救助されて福州に渡り、翌五年六月二日、那覇港に歸着し、具さにその狀況を鹿兒島縣廳に報告した。時の縣參事大山綱良は、伊地知壯之丞を東京に派し同年七月二十八日、問罪の師を派遣せられんことの奏請を求めた。そこで翌六年二月二十七日外務卿副島種臣は柳原・平井・鄭の三人を從へて北京に渡つて、支那政府と交渉したが、支那政府は、『臺灣の生蕃に對しては何等責任を負ふことは出來ない』と答へて問題にしなかつた。

ところが同年三月八日、備中國淺井郡柏崎村の佐藤利八外三名が若蛭子丸で臺東の馬武窟に漂流し、土人の劫掠に遭ひ、同月二十日上海に渡つて我領事の保護を受け、便船に乘つて歸國したといふ事件が起つた。この報再び傳はるや、

『蕃人を征伐せよ』

との聲は一層高くなつた。北京の副島外務卿は七月二十六日歸朝して廟議に諮り、問罪の師を發することに決したのであつたが、九月十三日岩倉大使の一行が歐洲から歸朝するや、朝

鮮問題で朝議二論に岐れ、西鄕隆盛等は職を辭して歸國、翌年二月佐賀の亂勃發となつたことは前述した通りである。しかし清國の態度に鑑みても、問罪するのが至當であるとの說が有力となり、政府は佐賀の亂に對して鎭定策を講ずると共に、二月二十五日陸軍大輔西鄕從道に生蕃處分の取調べを命じた。

四月四日、長崎に蕃地事務局を置き、大隈重信を長官とし、西鄕從道が都督、赤松則良海軍少將及び谷干城陸軍少將を參軍とした。同九日西鄕は、赤松・谷と共に、日進・孟春等の軍艦を率ゐて品川を出港し、まづ長崎に入港して軍用品を整へた。この取調べに當つて米國領事リゼンドル、海軍將校カツセルとワツメンを聘用し船舶を借入れることになつてゐたが、米・英兩國は局外中立を宣言し、破約を申込んで來た。わが政府も大いに迷惑し、一時臺灣への出兵中止して、改めて清國に談判することになり、大隈に歸京を命ずると共に、西鄕に後命を待つをべき旨命じた。西鄕は四月二十五日政府の命を受けたが、

『辱なくも勅書を捧持して出發した以上、たとへ大臣の說諭でも應ずるわけに行かぬ。もし外國が異議を挾んだら、西鄕は國を脫した不逞の徒だと答へたらよからう』

と頑として聽かず、二十七日征臺軍參謀兼厦門領事福島九成少佐に對し、先發直航を命じた

のであつた。五月三日、赤松・谷兩少將は日進・孟春兩艦と三邦丸に千七百人の兵を分乘せしめて長崎を出發した。十日朝瑯嶠灣に入り、射寮に上陸、十六日、西鄉都督は高砂丸（英船デルター）に乘り、大有・明光・新約克等各艦船に千九百の兵を分乘せしめて長崎を出發、二十二日射寮に到着、かくて海陸總兵力三千六百餘となり、本營を龜山に置いて戰鬪準備を整へた。

五月十六日、赤松海軍少將は、熟蕃社の綱砂に出張して、小麻里の酋長である伊厝と會見して歸順を誓はせた。これがきつかけとなつて熟蕃の民は續々と投降し、射寮の酋長彌亞は、わが軍の嚮導となることを申出た。そこで我軍は二十一日蕃地に向つたが、途中深林の中から狙擊を受けたので、熟蕃と生蕃とが氣脈を通じてはならぬといふことになり、二十二日兵二百をもつて、熟蕃部落にある武器を押收し、四重溪から十八町の石門に向つた。參謀佐久間佐馬太中佐は、二小隊を以て車城東方から、土蕃の狙擊する中を峻嶺に登つて眼下の土蕃を射擊したので、土蕃等は不意打ちに驚愕して潰走した。二十二日都督一行が來て、わが軍威は大いに振つたので附近の各社蕃（十六社）は續々投降歸順した。ところが牡丹・高士猟の二社だけは頑强に抵抗したので、大擧して剿討する方略を決定した。

風港に向つた一隊は、谷陸軍少將が指揮、牡丹社に向ふ。竹社に向つた一隊は赤松海軍少將

が指揮して高士猟を攻める。本隊は西鄉中將が督し、石門の難路を通つて進むことになつた。六月一日、陸軍及び海兵隊三千の兵を三隊に分け、左軍（谷軍）は風港より、右軍（赤松軍）は竹社より、中央軍（西鄉の本隊）は龜山より統埔に進み、石門を經て進軍する部署を決定した。霖雨の中を蕃地を踏破するので各隊とも、その行軍に苦しんだ。中央軍は、鎭臺兵一小隊・徴集兵一小隊・海兵隊五十名と砲兵とを以て、一日午後一時出發、四重溪庄を經て二日午前六時、石門に進んだが、人影はなかつた。三日牡丹社に突入した。土蕃は家を棄てゝ草叢中に潛伏しわが軍が蕃地深く進むのを見計つて狙擊した。わが兵は叢中に猛射し、刀を揮つて攻めたので悉く潰走した。谷少將の左軍は徴集兵三小隊・第十九大隊の三小隊を以て風港を出發し、峻嶺を攀ぢ登り、山腹に潛伏してゐた土蕃と銃火を交へ乍ら牡丹社に進んだ。赤松少將の右軍は徴集兵一小隊・第十九大隊一小隊・砲兵を以て、二日午前六時出發、霖雨の中を脚を沒する泥土の中を難行軍して峻嶺を越え、河を涉り、辛苦を重ねて牡丹社に到着し、他隊と合流した。かくて四日三千の總軍を以て土蕃の巢窟を屠り、これを掃蕩したのであつた。

この生蕃掃蕩戰に對し清國は我政府に對し抗議、使を臺灣の西鄉に送つて撤兵方を要求した。西鄉はこれを一蹴、政府は柳原前光を清國に送つて談判を開始させたが、この談判はなか〳〵

進まなかつた。そこで政府は、已むを得ざるときは斷然兵力を以てその曲直を爭ふといふ事になり陸軍卿山縣有朋、海軍卿勝安芳に命じ、命令一下、何時たりとも出兵出來る手配を整へた。九月十日、我全權辨理大臣大久保利通は北京に到着し、爾來七回に亘つて談判を重ねたが、彼に少しも誠意なく、十月二十三日の第七回會談に於て大久保は、

『我國は臺灣を無主の蠻地と信ずるから今後も占領を繼續し、生蕃の開發撫育に當り統治の實績を擧げる』

と憤然席を蹴つて歸館した。この頃川村海軍大輔は軍艦筑波に海兵隊及び同砲隊を乘せて長崎に在つて談判破裂の通知を待つ等、わが國の戰備は整つてゐた矢先きのこととて、清國側も大いに驚き、英國公使ウエードの仲裁を賴み、三十一日、

一、日本の生蕃討伐は元來人民保護の義擧であるから、清國はこれを指して不善となさず。

二、日本遭難民の遺族に對して、清國は撫恤金十萬兩を出し、尙日本軍が臺灣に於て道路を修築し、營舍を建築したのに對し四十萬兩を出す。

三、清國は今後生蕃を檢束して、永く危害を他國人に加へしめないこと。

等三ケ條より成る日清條約が成立、西鄕都督の一行は十二月二十七日東京に凱旋した。

三、江華島事件

明治七年五月五日海軍兵學分校が横須賀に置かれた。翌八年十月には、軍艦筑波は實地練習として米國桑港へ回航を仰付られ、海軍最初の遠洋航海の途に就いた。明治八年九月二十日、我軍艦雲揚は朝鮮西岸より清國牛莊に到る航路測量の任務を以て出動中、飲料水補給のため江華灣（朝鮮西岸仁川の北方にある）に寄泊し、艦長井良良馨少佐（後の元帥・子爵）は自ら短艇に乘つて、部下の士官五名、武裝の海兵十名、水兵十名を率ゐて、漢江を遡江しつゝあつたが、同日午後二時三十分、江華島の南端の砲臺の守兵が、突然これに發砲した。井上艦長は號火を揚げ急を本艦に報じて急遽歸艦し、應戰準備を整へたのであつた。

翌二十一日早朝、雲揚艦は戰鬪準備を整へて拔錨、遡江して江華島の第三砲臺を距る約十六町の沖に投錨し、四十斤砲を以て砲擊を開始した。數分後、敵砲臺もこれに應戰した。敵の發射した彈丸は、射程六、七町で、何れも近彈に終つて效果ないのに反し、我が艦より發砲する百十斤及び四十斤砲の彈丸は、的確に敵砲臺に命中して相當の損害を與へた。

次いで我方は海兵隊を揚陸して、一擧に敵砲臺を占領せんとしたが、適當な揚陸地點がなかつたので、果さなかつた。交戰約二時間でわが發射彈數二十七發、正午過ぎ一旦戰鬪を中止し午後第二砲臺附近に轉錨し、海兵隊を揚げて同砲臺を燒き拂ひ、再び江華島錨地に歸つた。

二十二日未明、雲揚艦は拔錨して永宗城に向ひ、第一砲臺の前方約八町に迫つて砲擊を開始したが、敵は更に應戰しなかつた。そこで、城郭の前面に投錨し、二十二名の海兵隊を二隻の短艇に分乘させて、陸岸に向はせた。將に岸に着かうとする所で、敵は猛射を浴びせて來たが隊員は一歩も退かず突進した。水が淺く、容易に陸地に近づくことが出來ないので、遂に全員江中に身を躍して上陸、北門・西門・東門の三方面から進擊して敵を擊退、永宗城を占領、日章旗を飜へし、城內に火を放つて、これを灰燼と化せしめたのである。

この戰ひにおいて、敵の死者三十五名・俘虜十六名・逃走したもの四、五百名であつたが、わが方は戰傷二名に過ぎなかつた。捕獲品は大砲三十六門、小銃・劍・槍など若干、俘虜はこれらの捕獲品を短艇に運搬するのに使用した後、これを解放し、隊員は夜になつてから歸艦した。翌二十三日、捕獲品殘部の運搬を了へて、二十四日拔錨、牛莊行きを中止し二十八日長崎に歸港して、その顚末を政府に報告したのであつた。

こゝにおいて征韓論が再燃した。政府は取敢ず軍艦一隻を釜山に派遣して、我居留民の保護に當らせ、十二月九日參議黑田清隆を特命全權辨理大使とし、二十七日元老院議官井上馨を副使として朝鮮に派遣、從來の無禮と江華島事件を詰問し、條約を締結して日韓兩國の親交を結ぶことにした。

黑田・井上の兩名は明治九年一月六日、近衞兵・鎭臺兵を率ゐ、軍艦四隻に分乘して品川を出帆、同月十八日朝鮮釜山に到着したが、朝鮮政府が、わが要求に應ずる氣色がないので、本國政府に對し、陸軍二大隊を增發されたいと要求した。政府は、平和に事を運ばんとする我眞意を誤解せしめる惧れがあるといふので、その要求を容れず、萬一の場合に備へて、山縣有朋をして兵を率ゐ、下關に駐屯せしめることにしたのであつた。黑田の一行は二月十日江華府に到着、翌日より談判を開いたが、先方は言を左右にして應じなかつた。そこで二十二日、四日間の期限付で回答を求め、確答がなければ、斷然歸國すると告げ軍艦に引返した。

朝鮮政府は大いに驚き、修交條約十二ケ條から成る所謂江華條約を結び、同月二十六日謝罪書も提出した。同條約では朝鮮が獨立國であることを明記し、二十六ケ月の後には、同國內に於て釜山の外に新たに二貿易港（元山津と仁川）を開くこと及び日本航海者は朝鮮近海を測量し

得ることなどが決められた。かくの如くにして江華島における海兵隊の活動は、明治維新以來の懸案であつた朝鮮問題解決の契機をなしたわけである。

陸戰隊の誕生

江華島事件のあつた明治八年から九年にかけて、皇國海軍は更に一段と整備充實に向つた。海軍兵學寮は兵學校に改稱し、東海（横濱）・西海の兩鎭守府が設置されたが、特筆しなければならないのは、明治九年七月英國式海兵隊が廢止され、海兵士官學校が閉校されたことである。在學中の生徒の本科生は海軍兵學校生徒に編入、一クラスとなり特別速成の教育を受け、同年十二月卒業した。艦船における從來の海兵部の任務一切は、艦船乘組員が履行することとなり、水夫の名を廢し、同年八月十九日水兵と改稱され、こゝに皇國海軍陸戰隊が創始されたのである。

こゝで便宜上、陸戰隊の編制について述べることにしたい。海外に發生する緊急事態に速刻對處し得るものは軍艦以外にない。陸軍が動員・輸送などの關係上、緊急事態に間に合はない場合は、海軍陸戰隊を以て臨機の措置を講ぜしめるのを常とする。そこで、軍艦の中には、常

に陸戰隊が編制されてゐる。これを『軍艦何々陸戰隊』と云ふ。各鎭守府の海兵團には陸戰隊が常備されてをり、こゝから派遣される場合には『特別陸戰隊』と云ひ、各聯合によつて編制された場合には『何々聯合陸戰隊』と呼ばれるのであるが、これらの編制や名稱は漸次出來たのである。

陸戰隊の訓練は、海兵としての基礎訓練を終へた者で、特に脚力、判斷力に富み、剛毅不屈の精神力の所有者たる陸戰に最適なる者が選ばれ、陸上の兵科についてのあらゆる知識を急速に體得するようになつてゐる。海軍陸戰隊と呼ばれるやうになつてから最初に當面した事件は明治九年の西南役である。

一、西南役と陸戰隊

明治九年、日本國內には佐賀の亂の餘波とも見られる小內亂が相次いで起つた。即ち明治九年十月二十四日、熊本には太田黑伴雄を首領とし加屋霽堅を副首領とする神風連の亂が起り、熊本鎭臺司令長官種田政明陸軍少將を殺し、熊本縣令安岡良亮を傷けた。同月二十七日には福

岡縣の秋月の士族宮崎車之助・今村百八郎などが神風連に呼應して立ち、翌二十八日には前原一誠が、山口縣萩に亂を起した。幸ひにこれらの亂は數日を出でず鎭定したが、遂に天下の大亂西南の役へ發展するに至つたのである。

明治六年十月、朝鮮問罪を主張し、あられもない征韓論の名を冠せられ下野して鹿兒島に歸つた西鄕隆盛は、農作や狩獵に悠々その日を送つてゐたが、少壯血氣の軍人や警察官で彼の德を慕つて歸鄕する者多く、機を見て再び西鄕を世に立てんと、遂に西鄕を中心とする一大團體を形成するやうになり、その勢力は鹿兒島全縣を動かすほどになつた。西鄕はこれらの人人を指導し、將來國家有用の人物たらしめんと、城山の麓にある島津家の厩址を借り、明治七年二月私學校を開設した。その教育方針は、尊皇愛國を旨としたので、彼の德を慕つて集まる者多く、遂には『西鄕先生出でずんば、國家を奈何にせん』『速かに現政府を倒して、西鄕の政府を組織せしめん』と意氣込むに至つた。

明治九年十月神風連・秋月・萩の亂が起るや、血氣の若者達は、事を起すのは今だと、西鄕に迫つた。西鄕は容を正し、

『熊本・萩の亂が起つたのは國家の大不幸だ。好機逸すべからずなどとは何を云ふか！』

と大喝した。その場は、この一喝で事なくすんだが、鹿兒島不穩の報は、どこからともなく政府に傳はり、不安を感じた政府は、鹿兒島にある海軍造船所、及び大阪造兵支廠鹿兒島屬廠の兵器彈藥を大阪に運ばせることにしたのであつた。これを知つた私學校の生徒は、『愈々政府は西鄉先生及び吾人を討たんとする準備を開始したのだ』と大いに憤慨。『先んじて人を制するに如かず』と西鄉・桐野・村田等の不在を幸ひとなし、明治十年一月三十日と三十一日兩日にかけて、海軍造船所及び屬廠の倉庫を破つて、小銃・彈藥を掠奪した。

菅野覺兵衛海軍少佐は、これを知つて二月一日殘りの彈藥に水をかけたが、その夜も私學校生徒が來襲してそれを奪ひ、更に千餘人の壯士が造船所に亂入して、雷管などを盜み去つた。

菅野少佐は、鹿兒島縣令大山綱良に、犯人逮捕と彈藥の保護方を賴んだが、大山縣令も、西鄉擁立の黑幕の一人であつたので、これを傍觀し、菅野少佐が縣廳に預けた三萬圓も少佐が歸京するに際し二千五百圓しか返さず、他は軍用金に充てたのであつた。

私學校生徒は遂に造船所及び屬廠を占領して、小銃・彈藥の製造を始め、東京から歸省中であつた警視廳少警部中原尙雄を捕へ、これを脅迫し、西鄉暗殺と私學校解散の任務を帶びて歸省したと僞證せしめた。當時西鄉は村田新八と共に高山地方に遊獵中であり、桐野利秋は吉田

の別莊にあつたが、桐野はこの變を聞いて急遽鹿兒島に歸り、

『少壯の徒が遂に大事を誤つた。事茲に至つては唯斷の一事あるのみ』

と西鄉の末弟小兵衛及び逸見十郎太を西鄉の許に飛ばし、西鄉の歸宅を促した。彼はこの變を聞くと、

『あゝ、我事終る、吾死せり！』

と嘆息した。鹿兒島に歸ると桐野利秋・篠原國幹の意見を容れ、二月十五日精兵一萬五千を率ゐて鹿兒島を出發、積雪を蹴立てゝ大口筋及び伊集院筋から進軍したのであつた。政府は海軍大輔川村純義・內務少輔林友幸を鹿兒島に派遣し、鹿兒島の情勢を視察、大山縣令と共に西鄉に面會して、その處置を協議せしめんとしたのであつた。兩人は軍艦高雄によつて七日神戸を出發、九日鹿兒島に到着し、大山縣令と談判の後、西鄉を艦に招致せんとしたのであつたが、西鄉が來る前に、私學校の生徒が高雄を奪はんと企てたので、即日出港、十二日絲崎に寄港し、尾道より鹿兒島の事情及び出征の準備の必要を打電した。

かくして政府は、近衞・東京・大阪・廣島の鎭臺に出征準備を命じ、熊本鎭臺司令長官谷干城陸軍少將に臨機の處置を執るべきを命じた。朝廷に於ては二月十七日、島津久光・西鄉隆盛

に暴徒鎭撫を命ずるため、有栖川宮熾仁親王を勅使として差遣されることになつたが、十八日に鹿兒島暴徒の先鋒が熊本縣に入り、西郷も出陣したとの確報があつたので、勅使派遣は中止となり、二月十九日征討令が發せられ、熾仁親王を征討總督に、陸軍中將山縣有朋・海軍中將川村純義を征討參軍に任じた。征討軍は二月二十二日より二十六日に亘つて博多に上陸した。

二月二十二日西郷隆盛が川尻に達した時は、その勢二萬を超えた。この日より賊軍は熊本城の攻擊を開始し、こゝに西南の役の火蓋が切られたわけである。

當時、熊本城には約三千五百の士卒がゐたが、二月十九日の强風の朝、城中に火災起り、主なる建物は皆燒け、たゞ宇土矢倉のみを殘して鎭火した。これがため糧米五百石は烏有に歸し直ちに糧米六百石を買ひ求めたが、これでは二十日間の籠城分しかなかつた。賊軍の池上四郎の率ゐる三千餘名は熊本城を包圍し、桐野利秋は山鹿方面、篠原國幹は田原坂方面、村田新八別府晋介は木留方面に進んだ。福岡に總督本營を置いた征討軍は、その後續々南進し、一日も早く熊本城を救ふべく焦慮したが、叛軍に遮ぎられ、容易に進むことが出來なかつた。それでも二月二十七日、高瀨に叛軍を破り、三月三日木葉を占領、惡戰苦鬪の末に三月二十日田原城の敵を追つた。

官軍の別働隊は長崎より海路八代方面に到着、三月十九日より二十五日までに同方面に上陸し、八代を占領、四月一日宇土を占領した。

谷干城は四月八日奥陸軍少佐の大隊をして圍を突破せしめ、宇土の別働隊本營と連絡、宇土本營からは侵襲隊を送り、熊本市外大江村の九品寺に於て、敵の糧米七百二十俵・小銃百挺・彈丸三千發を分捕つて城中に運んだ。これより叛軍利あらず、十四日より退却を始め十五日征討軍が入城、十七日總督も城内に入つて、こゝを本營とした。西郷は四月二十二日人吉に據つた。官軍の主力は、この人吉攻擊に當つた。豐後方面には野津道貫陸軍大佐が熊本鎭臺の一部を率ゐて出動し、鹿兒島方面には川村參軍が海陸の兵を率ゐて海路鹿兒島に上陸した。六月一日官軍は人吉を占領、薩軍は日向に走り、村田新八は都城に據り、西郷は宮崎を本營とした。鹿兒島に向つた別府晋介の軍も戰利あらず、都城に退いた。かくして薩軍の大部分は日向に逃げ込んだので、官軍は三方より攻擊、七月二十一日都城を攻め、三十一日宮崎・佐土原を占領、八月二日高鍋、十四日延岡を陷入れ、西郷は長井に逃がれ、こゝを本營とした。この時既に兵器・彈藥缺乏し、最早や戰鬪は無用として自決を決心したが、別府晋介等が、その時に非ずとして、これを抑へ、九月一日鹿兒島に歸り、市街に火を放つて、守兵を追つて城山に據つた。

この時、薩軍は僅か三百七十二名に過ぎなかつた。九月二十四日、官軍の城山總攻撃が開始されたのであるが、かくも迅速に官軍の追撃が成功した裏に、海軍の力があつたことを見逃がしてはならない。

三月二十三日、官軍背面攻撃隊は、砲隊が整はず、特に大砲に不足した。陸軍の黒田參軍は艦隊指揮官伊東祐亨少將に艦載砲の應援を求めたので、伊東指揮官は春日（艦長磯部包義少佐）の四斤砲二門と榴彈・霰彈三百五十餘發を揚陸し、次いで筑波（艦長松村淳藏大佐）も同じミトレイユース十九連發砲一門、及び彈藥一萬發を八代の本營に送り、アームストロング九斤野砲一門及び榴彈三百餘發を別働第二旅團に送つたので背面攻撃隊は大いに振ふに至つた。

四月一日、淺間艦は別府灣に入つて陸戰隊を上陸せしめ、大分の巡査隊と合して、中津隊を撃破した。八日長崎海軍出張所の池田海軍少佐・西秀重少尉補等は、高雄丸に乘つて長崎より松合に急行、陸戰隊を率ゐてクルツプを肥後の新村に備へ、杉島の敵壘を砲撃して、これを沈默せしめた。十三日丁卯艦は日奈久を砲撃、翌十四日池田海軍少佐等は陸戰隊を率ゐて、陸軍と協力し、綠川の敵壘を攻撃した。

引續き豐後方面の淺間艦陸戰隊の活躍は相當活潑であつた。四月十八日、佐賀關に入つて偵

察のため上陸し、薩軍五名を捕へて引揚げ、これを大分縣廳に送致し、二十日佐賀關から別府灣に廻り、別府から大分附近まで行進して、人心の鎭撫に努めた。これより先き十六日、大分沖に於て同艦長緒方惟勝少佐は、孟春艦長と協議の上、淺間艦副長吉島辰寧大尉の率ゐる二箇小隊の陸戰隊を、孟春艦の陸戰隊と協力させ、大分城の內外を守らせ、淺間艦の砲を揚陸して警備に就かせたので、大分に向つた薩軍は、これを知つて遂にその目標を豐後の鶴崎に轉じたのであつた。また淺間艦は十九日から二十三日にかけて、竹田の薩軍に備へるため陸戰隊をして武田方面に扼守させて警備を續けた。同艦は二十六日、佐伯に廻り、內田政彥少尉補に陸戰隊を指揮させて、陸上の敵狀を偵察させたところ、約三百の薩軍がこれを射撃、九名の死傷者を出した。同艦は直ちに陸岸に迫つて敵を砲撃これを沈默させたのであつた。

鹿兒島方面の伊東海軍指揮官は、龍驤、筑波、清輝の諸艦を率ゐて、四月二十七日、拂曉、輸送船とともに、鹿兒島に入り、陸軍及び陸戰隊を上陸せしめ、艦內の備砲を陸揚げして沿岸の要衝に備へた。當時陸軍には砲數が不足したので、海軍はその要求に應じ砲十八門を陸揚げし、五月十二日龍驤艦は磯山の敵壘を砲撃、遂に六斤アームストロング砲二門を磯天神岡及び鳥越坂に裝備して、第四旅團を應援した。更に筑波艦は十四拇砲二門及び六十斤銅砲二門を

揚陸し、新上橋・西田橋に裝備した。二十四日筑波艦副長福村周義少佐は兵學校生徒若干を率ゐて二本松に行き、地雷火を裝備したが、二十五日同艦乘組の佐藤鎭雄、柏原長繁等は、谷山に上陸、薩軍を攻擊、陸軍に應援した。六月五日、春日艦は濱市沖に出て伊地知・二階堂兩中尉を上陸させ、薩軍を攻擊した。

九月八日官軍の城山包圍が完成したが、海軍の諸艦は巨砲を一齊に揚陸し、陸戰隊は、陸軍部隊と呼應して二十四日城山の總攻擊を行つたのである。城山の各壘は相次いで陷り、敗兵は岩崎谷に集つた。西鄕は愈々最後の決戰を試みんとして、桐野・村田・池上・別府等四十餘名と共に豫て入つてゐた洞窟前に整列し、西鄕は輿に乘つて岩崎谷口の壘に向つたが、一彈は西鄕の股を貫き、なほ一彈は腹に當つた。西鄕は最早これまでと、別府に介添へをたのむとともに、東方に向つて跪き兩手を合せて禮拜、別府は後に廻つて太刀を拔き、その首を打ち落した。正に午前九時であつた。かくして英傑西鄕隆盛は五十一歲を一期として岩崎谷の露と消えた。兵を起してより約八ケ月、佐賀の亂以上の大戰爭はこゝに終つた。征討總督宮は十月十日東京に御凱旋、天皇に騷亂鎭定の旨を奏上せられた。

西南の役における海軍陸戰隊は、陸軍の賊徒平定を容易ならしめ、その活動は愈々本格化した。

〔註〕明治十年横須賀水兵屯集所は東海水兵本營と改められ、十四年七月海軍機關學校が横須賀に設置された。十五年三月東海水兵本營を水兵屯營と改め、浦賀の東海水兵分營を水兵練習所と改稱した。

二、朝鮮事變と十七年の變

江華島事件以來、朝鮮においては、大院君の一派は勢力を失墜して、開國黨が漸く頭を擡げて來た。その領袖十數名は明治十四年日本に來遊し、わが文物制度を學んで十五年歸國、盛んに進步主義を唱へ、宮廷の改革を行ひ、閔氏一族も開國黨と結び、保守派を宮中より追放し、兵制を改革、老兵を廢し青壯兵を集め新部隊を編制、日本より堀本禮造陸軍中尉を招いて、日本式武藝を注入した。これがため罷免された一千餘の老兵は生活苦のため、政府の措置と顧問役の日本人を怨むこととなつた。これを見た大院君は、閔氏一派と開國派に對する怨みを晴らさんと、これら老兵と在營兵を煽動して、七月二十日騷亂を起さしめた。

數千の兵は王宮に侵入して、政府要路を悉く殺し、訓練所に入つて堀本教官を刺殺し、更に

西大門外の日本公使館を襲撃放火して六名を殺した。花房義資公使は書記官以下二十八名と共に、重圍を脱し仁川に逃がれ、英測量船フライング＝フィッシュ號に助けられ七月三十日長崎に歸り事の次第を政府に急報したのであつた。

時の外務卿井上馨は三十一日內閣會議を開いた結果、高島鞆之助陸軍少將と仁禮景範海軍少將に海陸軍を引率させ、仁川に急航せしめることにしたのであつた。即時、仁禮少將は金剛艦（乘組員二百五十人）・比叡・迅鯨・孟春の六隻を率ゐ横濱を拔錨し、花房公使を載せた明治丸を護衛して、金剛・日進は仁川に、天城は釜山に向つた。十二日仁川に到着、十六日公使は二中隊の護衛兵を率ゐて京城に入り、十八日、高島・仁禮の兩少將は兵千百五十餘名を率ゐて堂々と京城に入つた。この中には海軍陸戰隊の精鋭も加はつてゐた。

花房公使は二十日國王に謁見し、要求書に對し三日以內の回答を求めた。然るに當時は大院君が再び政權を握り、援助を賴んだ清兵の到着を待つて交渉に應ぜんとしてゐたので、期限が過ぎても回答しなかつた。そこで公使は二十三日仁川のわが軍艦に引揚げ戰意を示した。大院君は大いに驚いて李祐元等を全權大臣として談判に應ぜしめることにしたのであつた。その後

に清の援兵が到着、李鴻章は花房公使及びわが政府に對し、『朝鮮は清國の屬國であるから、清國が仲裁に當る』と申込んだが、わが方は應じなかつた。いま日鮮開戰することは清國に不利と考へた李鴻章は、二十六日大院君を連れ出し保定府に抑留して、八月三十日仁川のわが軍艦內に於て、

一、今より二十日を期し、兇徒を捉へ巨魁を窮めて之を懲らす。
二、日本人の遭難者は朝鮮國が優禮して之を葬る。
三、朝鮮政府は五萬圓を出して、日本人死傷者に酬う。
四、日本の受けた損害に對し朝鮮は五ケ年間に五十萬圓を拂ふ。
五、日本公使館は兵員若干を置いて警備すべく、兵營の設置・修繕は朝鮮政府が負擔す。
六、朝鮮國は特に大官を派して日本に謝す。

等六ケ條より成る濟物浦（仁川）條約を締結したのであつた。この事變に於ては陸戰隊の戰鬪は行はれなかつたが、陸軍部隊と共に無言のうちに敵を威壓して、無血解決を促進したことは特記しなければなるまい。

濟物浦條約後、わが國は一大隊の兵を京城に派遣して、わが公使館の警備に充てたが、當時

朝鮮には、わが文物制度に倣つて、朝鮮政界を革正し、その獨立を完全にしようとする獨立黨と、清國の鼻息を窺ふ事大黨とがあつて、勢力を爭つてゐた。明治十六年清佛戰爭勃發するや獨立黨は、この機に乘じて事大黨の勢力を一掃せんとし、同十七年十二月四日夜、蹶起して、朴・金の兩人は、昌德宮に走り、前門に爆彈を投じ、轟然たる音に驚く國王を拉して、昌裕宮に遷し、內官の邊樹を日本公使館に遣り、救援を求めた。竹添進一郎公使は一個中隊の兵を以て宮中に到り、內外の警護を行ひ、國王を桂洞宮に遷らしめた。朴泳孝等は王命を以て、事大黨の巨頭、閔台鎬・閔泳穆・李祖淵・韓圭稷・尹恭駿・趙寧夏等を召して、これを悉く擊殺し翌五日朝獨立黨の新內閣を組織したのであつた。ところが事大黨の一派は、袁世凱・吳兆有等の率ゆる四百の支那兵に護られて、宣仁門より入り、清兵は王宮守備の朝鮮兵と戰つて火を放つた。

こゝにおいて朝鮮兩黨の戰ひは日清兩國の戰鬪となつた。日本兵は王宮の正門と北壁とに據つて防ぎ戰ひ、一擊して清兵二十餘を斃し、南門より庭中を橫ぎつて、國王を護つた。この時銃聲亂射、勢ひ不利と見た竹添公使は、北岳より公使館に入つた。この時わが公使館は三回に亘つて清兵の襲擊を受けた。居留日本人は、銃殺され、石打され、竹槍によつて刺され、婦女

三十九名は暴行を受け、獨立黨の洪英植・朴泳敎その他六、七名は斬殺され、國王は清兵に奪はれて、清兵營舍に移された。竹添公使は館員と共に闇夜を幸ひ重圍を脫し、楊花津より、漢江を下り、八日仁川に逃げた。朴泳孝・金玉均・徐光範なども加はり、十一日わが軍艦千歲丸に乘つて本國に引揚げた。こゝに於て事大黨は、新內閣を組織、清國は吳大徵を欽差大臣として兵を率ゐて朝鮮に來た。この亂で磯村愼藏大尉・飯島曹長その他兵卒三名、語學生上野某外三十名は慘殺され、公使館は焦土と化したのであつた。

急報に接して、わが政府では十二月十三日、閣議を開き、まづ外務省より栗野愼一郎、議官井上毅を派遣することになり、更に十二月二十四日外務卿井上馨を全權とし高島柄之助陸軍中將・樺山資紀海軍少將に二個大隊の兵を引率せしめ、橫濱を出發せしめたのであつた。一行は金剛・比叡・日進・春日・龍驤・孟春・海門の諸艦と共に三十日仁川に到着した。軍艦日進の陸戰隊は直ちに上陸して非常配備に就き、陸兵二個大隊は全權に先立つて京城に入つた。全權一行は十八年一月三日、京城に入り、六日國王と會見した結果、

一、朝鮮國王は國書を呈して日本に謝意を表す。

二、遭難日本人の爲に、朝鮮より金十二萬圓出す。

三、磯村大尉を殺害した兇徒を嚴刑に處す。
四、日本公使館の新築費二萬圓を支辨する。
五、日本公使館護衛兵の兵舍をその側に設ける。

の五ケ條より成る京城條約を締結したのであつた。しかしこの十七年の變において朝鮮在留日本人を殺害した者の多數は清國兵であつたので、『使を清國に遣はしてこれを詰責し、罪を謝せねば、兵力を以て懲らせ』といふ强硬輿論が昂まつて來た。そこで政府もその必要を認め、明治十八年二月、宮內卿伊藤博文を特命全權大使に、農商務卿西鄕從道を同副使に任じ、兩使は同月二十八日、仁禮景範海軍中將・野津鎭雄陸軍中將・參事院議官井上毅等を從へて横濱を出帆し、四月三日天津に於て、清國特命全權大臣李鴻章と談判を開始し、同十五日まで六回に亘つて交渉したが、彼は容易にわが要求に從はず、伊藤大使は歸國の準備を始めた。彼は驚いて急に態度を改め同十八日、

一、日清兩國は從來朝鮮に駐屯せしめた兵士を撤去する。
二、朝鮮兵士教練に要する教官は、これを日清兩國より派遣することなく、兩國以外の武官を雇聘せしむ。

三、將來朝鮮に事があつて日清兩國若くは一國が兵を朝鮮に派遣する時は、先づ互にその通知をする。

といふ三ケ條の天津條約に調印したのであつた。而して清兵の日本人虐殺に對する處分については『今の所、その確證がないから他日その證左を得て後、之を嚴罰に處す』といふ意味の附屬公文を李鴻章から伊藤大使に出し、伊藤大使の一行は二十日天津を出發歸國した。

かくして十七年の變は落着した。この變亂においても陸戰隊の出動を見てゐるが、戰鬪はなく、外交々渉の側面示威の役割を果したのみであつた。

〔註〕明治十九年四月海軍條令を定め、鎭守府・水路部・督買部・衞生部・醫學校・會計檢査部・兵器製造所・火藥製造所の官制が定められ、また帝國海岸及海面を五海軍區に別け、各海軍區に鎭守府を置くことになつた。明治廿一年五月參軍の下に海軍參謀本部を置き、七月海軍大學新設。八月海軍兵學校を江田島に移轉、廿二年四月十六日、鎭守府所在地に海兵團を置き、軍艦乘員の補充及び軍港防禦に充つべき現役下士卒を教育訓練し、新兵を徵募し、豫備兵・後備兵を召集するところとし、横須賀・吳・佐世保海兵團の定員を定む。同日軍港・要港に水雷隊を置く。五月鎭守府を置く港を軍港とし、海軍に於て守備する地を要港とし、第一海軍區鎭守府を横須賀に、

第二を呉に、第三を佐世保に、第四を舞鶴に置き、七月呉及び佐世保の各鎮守府を開廠した。廿三年二月室蘭を鎮守府所在地と定められた。廿六年五月十九日海軍軍令部條令を定め海軍軍令部を東京に置き、出師・作戦・沿岸防禦の計畫を掌り、鎮守府及艦隊の參謀將校を監督し、又教育訓練を監視することになつた。同日海軍區及軍港を定め、横須賀・呉・佐世保・舞鶴・室蘭を指定、また陸海將校相當官互轉任例を定め、海陸交流人事の例を拓いた。戦時大本營條例が定められた。かくして帝國海軍は創設以來目まぐるしいほどの變遷を經て、この頃に至つて漸くその陣容が整備したのである。明治廿七年春、軍艦は三十一隻を數へ、水雷艇は廿六隻となつた。この勢力を以て日清戦役に臨んだのである。

日清戦役と陸戦隊

明治十七年の變によつて、翌十八年四月天津條約が成立したことは前述したが、この條約に基いて、日本は直ちに京城から撤兵したが、清兵は、兵を巡査、或は商人に變裝させて駐屯せしめ、袁世凱また公使及び國政監理の資格を以て京城に在り、露骨な内政干渉を始めた。明治二十二年には防穀令を出して、わが商人を苦しめ、二十四年には清國は丁汝昌の率ゐる北洋艦隊を我國に派遣して、示威運動を行つた。二十七年には袁世凱は本國の李鴻章と策應して、刺客を以て親日派の金玉均を暗殺し、頻りに朝鮮の排日熱を煽るべく狂奔した。

かねて朝鮮政府の悪政と官吏の横暴に對して不平を懐いてゐた東學黨は、明治二十七年四月、首領金琫準が起つたのに呼應して立ち、その徒黨は忽ち一萬を突破した。暴動は慶尚・忠清・平安の諸道に波及し、地方官吏を捕縛幽閉し、官衙を破壊するなど、朝鮮政府の力では如何とも出來なかつた。そこで袁世凱は、閔泳駿を說いて清國の兵を借りることを强要、その旨

を李鴻章に急報した。李は直隸提督の葉志超に千五百の兵を授け、威海衛から海路朝鮮に向はせた。

朝鮮が清國に援兵を乞うたとの報に接したわが政府は、陸海軍の出征準備をなし、清國が天津條約に對し如何なる處置を執るかを窺ふ一方、歸朝中の朝鮮駐劄公使大鳥圭介に韓事臨機處斷の權を與へ、歸任の上、日韓の交渉に當らせることになつた。芝罘に碇泊中の軍艦赤坂を仁川に回航、大和・筑紫と合體させ、馬祖島に碇泊中の常備艦隊旗艦松島・千代田及び高雄には、至急釜山に廻航するやう命令、六月四日清兵が朝鮮に入つたとの報あるや、五日東京に大本營を開設し、陸軍の大島義昌少將の率ゆる混成旅團を朝鮮に派遣することとした。

この日、大鳥公使は軍艦八重山に乘り、陸戰隊編制の目的を以て、横須賀海兵團の下士卒七十名を同乘せしめ、仁川に向つて横須賀を出發した。海軍大臣西鄕從道は釜山領事室田義文に對し、『常備艦隊その地に到らば、千代田を留め、他は仁川に廻航せしめよ』と電命、日本郵船に命じ有力汽船十隻を軍用運送船に提供せしめた。

六月七日、東京駐劄清國公使汪鳳藻は、陸奥外務大臣に公文を寄せ、出兵の通知を寄せて來たがその文中、屬邦保護の四字を認めてあつたので、我方は、朝鮮を未だ嘗て清國の屬邦と認

めたことはないと突返し、我方も朝鮮に軍隊を派遣する旨、北京駐劄の小村代理公使を通じて清國政府に通告させたのである。

大鳥公使を乘せた八重山は九日仁川に入港したが、仁川には既に赤坂・大和・筑紫が居り、そこへ松島・千代田を率ゐて入港したので、わが艦隊は威風堂々仁川港を壓することとなつた。常備艦隊司令長官伊東祐亨中將は、高雄を釜山に殘して來たのであつた。十日大鳥公使は警視廳巡査二十名を從へて京城に入ることになつたが、艦隊では六艦乘組員より成る四百八十八名の聯合陸戰隊を編制してこれを護衛した。陸戰隊の進駐に韓廷は大いに狼狽、袁世凱も一驚を喫し、市民は驚愕した。わが海軍は陸戰隊の內一小隊を木覓山麓に駐め、清兵の占據を防止した。

混成旅團の先發隊千餘名は、和歌浦丸に乘り、高雄に護衛され十二日仁川に到着し、十三日京城に入つて陸戰隊と交代し、後續部隊は近江丸以下九隻の運送船に分乘し、軍艦吉野に護衛され、十五・十六日仁川に入港上陸した。伊東司令長官は、八重山・武藏・大島を仁川に殘し松島・吉野・高雄・大和を率ゐて二十一日仁川を拔錨佐世保に歸つた。千代田も同日出發、芝罘を偵察して佐世保に歸り、筑紫も佐世保に歸つた。佐世保には葛城・天龍の二艦があり、他

の艦艇も、こゝに集合しつゝあつた。

六月十六日陸奥外相は汪公使を經て清國政府に對し、

一、日清兩國協力して朝鮮の內亂を鎭定すること。

二、內亂平定後、日清兩國より常設委員若干名を朝鮮に派遣し、同國の財政を整理し、官吏を淘汰し、警備兵を設けしむること。

等を提案したが、彼は二十一日この提案を拒否し、我が撤兵を要求して來た。そこで日本は單獨でも朝鮮改革に當る決意を示し、大鳥公使に命じ、五ケ條の改革案を韓廷に提出せしめた。國王も、改革の必要を認める詔を發し、十日校正廳を設け、委員を出して大鳥公使と共に具體案を審議せしめ、十六日細目を承諾せしめるに至つたのである。然るに袁世凱は朝鮮政府に對し、『清國は日ならずして大兵を朝鮮に入れる』と威嚇し、この改革案を拒否せしめんと圖つた。韓廷は急に態度を變へ、日本軍が撤兵した後に任意改革を行はしめると云ひ出した。

十九日大鳥公使は嚴しく朝鮮政府の反覆を詰り、『朝鮮の秕政改革を實行せずば、斷じて我が兵は撤せず』と要求し、三日以內に諾否を決すべしと迫つた。然るに韓國政府は、清國によつてのみ自己安全を圖り得ると妄信し、回答期日に至つても何等回答しなかつた。そこで大鳥

公使は二十三日、國王に謁し、內政改革を實行すべきことを要求し、その結果二十四日大院君が閣臣の交迭を行つて從來惡政を施した閔泳駿以下の一味を處罰し、二十五日清韓條約破棄を清國に通告、なほ牙山の清兵を撤兵すべき全權を大鳥公使に委任された。

東京駐劄の露國公使ヒトロプオー及び駐清英國公使オーコンナルなどが兩國の斡旋に乘出したが、清國が、『日本が朝鮮から撤兵した後でなければ何等の提議もなし得ない』と頑張り、遂に手を引いてしまつた。七月十二日、わが政府は小村代理公使に訓電し、清國との關係を斷たせることとし、十四日、事態かくなるは清國政府の態度によるのであるから、將來不慮の變があつても、日本政府はその責に任じない旨通告した。

七月十四日、清國は文武の大官會議を開き、開戰の議を決し、まづ陸兵を平壤附近に集中、軍艦を威海衞に集めることとなり、兩國關係はこゝに斷絕するに至つた。

七月十七日樞密顧問官豫備海軍中將樺山資紀は、特旨を以て現役に復され、海軍中將中牟田倉之助に代つて海軍軍令部長に補され、二十二日佐世保に到着した。樺山軍令部長は檣頭高く、『帝國海軍の名譽を揚げよ』

と信號を揭げて激勵した。艦隊は二十五日午前二時、朝鮮郡山沖に到着して假泊した。坪井

航三少將の率ゐる第一遊擊隊は同日豐島沖において清國軍艦廣乙・濟遠・操江と遭遇して海戰、濟遠は逃亡したが廣乙を追ひ詰め自沈せしめ、操江を捕獲し、更に清兵千百名・大砲十四門等兵器を牙山に輸送せんとしてゐた高陞號（英船）を擊沈して大勝利を得た。

同日朝鮮政府は清韓條約の破棄を清國に通告し、牙山の清兵驅逐の全權を大鳥公使に委任したので同日大島少將は混成旅團を率ゐて牙山に向ひ、これを追ひ成歡驛に集結したのを更に追擊擊退して八月五日京城に歸つた。八月一日宣戰の詔勅が下つた。八月二十六日、日韓攻守同盟が調印され、九月十五日廣島に大本營が設置された。

當時平壤には葉志超の率ゐる約一萬五千の清兵が據つてゐたが、九月十五日わが陸軍部隊の四面からする包圍總攻擊によつて、十六日平壤を占領した。翌十七日には黃海の海戰が起り、清國軍艦超勇・致遠・經遠を擊沈、廣甲・揚威を擱坐破壞し、その他の諸艦にも大損害を與へた。豐島沖海戰を合せると敵の損失は一萬千百四十六噸となり、黃海の制海權は完全にわが手に歸したのであつた。

一、威海衛夜襲に魁け

黃海の海戰に敗れた敵は、旅順口に逃げて修理してゐたが、十月十八日、丁汝昌は各艦艇を率ゐて旅順口を出て、翌十九日威海衛に入り、港內深く蟄居して再び出る勇氣がなかつた。陸軍は十一月海軍掩護の下に花園口に上陸、六日金州城を拔き翌七日大連を占領、二十一日僅か一日で旅順口を陷れた。九月十六日平壤を陷れた第一軍は、次第に兵を進め、十一月五日大孤山を占領、十八日岫巖城を占領した（陸軍の第二軍が金州城を陷れた日、東京駐劄の米國公使ダンが本國の命による日清兩國の講和仲裁を申入れたが、ものにならなかつた）。十二月十二日には析木城、十三日には海城、十九日には缸瓦塞を陷れた。

かくして第一軍は海城に進み、第二軍は金州半島を占領し、將に兵を直隸の野に入れて、北京を衝かんとするに至つた。大本營ではまづ陸軍を渤海北岸に進める計畫を立て、十一月二十九日海軍の伊東司令長官に對し、上陸地點の偵察を電命するところあつたが、渤海北岸は風雪のため冬季に於ける揚陸は困難と判り、この作戰は中止され、まづ威海衛を攻略して、敵艦隊

を殲滅することとなつた。十二月二十三日軍艦高千穗は大連を出發し、山東方面を偵察し二十六日歸つたが、その結果、榮城灣内龍口崖と龍睡との間、及び愛倫灣の北岸が適當な上陸地であると報告した。伊東司令官は前を採つて第二軍の同意を得、榮城灣を上陸地點と決定した。

明治二十八年一月十八日、吉野・浪速・秋津洲は威海衞西方の登州沖を游戈し、高千穗は威海衞を偵察して敵を牽制し、翌十九日、山東作戰軍は、八重山・愛宕・摩耶・筑紫等の諸艦護衞の下に大連を出發、二十日未明榮城灣に到着した。八重山・愛宕・摩耶の三艦は陸戰隊を揚陸して電信線を切斷し、敵の遺棄した野砲四門を奪ひ、大山第二軍司令官の率ゐる山東作戰軍の上陸を掩護したのであつた。

その日榮城縣を占領し、二十五日には全軍上陸を終つた。榮城灣に上陸した海軍陸戰隊は、陸軍と協力して、威海衞東岸の占領砲臺を利用し、劉公島及び日東砲臺を砲擊した。日東砲臺の火藥庫は、わが砲擊によつて爆發した。三十日陸軍の第六師團は海上の艦隊と協力して威海衞の東口に當る百尺崖方面の諸砲臺を攻擊、激戰半日でこれを占領した。一月末東岸の諸砲臺を陷れ、その備砲を以て劉公島・日島及び敵艦隊を砲擊したので、清國側は、威海衞西岸の砲臺も同じ運命に陷り却つて我軍に利用されんことを懼れ、自らこれを破壞したので、二月に入

つて威海衞陸上方面は悉くわが占領するところとなつたが、劉公島・日島のみはなほ陷落せず、丁汝昌の率ゐる敵艦隊はこの島蔭にあつて東西兩口に防材を浮べて死力を盡して抵抗した。伊東司令官は一月二十日投降勸告書を送つたが、一向返辭がなく、愈々山東作戰軍と呼應して最後的攻擊の決心を決めた。かくして防材破壞作戰に着手、水雷艇の夜襲が敢行され、兩夜で十六本の魚形水雷で來遠・威遠・水雷敷設船寶筏號を擊沈し、定遠に二發命中せしめた。これに呼應し二月七日總艦隊をあげて、劉公島及び日島の砲臺を攻擊した。

わが占領砲臺も一齊に砲擊した。九日、この占領砲臺から放つた一彈は敵艦靖遠を擊沈し、十一日には、劉公島東端の巨砲を破壞した。こゝにおいて流石の丁汝昌も百計盡きたと觀念、降をわが軍門に請ふに至つた。十七日わが艦隊は威海衞に入り、敵軍艦十隻を始め砲臺・兵器を悉く收容したのであつた。

大山第二軍司令官は威海衞背面の砲臺を破壞、二月二十五日山東作戰軍を率ゐて金州に凱旋し、別に旅順口から守備兵を派遣し、海軍陸戰隊と共に劉公島を守備せしめたのであつた。

二、澎湖島攻略と速射砲隊の活躍

大本營では第一期作戰が終つたので、第二期作戰として、聯合艦隊を以て支那南方の要地を衝き、陸軍は大平山・鞍山站・牛莊・營口・田庄臺占領の餘勢を以て、山海關を拔き、太沽砲臺を陷れ、大擧北京に迫つて城下の盟をなさしむる計畫を立てた。

三月十六日、大元帥陛下は參謀總長小松宮彰仁親王を征淸大總督に任ぜられた。南征の命を受けた我が聯合艦隊主力は、三月十日過ぎ佐世保に集合、三月十五日午前九時、松島・橋立・嚴島・吉野・浪速・秋津洲・高千穗・西京丸は、歩兵大佐比志島義輝の率ゐる第一師團の豫後備歩兵三大隊と山砲中隊・騎兵・工兵・輜重兵若干より成る比志島支隊を搭載した運送船鹿兒島丸・金州丸・小倉丸・新發田丸・豐橋丸・萬國丸・千代丸の七隻を護衞し、佐世保を出港澎湖島の南部倉島錨地に投錨した。吉野・浪速の偵察によつて澎湖島の裏正角灣が上陸に適當であることが確められた。

二十三日敵の拱北砲臺からの猛射を制壓し乍ら、海軍大佐依田光二の率ゐる揚陸掩護部隊たる海軍陸戰隊が先頭に立ち、比志島支隊を裏正角に揚陸した。この時、松島陸戰隊分隊長土屋保海軍大尉の率ゐる四七密野砲三門を以て編制する海軍速射砲隊は、比志島支隊の指揮下にあつて奮戰し、高千穗副長丹治寛雄少佐の率ゐる銃隊二中隊、野砲隊一中隊より成る聯合陸戰隊もこれに協力して大いに戰つた。

即ち海軍陸戰隊の速射砲隊は二十三日午前四時三十分裏正角に上陸、二十四日拂曉陸軍山砲隊と共に、大武山に放列を布き、拱北砲臺を砲擊し、同六時四十分、同砲臺陷落するや、直ちに馬公城に進擊して、正午これを占領入城し、二十五日馬公城金龜砲擊を利用して、漁翁島を砲擊、二十六日、ジャンクで漁翁島に突入してこれを占領、四月五日歸艦した(馬公城占領の頃陸軍にコレラが流行し、進軍の間にドン〳〵倒れたので海軍陸戰隊は馬公城を占領するや、陸軍との交通を遮斷し、糧食を受けず、鷄や野菜を徵發し、戰爭を知らずに入港するジャンクから野菜と水を徵發した)。

聯合陸戰隊は三月二十四日午前六時、拱北砲臺東岸に上陸、同砲臺及び馬公城の攻略に參加し、二十五日敵將十三名・兵五百七十五名の降を容れ、圓頂山砲臺を占領し、二十六日同砲臺を比志島支隊に引き繼ぎ、午後二時歸艦した。かくの如く陸戰隊の神速果敢な攻擊によつて、

二十六日澎湖島全部を占領し、敵の俘虜千餘人を得、敵の南洋艦隊の根據地はこゝに全く覆滅した。

これより先二月十八日清國は米公使を經て講和全權使として李鴻章を日本に派遣する旨我政府に通じ、三月十九日下關に到着した。我方は總理大臣伊藤博文・外務大臣陸奥宗光を全權辨理大臣として、この談判に應ずることとなつた。三月三十日六ケ條より成る休戰條約に調印、四月十七日正午十一ケ條より成る下關條約を締結した。この結果清國は、朝鮮の獨立を認め、奉天省南部の地及び臺灣を割讓し、軍費賠償として二億兩(約三億圓)を支拂ひ、沙市・重慶・蘇州・杭州の四港市を開くことなどを承諾した。

大元帥陛下には四月二十一日講和に關する詔勅を下し給ひ、大本營を京都に移された。

三、臺灣鎭定戰

下關條約の成立によつて日清戰爭は終つたが、四月二十三日、東京駐箚の露・獨・佛三國公使はわが外務省を訪問し、『日本が遼東半島を領有することは、東洋の平和を害する。故にこれを放棄せよ』と迫つた。これはロシヤが獨・佛兩國を誘つて演じた干涉であるが、この結果、五月十四日、十日付の遼東半島還付に關する詔勅が發布された。

この三國干涉に對するわが朝野の憤激は非常なものであつたが、わけても陸海將兵は血涙を呑み切齒扼腕した。

日清戰役の結果、臺灣はわが版圖に屬したが、清國は日清戰に際し、福建水師提督揚岐珍及び廣東南鎭總兵劉永福を臺灣に派遣し、臺灣巡撫唐景嵩と協力して守備に當らしめた。下關條約の報傳はるや、彼等は大いに憤激し、『斷じて日本の統治を受くべからず』となし、四月二十六日臺北に共和政府を組織、五月二十五日、唐景嵩が大統領、劉永福が軍務總統となつて、各地の土著を動員して掩堡を設け、皇軍に反抗するの氣勢を示したのであつた。

こゝに於て我大本營は海軍中將樺山資紀を大將に任じて臺灣總督に補し、海軍及び近衞師團を指揮して、臺灣鎭定に當らしめることにした。まづ軍艦松島・高千穗・浪速・千代田・大島・西京丸と第四水雷艇隊は淡水港の上陸地點を視察、五月二十八日樺山總督も淡水に到着し、有地艦隊司令長官と協議した結果、陸軍の上陸地點を三貂角附近と決定した。即ち近衞師團は基隆を背面より衝いて、これを略取することになり、艦隊は牽制運動のため、六月三日、基隆沖

に進み、砲臺前三千米に迫つて砲撃を開始した。この時一陣の冷風起り驟雨盆を傾け四邊朦朧となつた。近衛師團は、これに乘じて突進し難なく砲臺を陷れた。自稱臺灣民主國大統領唐景嵩は、六月五日淡水港より厦門に逃げたが、劉永福は南部地方に據つて反抗したので、七月二十九日、近衛師團は第二期攻臺の軍を起し、臺北から南進を開始した。八月八日、新竹附近の賊を平げ十四日賊の本據苗栗を、二十五日臺灣府を、二十八日彰化城を占領して、臺灣島北部の戡定を終つたのであつた。

賊將劉永福はなほ臺南を固守し頑強に抵抗してゐたので、大本營では三面攻撃の計畫を立て、南進軍司令官に高島鞆之助中將を任命、臺灣副總督とした。北白川宮能久親王殿下御統率の近衛師團一萬五千は彰化より嘉義を經て臺南に向ひ、乃木希典中將の率ゐる第二師團二萬五千は南部枋寮より鳳山を經て臺南に向ひ、伏見宮貞愛親王殿下御統率の混成第四旅團一萬三千は西部布袋嘴より臺南の前側面に迫ることとなつた。南進軍司令部及び伏見旅團、乃木軍は當時澎湖島にあつたが、十月十日午前六時、南進軍と伏見旅團を載せた十九隻の運送船が、浪速外二艦の護衛の下に折柄の强風を冒して出發、午前十一時布袋嘴に投錨、陸上の敵を追つて翌十一日全部上陸を終へた。乃木軍は同じく十日の午後三時、二十餘隻の運送船に乘り、吉野・秋津洲な

どの五艦護衛の下に出發、十一日午前三時枋寮に到着、即日上陸を完了、戰備を整へた。

常備艦隊吉野・浪速・秋津洲・八重山・大和・西京丸は十五日打狗(高雄)の砲臺を攻撃し、四百餘名の陸戰隊を揚げて、これを占領した。乃木軍は十二日東港を占領、十六日鳳山を略取し、近衛師團・伏見旅團も臺南に向つて進撃した。高島司令官は二十三日を以て臺南總攻撃の日と定めた。

十月二十一日拂曉、わが常備艦隊は安平沖に現れ、陸戰隊揚陸の準備を行つた。日清戰役を通じて陸戰隊の裝備も著しく近代化し野砲隊なども整備されてゐた。各艦の陸戰隊乘艇は軍艦濟遠の艦尾に集合し、午前七時二十分、松枝指揮官の指揮の下に海岸に沿うて北進を開始した。艦隊は陸岸を掃射して、これを掩護した。午前八時十五分、陸戰隊は安平砲臺の南方約三千米に上陸を敢行し、第一中隊は直ちに安平砲臺に向つて前進、第二中隊は援隊として背面及び側面を警戒した。この時數十名の敵が南に潰走するのを追撃し、うち四名を殺し、野砲一門を破壞した。

第一中隊は大砲臺三百米の地點に到着したが、地圖の上にない河流に直面した。幅約百米、水深は人を沒する狀態であつた。この報らせを受けた松枝指揮官は、大隊副官山下源太郎大尉

を現場に急行せしめて調べさせたが、到底徒渉は出來ないと判明した。そこで松枝指揮官は山下大尉に第二中隊を督勵し、短艇を以て對岸に渡り大砲臺を占領するやう下命した。河に前進を阻まれた第一中隊の野砲隊長森弘少尉は、突如砲車の上に躍り上り、

『やア／＼諸君よ、諸君！　國家に盡すはこの時なり、進め、進め！』

と怒號した。これを聞いた隊員は、附近から木材や、竹を拾ひ集めて速成筏を造り、これに野砲を積んで河を渡つた。更に對岸にあつた竹筏數隻を奪つて全部渡河し、難なく大砲臺を占領したのであつた。

大隊副官の山下大尉は、第二中隊の二箇小隊を指揮し、北方の河口に達したが、水が淺くて短艇を入れることが出來なかつたので、通船四隻を河口に入れてこれを渡り、附近にあつた舊式砲三門を備へた一土壘を占領した。この時大砲臺は既に第一中隊によつて占領されてゐた。指揮官は第二中隊に對し安平市街の占領を命令したので、同隊は更に進擊を續行し、小砲臺を占領、市街の中央の丘を目標として突進したが、市街の東南端にゐた五六十名の敵兵は忽ち敗走した。この時、臺南に通ずる道路を安平に向つて進んで來るわが陸軍兵の一隊が見えた。これは乃木軍の兵であつた(この日乃木軍が臺南に進んで見ると、城内には一人の敵兵もゐなかつた)。

そこで山下大尉は第一小隊の第一分隊に海岸舊砲臺の占領を、第二分隊には目標點に急行し軍艦旗を揭揚せよと命令した。第二分隊が丘まで進んで行くと、敵兵數十が各所に群衆し、丘の上には六七百の敵兵が武裝してウロ／＼してゐた。これを見たわが先行部隊約二十名は不意を衝いて突貫した。狼狽した敵は忽ち蜘蛛の子を散らすが如くに潰亂し、丘の後にある居留地に接する廣い街に集合した。先行分隊は丘上の旗竿に軍艦旗を揭げ、更に追擊すると、恐れ戰いた敵兵は跪いて、武器を差し出し降伏した。

第二中隊は丘の兵舍全部を占領して、稅關荷揚場を捕虜收容所とし、市内に散亂してゐた五千餘名の敵兵をこゝに追ひ込み、後に陸軍運送係黑井悌次郎大尉が、一隻の運送船に荷物の如く詰め込んで厦門近くの海岸に捨てて來たのであつた。賊將劉永福は既に十月十九日身を以て臺南を脫出し、安平港より英船デールス號に搭じて厦門に逃げてしまつてゐた。

二十二日他の軍も難なく臺南に入城した。久しく硝煙彈雨の間に遠征軍を指揮せられ御發病後もなほ御進軍を續けられた　能久親王には二十八日午前七時過ぎ、病重らせ給ひ御年四十九歲を以て薨去遊ばされた。誠に畏多い極みであつた。十一月一日乃木軍が恒春城を占領したのを最後として臺灣全島は全く鎭定、近衛師團は十二月一日東京に凱旋し、第二師團は數ケ月守

備に任じた後、明治二十九年四月二十日仙臺に凱旋したが、この遠征に當つての海軍陸戰隊の活躍は上述の如く相當目覺しいものがあつた。

〔註〕明治廿六年二月十日　明治天皇は、『國家軍防の事に至りては苟も一日も緩くする時は、或は百年の悔を遺さむ、朕玆に内廷の費を省き六年の間毎歳三十萬圓を下付し、又文武の官僚に命じ特別の情狀ある者を除く外同年月間共俸給十分の一を納れ以て製艦費の補足に充てしむ』と製艦費補足の詔勅を下し給ひ、貴衆兩院議員も六年間歳費十分の一を納めることを決議した。廿八年十二月の第九議會では七師團增設と海軍五萬噸擴張案が成立、翌年の第十議會では海軍第二期擴張案として、卅年より卅八年に至る九ヶ年計畫を以て戰艦六隻・裝甲巡洋艦六隻の六六艦隊案が提出された。廿九年二月英國に註文した軍艦八島が進水し、同三月には富士が進水した。卅年七月舞鶴に鎭守府が設置された。

北清事變

眠れる獅子であつた支那は、日清戰役後は中風症に罹つた豚のやうになつた。その肥滿せる肉の豐富にして無限の資源は歐米諸國の食欲を唆らせ、猛鷙の燕雀に臨むが如き態度を以て利權獲得運動を起し、支那分割論さへ起つた。利權爭奪の萠芽は、支那が日本に支拂ふべき軍費賠償金二億兩（三億圓）と遼東半島還付代償三千萬兩（四千五百萬圓）に要する資金調達の押賣運動から發生した。支拂能力のない清國の弱點に附入つて、まづロシヤはフランスと語らひ明治二十八年六月三十日、四億法を貸すことにしたのであつた。これより先に支那はイギリスに借款交渉を行つてゐたので、これを知つたイギリスは支那の不信を責め、ドイツもこれに加擔して露・佛と英・獨との間の爭議となり、遂に協議して雙方一千六百萬磅宛を貸すこととなつた。ロシヤは資金援助のみでなく、遼東半島還付に盡力した報酬として支那を懷柔し、二十九年六月カシニー條約を締結、滿洲における鐵道敷設權を得、露清銀行設立、十五年間膠州灣租借を

承認せしめ、明治三十一年三月膠州灣の代りに關東州を二十五年間租借することを承認せしめた。遼東還付に同功一體の獨・佛兩國も野心滿々たるものがあり、三十一年三月六日、ドイツは膠州灣を、同年七月一日イギリスは威海衛を、三十二年フランスは廣州灣を租借、各種の權益を掌中に收め、各國はそれ〴〵の勢力範圍を劃定して豺狼の如くに侵略を開始した。

恰も甘肅・浙江には大飢饉があり、山東・直隷・安徽には大水害が起つて、諸所に一揆が勃發、盜匪が横行、政治に對する不平不滿は祕密結社となり、排外思想が旺盛となつた。明治三十一年四月、變法自强の政變あり、康有爲等の志士が制度を改革したが、翌三十二年西太后が改革派を斥け、端群王の子、僅か七歳の傳儁を穆宗皇帝の皇太子として、端群王と共に義和團の排外攘夷の計畫を煽動したのであつた。

明治三十三年四月、山東省を中心に、北支那の義和團が一齊に蜂起し、外教排斥・洋夷撲滅を叫び、各國宣教師に對する暴行殺害を開始した。北京における英・米・佛・獨・伊の五ケ國公使は聯合して、總理衙門に鎭定方を申込み、米・英・獨の軍艦は太沽に集結して强硬な態度を示し、イギリスは償金九千兩を要求するなど、形勢穩かならざるものがあつたが、ロシヤ公使の斡旋によつて一應解決した。

然るに端群王などが、ひそかに排外的行動を奬勵したので、五月中旬、義和團は保定府において天主教徒六十名を殺し英教會堂を破壞し、再び北支に擴大せんとするの勢を示した。外國使臣は北京に會合して、總理衙門に對し、速かな防禦の措置を勸告したが、彼の力を以てしては如何ともなすべき術がなかつた。五月二十八日、俄然形勢は惡化し團匪は北京・保定間の鐵道を破壞し、北京・天津間の一停車場を燒き、鐵道の一部を破壞するに至つた。

團匪の勢ひ漸く盛大となるに至つて各國軍艦は太沽沖に集合した。これらの諸艦は、日本一隻(河用砲艦愛宕)、英七隻(戰艦センチュリオン・エンデレーシオン・その他)、米一隻、露七隻、佛・獨・伊各二隻、墺一隻、合計二十二隻であつた。五月下旬北京駐箚各國公使の要求によつて約七百五十名の聯合陸戰隊が、公使館保護のため北京に乘り込んだ。この內軍艦愛宕の陸戰隊は僅に原胤雄大尉の率ゐる二十四名に過ぎなかつた。當時各國陸戰隊の員數は次の如くであつた。

イギリス	八二	アメリカ	五八	ドイツ	五一
フランス	七八	イタリア	四一	ロシヤ	七四
オーストリア	三五				

その後北京の形勢は日に惡化した。橫須賀碇泊中の巡洋艦笠置は五月二十九日急遽太沽沖に出動すべき命を受け、六月四日太沽沖に到着し、五十二名の陸戰隊を揚陸したが、その翌日か

ら北京・天津間の鐵道は不通となつたのである。當時北京にある英公使より、英支那艦隊司令長官シーモア中將宛に、

『北京の狀況は刻々危急に迫りつゝあり、出來る限り多數の兵員を率ゐて北京外交團を救援されたし』、

と電報した。かくて英國司令官司會の下に英旗艦センチュリオンに於て列國指揮官會議が開催され、鐵道の修理を支那側に委せておいては埒があかぬので聯合陸戰隊の手で修繕しつゝ北京に進むことに一決した。直隷總督を促して車輛を準備せしめ、六月十日に至つて漸く萬般の用意整ひ、聯合軍は意氣揚々と天津を出發した。總兵力は二千五十五名（英九一五、獨四五〇、露三二〇、佛一五八、米一〇〇、日五二、伊三五、墺二五）であつた。

これより先、北京駐箚のわが公使からも陸戰隊增派の要求があつたので、更に一ケ大隊の陸戰隊が佐世保で編制された。これが後述する服部部隊である。この間東郷平八郎中將は常備艦隊司令長官として軍艦常磐・鎭遠・松島・吉野・高砂・秋津洲等の諸艦を率ゐて太沽に廻航つしゝあつた。

一、聯合陸戰隊重圍を突破

六月十一日、各國增援護衛兵は天津を發し北京に向つたとの報に接し、これを迎ふべくわが外務書記生杉山彬は、馬家堡停車場に赴く途中、永定門附近で董福祥部下の馬隊に亂打されて慘殺された。十二日には英公使別莊その他歐洲人の住宅が燒かれた。

十日天津を出發した陸戰隊の列車が白河に差し掛ると、鐵道レールがはづされてあつた。これを修理して進むと、また線路の故障に會ふといふ始末で、第一日は僅かに數哩を前進したに過ぎなかつた。翌十一日落岱驛附近に於て初めて團匪と銃火を交へつゝ、十三日北京・天津の略〻中央に當る郎坊驛についた。こゝで更に各國指揮官會議が開かれたが、團匪による鐵道の被害は豫想以上で、聯合軍は遲々として進まず、今後の行動も心もとなしとして、一應前路の狀況を偵察することに一決し、英兵約五十名より成る一隊を先遣したが、間もなく歸つて、

『郎坊驛より北方約五哩の間殆んどレール一條をも見ず』

と復命した。諸將は愕然として、

『汽車にて進むにも修理材料、既に盡きてゐる。この上は糧食・彈藥を天津より取寄せて長期作戰の準備を整へ、徒步前進する外はない』

と衆議一決、十五日一列車に使命を託して天津に送還したが、暫らくして列車指揮官が歸つて來て、

『途中白河の鐵橋既に破壞され、天津に歸ることは不可能となつた』

と告げた。かくして聯合軍は全く進退兩難に陷るに至つた。軍議の結果、聯合軍の一部を楊村に引揚げ、一部を以て、楊村・郎坊間の警戒に當らしめ、天津との連絡を回復することになつた。然るに白河の鐵橋を破壞したのは團匪ではなく、當時同方面に駐屯してゐた聶士成麾下の正規軍であること判明するに至つて、事態は益〻重大となつた。

天津方面では十七日聯合軍は太沽砲臺を占領し、清國軍と聯合軍は既に戰鬪の火蓋を切つたのであるが、シーモア軍には一向この消息は傳はらなかつた。官兵の鐵道破壞云々も半信半疑であつたが、十八日に至つて郎坊方面の聯合軍は約三千の敵軍によつて攻擊された。この軍隊は『董』の字を書いた大旆を飜し、また『奉旨義和團扶清滅洋』といつたやうな旗もあつたのは、明かに董福祥麾下の官兵が義和團に合流してゐたことを示した。

この戰鬪で聯合軍は敵を擊退はしたものの約五十名の死傷者を出したので、今後永く郎坊に留まることの危險を感じ、退いて落岱に集結したが、かく官兵によつて前後を扼さるゝ以上、一まづ天津に歸る外途がなかつた。しかし前日までの戰鬪による四十餘名の負傷者を抱へ、これを運搬するには頗る苦心したが、幸ひ白河に三隻の戎克を發見したので、負傷者をこれに收容し下航することとし、翌十九日聯合軍は楊村にて列車を捨て、負傷者收容船を曳行しつゝ白河の兩岸に沿うて天津に向つた。晝間は官兵や匪賊の來襲を擊退しつゝ、夜間は露營の夢も圓かならず、日を重ねること四日、漸く天津郊外約二、三里と思はるゝ地點に到着した。

こゝは西沽と呼ばれる部落であるが、聯合軍が河の曲り角を進むと堅固な土手を繞らした堡壘のやうなものがあつた。一同これを怪しむうちに、堡壘の敵兵は急に銃火を開き、雨霰の如くに亂射した。この不意打に面喰つた聯合軍は暫時苦戰を續けたが、遂に敵壘に向つて强襲し、漸くにしてこれを占領した。此堡壘には武庫があり、數棟の建物には多數の小銃・野砲・機銃・彈藥があつたので、聯合軍は一先づこゝを足溜りとして後圖を計ることとした。

この時味方の負傷者は既に二百五十名を數へ、殘りは二千名に滿たなかつた。清軍は武庫陷落と聞いて大擧これが奪回を企てた。聯合軍は防戰大いに努め、激戰七時間にして漸く敵を擊

退したが、戰鬪の終期には、聯合軍の彈藥は殆ど盡き、各國軍とも武庫内に貯藏してある彈藥や野砲等を持出して使用した。二十五日、ロシヤのステツセル將軍を指揮官とする聯合軍約二千名が來援したので、西沽壘上の一同は勇氣百倍、こゝを後に天津に向ひ翌二十六日無事歸着した。

この行動中、聯合軍が如實に困つたものは糧食問題であつたが、日本軍にとつて好都合なことは、支那の村落には到る所の民家に饂飩粉類が相當あつたことである。日本の將兵はこれによつて團子を作り、鹽をつけて喰つた。またその頃畑には多くの胡瓜があつたので、これを腰に提げ、戰鬪し乍ら飢渴を凌ぐといふ有樣であつた。これに反し、外人には全く喰ふ物がなかつたので、彼等は一層の困難を嘗めた。また西沽武庫の中には白米が多量あり、わが軍は思ひがけぬ米飯に力を得た。要するに有合せのものを食べるといふ日本の主義が、この行動において非常に幸ひしたことが實證された。

二、わが陸戰隊の奮戰

前述、北京のわが公使の要請によつて佐世保で編制された陸戰隊は、銃隊二箇中隊・野砲二門・總兵力約三百三十名であつた。佐世保海兵團副長服部雄吉中佐が、この指揮を拜命、六月十二日軍艦豐橋によつて出發し、十五日太沽沖に到着した。無線電信のない當時にあつては、航海中の出來事は全く判らない。たゞ太沽沖合に居並ぶ列國軍艦が、何れも濛々たる黑煙を沖天に棚曳かせ、事態のたゞならぬものを思はしめるものがあつたが、我が軍艦としては僅かに笠置・須磨の二巡洋艦を認めるのみであつた。當時服部指揮官の受けた情報としては、シーモア隊の北上したこと、同隊と天津との連絡が杜絶し、爾來所在行動全く不明といふことなどであつた。服部指揮官は、まづ先任指揮官である笠置艦長を訪問したところ、

『まづ太沽に行き、停車場の守備をし、外國軍が停車場に來たならば、これと交代して天津・北京の方面に向ふやう』

との訓令を受けたので、翌十六日早朝艦を出發し、太沽へと白河を遡つた。この時江上には軍艦愛宕の外に數隻の各國砲艦が碇泊してゐた。當時は英・露兩國が覇を稱へ、勢力竝ぶものがなく、我國の如きは東洋問題の解決上、あまり發言權を有たない時代で、何事も兩國の提言に追從するやうな有樣であつた。それで服部部隊が太沽に着くと、ドイツ陸戰隊と協力して太

沽停車場を警備することになつた。

この日午後に入つて市中の形勢不穩となり、夕刻には附近一帶の支那人の影さへ見えず、町は全く無氣味な沈默に陷つてしまつた。服部中佐は、軍艦愛宕を訪問したが、その時艦長から一通の書類を示された。それは各國海軍指揮官會議の決議書であり、その內容は今夜列國は太沽砲臺を占領するといふのであつた。その理由としては、支那側は白河の河口に水雷を敷設しまた砲臺の守兵を增したらしい。今この河口を塞がれては甚だ不利だから、一まづ砲臺を我の方で預かる必要があるといふのであつた。而して實行の方法としては砲臺の明渡しに關する最後通牒的要求を直ちに直隸總督と砲臺守備隊長に送り、翌十七日午前二時までに應諾の回答に接しなければ、同三時を期して各國砲艦は太沽砲臺を攻擊し、聯合陸戰隊を以てこれを占領するといふのであつた。

この決議書を見て服部中佐が非常に當惑したのは、笠置艦長より受けた訓令の要旨は、天津・北京方面に行けといふのであつて、太沽砲臺の占領などは全く寢耳に水である。陸戰隊の任務は京津におけるわが權益の擁護である。しかも義和團を鎭壓すべきは支那政府であり、陸戰隊は必要に應じ支那官兵を援助することさへ、正當と考へられたのであるから、今直ちに列

國指揮官會議の決議に從つて、清國軍に對し戰端を開くといふことは、その結果甚だ重大である。しかし乍ら無線電信のない當時、沖合遙かの笠置に請訓する暇はない。服部中佐は熟慮の末、列國軍に參加して愈々砲臺を攻擊することに決し、この旨關係各部に通知すると共に、陸戰隊を二分し、一部を塘沽に留めて停車場を守らしめ、他の一部を率ゐて進發することとし、準備を整へ、午前三時の砲擊を待つこととした。

然るに支那兵は機先を制し午前一時頃、聯合軍に對し砲擊を開始した。そこで陸戰隊は至急配置に就き、砲臺に向つて進擊を開始した。そのうち各國軍艦も漸次砲臺附近に下江し、主として、北西砲臺に砲火を集注した。わが陸戰隊は步武肅々闇を衝いて進むと、外國兵も途上竝進するものが漸く多くなつた。午前二時四十分頃、一度砲臺の正面に部隊を散開したが、敵彈は急霰の如く飛來するので聯合軍は一時路傍に引揚げ、艦砲の威力によつて砲臺の沈默するのを待つこととした。この時各國指揮官は軍議を開いたが、闇中敵を前に控へて各自國語で興奮して喋るので話がよく判らない。しかし大體散開のときは、砲臺に向つて右から國名のABC順に竝ぶといふことが判斷された。それによれば道路に近く英軍、次いで獨・日・露の順となり、日本軍は道路から離れて砲臺突入の時、後れをとるの虞れがあつた。そこで午前四時頃二

度目の散開の時には、我軍は暫く後方に集結して機を窺つてゐた。

聯合軍が漸次砲臺に向つて進むと、敵は盛んに射彈を送つて來た。聯合軍は逡巡して進まない。砲臺の前面は身を隱すものもない一面の鹽田であり、眼前には小銃彈が砂煙を上げて飛來するので頗る危い。外國陸戰隊が辟易躊躇して攻めあぐんでゐるのを見た我陸戰隊は、

『外國兵の意氣地なし奴！』

とばかり、服部指揮官の命令一下、最後の列から拔け出し畑を突切り、捷徑をとり、各國聯合軍を尻目にかけ、忽ち砲臺の下に迫つた。服部中佐は忽ち清兵共の狙擊に遭ひ、不幸腹部に敵彈を受け重傷を負ひ、死傷續出する有樣であつた。わが將兵はこれに憤激、先任中隊長白石葭江大尉は猛然砲臺に迫り、身を躍らせて砲臺内に跳び込み、そこにあつた小さな丸太棒を揮つて群がる清兵共を打ち斃し、更に内壁に攀ぢ登り砲臺上に突立つた。かくして北西砲臺は我軍により、先頭第一に占領された。この時後れ馳せに駈けつけた一英士官は、我を出し拔いて英國旗を砲臺の旗竿に揭げようとした。これを見た白石大尉は大いに怒り、

『この野郎、不埒な奴！』

と得意の柔道で投げ飛ばし、馬乘りになつて彼の咽喉を締めつけそれを阻止した。しかし同

大尉は軍艦旗を持合さなかつたので困つてゐると、その中に日章旗が中隊長野崎小十郎大尉の手によつて他の旗竿に揭げられたので、白石大尉も英士官を許し、英國旗が二番目に砲臺の旗竿に飜つた。時に午前五時。重傷を負つた服部中佐は治療所に送られたが、戰果を見ず英魂空しく去つたのであつた。白石大尉は、後年日露の役に旅順港閉塞に驍名を馳せた佐倉丸の指揮官白石少佐である。北西砲臺占領に次いで、聯合軍は難なく北及び南兩砲臺を陷れ、白河河口の交通線を確保することが出來た。

太沽砲臺陷落の報は、清廷にとつては正に青天の霹靂であつた。六月二十日ドイツ公使が清兵に殺害されるや、事態は遂に決裂し、端群王は官兵と團匪を合流せしめ、各國公使館を攻擊せしめ、一部を以て、天津居留地を攻擊し太沽砲臺を奪還せんとした。二十日から七月上旬に至る約二旬の間は、公使館區域に對する支那軍の攻擊最も執拗を極め、各國の少數陸戰隊及び義勇軍は、公使館の防衛に惡戰苦鬪を續けた。

團匪を鎭壓するため出兵するとすれば、我國が最も便利な位置にあつたことは勿論である。しかし當時日本は、列國の前に發言權なく、大兵を動かすことは列國の猜疑を招く虞れがあり、勞して效なき結果を憂へ、出兵に就いても自然遠慮勝ちであつた。しかし日本としては成

るべく速かに事態を平靜に歸せしめることは、虎視眈々たる列國の對支行動を封ずる上に最も必要であつた。

この間事態は益々惡化し、列國としても地理的關係上、日本の積極的出兵を要望するに至つたので、六月二十六日更に第五師團の出動となつた。これと同時に英・米・露・佛・獨・伊・墺の諸國も概ね手近の所から陸兵を派遣し、次いで本國から派兵を計畫するものもあつた。これより先、天津方面では太沽砲臺陷落と共に官兵は匪賊と合流し、天津居留地を攻擊した。その勢力は約五萬。これに對し在天津聯合軍は、英・獨・露の陸兵及び各國の陸戰隊員を加へ七千名に過ぎなかつた。それで當分專守防禦を續ける外なかつたが、六月十五日の閣議で派遣に決した我が混成一ケ聯隊約三千五百名（廣島第五師團）の到着と共に、聯合軍の氣勢大いに揚り、七月十四日には天津城を占領した。この戰勝の結果、支那側も恐怖し、公使館區域に對する攻擊の手を緩めた。この日第五師團の先頭が太沽に到着して逐次天津に向ひ、その大部は七月下旬までに天津に入つたが、當時天津に集合した聯合軍總勢力は約三萬三千名、うち一萬三千名は日本軍であつた。

かくして聯合軍は八月五日を期し北京進擊を開始したが、わが軍は常に第一線の難局に立つ

て連戰連勝、八月十四日聯合軍の北京入城を見た。これより先、光緒皇帝及び西太后は西安府に避難した。その後清國政府は慶親王及び李鴻章を全權大使として、列國と講和談判を進め、八十餘回の會談によつて翌三十四年九月成立した。その和議の條件には、

一、主謀者の處刑。
二、列國に對し償金四億五千萬兩を支拂ふこと
三、太沽及び北京・太沽間諸砲臺の廢却。
四、公使館に護衛兵を置くこと。
五、各國の北京より山海關に到る重要地點（黃村・郎坊・唐山・灤州・昌黎・楊村・天津・軍糧城・塘沽・蘆臺・秦皇島・山海關）の占領權を認むること。

等の條項が含まれてゐた。北清事變の戰鬪こそは、我が國軍の眞價を列國軍の眼前に示した最初の舞臺であつた。而して、服部中佐の率ゐた海軍陸戰隊が、その主役であり陸戰隊の活躍は、こゝに至つて愈々本格的段階に入つたのである。兎もあれ本事變は、事件そのものは小さいが、我國にとつては世界の檜舞臺に進出すべき登龍門であり、しかもこの役で日本人の武勇と陸海軍の價値を如實に列强に示すことにより、見事、この難關を突破することを得たのであ

る。その後一年有餘にして、イギリスが從來の『光榮ある孤立』の國策を捨てて我國と同盟條約を結ぶに至つたことは、イギリスが、ロシヤを抑へ自國の植民權益の增大を圖らんがため、皇軍を利用せんとする謀略に出たものであるが、要するに皇軍の精强に驚嘆して、その力によつてその野望を滿たさんとしたものと謂へよう。

日露戰爭

ロシヤは日清戰役につけ込み、滿洲における鐵道敷設權を得、關東州を租借したが、義和團事變は、更に彼の野心を增長せしめた。即ち北支・滿洲の騷亂鎭定を名目とし大兵を出動して、全滿洲を占領した。更に朝鮮半島に手を伸ばし、龍巖浦を根據とし、鴨綠江上流の森林伐採權を獲得、鎭南浦・仁川・木浦・馬山・元山等の要地を買收して、露人の私有財產とし、京城の露國公使館と大觀亭に機關砲を据ゑて威力を示し、旅順には鎭守府を置いて要塞を構築した。

大連には汽船と汽車との連絡接續の施設を行ひ、琿春より牛莊・金州に到る間には步兵四萬四千・騎兵一萬六千・砲兵二千六百・將校千三百六十・下士三千六百・豫備兵八千と、從來の駐屯兵九千を合せて九萬人と、砲二百二十門を置いて滿洲四十萬哩の地域をその掌に入れ、民政を布いて支配權を握つた。この實態を押しかくさんがため、ロシヤは明治三十七年八月二十五日、列國に向つて、滿洲の秩序が恢復し、東淸鐵道保護の必要がなくなれば、他國の行動が障碍

せざる限り、兵を清國版圖内から撤去すると宣言した。しかし撤兵は彼の本意ではなく、北清事變に際しては、列國と歩調を一にしつゝ成るべく講和條件を輕減して、恩を清國に賣らんと試み、三十三年十月から翌三十四年十月に至る間に三回に亘つて祕密條約を締結せんとした。これは列國特に日・米・英の抗議のために失敗した。更にロシヤは明治三十四年六月以來、鋒を西藏に向け、これを占領せんとする形勢を示した。

遂に英領印度の防衛を脅かされるに至つて、イギリスは、日英同盟を提議し、三十五年一月三十一日、日英同盟の締結を見た。この同盟の成立は清國に反省を促した。李鴻章の執つた親露政策は、彼の死と共に消滅し、李に代つて北洋大臣の要職に就いた袁世凱は、日英に賴るのを有利となし、西太后・慶親王を説いてロシヤ軍の滿洲撤兵要求を行ふこととなつた。清國の要求によつて、北京にあつたロシヤ公使レツサーは三月二十六日、滿洲還付條約を結び、向ふ六ケ月以内に盛京省より、次の六ケ月以内に吉林省より、更に次の六ケ月以内に黑龍江省より撤兵する事を約した。

然るに第一回の撤兵期十月八日には、奉天西南部のみを撤兵したが、實は撤兵でなく移動でその兵を盛京省東部に配置した。

第二回撤兵期の三十六年四月八日には撤兵しないのみか、鴨綠江方面から南滿洲一帶の地にかけての駐兵を增加し、旅順の防備を嚴にし、代理公使ブランソンをして撤兵附帶條件として七ケ條より成る要求を出した。これは、全滿洲をロシヤの保護下に置き、地域を閉鎖し獨占する案であつた。清國は日・米・英等の勸告によつてそれを拒否したが、ロシヤは更に四ケ條の要求を突きつけると共に、陸相クロパトキンは東京に來て我國情を視察し、歸途旅順に十日間滯在して、東洋總督、駐清・駐韓兩公使、露清銀行支配人等を招致して假令日本と衝突しても、東亞經營は斷行すべしと決定した。

こゝにおいて七月以來、ロシヤ軍の南下は一層露骨化し、七月十二日旅順には東亞太守府を置いて、バイカル以東の軍事・行政・外交を掌握せしめた。

遼東半島の還付と云ひ、その後における朝鮮の景福宮の變における邦人三十餘名の慘殺事件と云ひ、何れもロシヤの策謀の現れであつたが、事こゝに到つては最早や、隱忍にも限度があつた。政府は六月二十三日御前會議を開いて對露方針を決定、これをイギリスに通告協贊を得ると共に、對露交渉を開始した。談判地を東京に決め、ロシヤはローゼン公使が全權となり、我が方は小村外相が全權となつて十月三日より二十六日まで六回の會談を行つたが、ロシヤ側

は滿洲を以て日本の利益圏外とし、朝鮮に對しても北緯三十九度以北（平壤より元山に向つての一線）を中立地帯たらしめると主張して譲らず、十月三十日我方が確定修正案を出したのに對しても言を左右にして答へず、戰備に汲々とし、第三回の撤兵期を無視して、却つて増兵、滿鮮に傍若無人の行動を擅にしてゐた。かくて我國民は激昂し、開戰論は沸騰した。しかし交渉は翌三十七年一月十六日まで續けられたが、ロシヤに誠意なく、二月四日御前會議において露國と戰端を開くことに決定、國交斷絶を通告したのであつた。

〔註〕 明治卅六年一月廿一日、横須賀・呉・佐世保及鎮鶴を軍港とした。四月九州方面で大演習を行ひ常備艦隊は九月上旬佐世保に集合した。司令長官日高莊之丞中將に代つて東郷平八郎中將が補され、艦隊は全力をあげて諸種の訓練を續行した。日露の國交急と共に、第一・第二・第三艦隊を編制、第一・第二を以て聯合艦隊とし東郷中將が同司令長官となつて事變に備へ、第三艦隊司令長官には片岡七郎中將が補され呉及び竹敷要港に待機してゐた。十二月廿八日、伊ゼノアで建造中のアルゼンチン巡洋艦二隻を購入、日進・春日と命名した。

皇國海軍は大命を奉じ、明治三十七年二月六日戰鬪行動を開始したが、彼我の海軍勢力は、日本軍艦七十六隻・二十七萬餘噸、ロシヤ四十七隻・十九萬餘噸で我方が優勢であつた。六日

午前九時、聯合艦隊は威風堂々と佐世保を出港し、陸軍少將木越安綱の率ゐる歩兵第十二旅團を載せた大連丸・小樽丸・平壤丸を護衛し、途中ロシヤ船ロシヤ號を拿捕、七日午後一時シングル島附近に達した。

瓜生外吉少將は第四戰隊及び淺間・第九・第十四艇隊及び春日丸・金州丸並に陸軍運送船を率ゐベーカー島を經て仁川に向つた。八日午後四時二十八分、八尾島近くで仁川を出て來た露艦コレーツと遭遇し、日露戰の最初の砲火を開いた。同日夜わが第一・第二・第三驅逐隊は旅順港外の敵艦隊を襲撃し、少くとも三隻に損害を與へ、九日瓜生戰隊は仁川沖に於てワリヤーグ、コレーツと戰ひ、これを爆沈、同日我が聯合艦隊は第一回の旅順攻撃を行つた。

二月十日、浦鹽艦隊のロシヤ・グロモボイ・リユーリク・ボカツイクの四隻が日本海に出動して青森の西方で奈古浦丸を撃沈、全勝丸を砲撃した。十四日驅逐艦朝霧・速鳥は風雪を冒して旅順口を襲撃した。わが艦隊は、第一艦參謀有馬良橘中佐・齋藤七五郎大尉・軍艦朝日水雷長廣瀬武夫少佐・高砂砲術長正木義太大尉などの間に密々旅順口閉塞の計畫が進められ、二十四日有馬中佐が總指揮となつて決死隊七十七名を率ゐ第一回閉塞が行はれた。

二月二十八日平壤方面において彼我斥候の衝突があつた。三月六日、わが第二艦隊は浦鹽に

迫り、港内を砲撃した。二十七日第二回の旅順閉塞が行はれ、有馬中佐總指揮の下に六十五名の決死隊が死地に突入した。廣瀬少佐の戰死はこの時であつた。四月十二日夜、第四・第五驅逐隊・第十四艇隊は、旅順港外に機雷を沈置し、翌十三日、我聯合艦隊は敵艦隊の誘戰を試み、遂に敵主力と交戰したが、旗艦ペトロパウロフスクは、前夜沈置した我機雷に觸れて沈沒し、司令長官マカロフは戰死した。戰艦ポベーダも觸雷して損傷を受けた。

第一・第二回の旅順閉塞は、ともに結果が面白くなかつたので、更に第三回の閉塞が林三子雄中佐指揮の下に五月二日の夕刻、二百四十四名の決死隊によつて敢行され、略〻その目的を達した。この決死隊には北清事變で陸戰隊を指揮し勇名を馳せた白石葭江大尉も參加、佐倉丸指揮官として部下を率ゐ、敵砲臺に斬り込みその他は皆戰死したのであつた。

一、第二軍の上陸を支援

わが陸軍第一軍の先發隊は三月八日安州を攻略し四月四日義州を拔き、三ケ師團は潮の如く鴨綠江南岸に殺到、四月二十九日海軍との緊密なる協力の下に渡河戰を敢行し、虎山の西北方

高地を占領、進擊態勢を整備し、五月一日安東縣を攻略、九連城に入城した。

滿洲の戰線は長く廣く、續々と軍を繰り出す必要があるので、三月第二軍が編制された。奥保鞏大將を司令官とし、第一師團・第三師團・第四師團の三ケ師團に砲兵第一旅團を配し、總兵力四萬二千、野砲百八十門、全軍は廣島に集り、四月十一日より二十五日まで、運送船二十五隻を以て出發した。鎭南浦に集合、五月三日海軍の第三艦隊の第七戰隊（十一艦と水雷艇三隻）が掩護の任に當つた。この時海上は數次の旅順攻擊、三回の閉塞によつて、敵は屏息して居り更に危險を感じないが、上陸地における敵の抵抗を憂慮しなければならなかつた。

陸軍の上陸地と定められた鹽大澳は、上陸には良好至便であつたが、その東北の貔子窩には二三百の敵騎兵が駐屯した事實あり、臺山には監視兵もゐたので、上陸に困難が感ぜられた。海軍では豫てからこの上陸を掩護するため陸戰隊を編制、水兵のうちでも劍術の優秀なもの千餘名を選拔し、これに陸戰に必要な訓練を夜を日についで猛烈に仕込み、四ケ大隊十六ケ小隊に編制し、野元綱明大佐指揮の下に、全員日本刀を佩び四月二十七日香港丸・日本丸の二隻に分乘して佐世保を出發、第三艦隊に從つて五月四日夕貔子窩灣に入つた。當時百名位の敵兵が丘を守備してゐたが、我が一軍艦が發砲するや驚いて逃げてしまつた。五日早朝陸戰隊が上

陸し、臺山・葵家屯・金州街道に二分して搜索したが、敵影を見ることが出來なかつた。この時第三艦隊は貔子窩を威嚇砲擊して牽制した。陸戰隊は上陸の安全を認め、臺山の頂に日章旗を樹てた。陸兵輸送船隊は直ちに貔子窩灣に入り、鹽大澳への無血上陸を開始、八日までの間に全部上陸を完了したのだつた。日露戰爭において陸戰隊が活躍したのはこの時からである。

五月九日、東鄕司令長官は艦隊根據地を裏長山列島に移したが、十二日第四十八號艇は大窯口掃海中觸雷沈沒し、同じ場所で十四日軍艦宮古も觸雷沈沒した。十五日午前一時頃軍艦吉野は旅順港外を去つて根據地を引揚げる途中、濃霧のため僚艦春日と衝突して沈沒、十五日戰艦初瀨・八島も旅順港封鎖の任務に從事中、觸雷沈沒し、その夜軍艦龍田は根據地に引揚げる途中光綠島附近で濃霧のために坐礁、十七日軍艦大島は塔山沖より金州灣に向ふ途中、赤城と衝突沈沒し、同日驅逐艦曉は老鐵山の南方に於て觸雷沈沒した。かくて僅か六日間に七隻沈沒、一隻坐礁し、八隻を失ひ、將兵八百三十九名が戰死した。想へばこの數日は我海軍の大厄日であつたと云へる。

鹽大澳に上陸した第二軍は普蘭店方面の鐵道・電線を破壞し、南北の連絡を斷つて、旅順方面の敵を孤立せしめた。五月十九日、第十師團は第七戰隊掩護の下に、東青堆子角南尖に上陸

を開始し、第一・第二軍の中間に行動した。第二軍は金州城を攻擊し、これを占領すれば直ちに大連灣に出る計畫を定め、聯合艦隊と相呼應して旅順の敵を陸海軍攻圍の裡に窘束せしめんとしたが、敵は暗夜、又は濃霧に乘じ、巧にジャンク等を利用して、屢々封鎖を破り、その上これらのジャンクは機械水雷を沈置する虞があつたので、東鄕司令長官は、二十六日大本營の命によつて、關東州南部の實力封鎖を宣言した。

この日第二軍は金州城を占領し、直ちに南山に向つて砲擊を開始した。我砲艦筑紫・平遠・赤城・鳥海の四隻及び水雷艇隊は金州灣に入つて猛擊を加へこれを占領した。五月三十日大連を占領した。五月二十六日第二軍から第一師團を割き、これに第十一師團を加へて第三軍を編制し乃木希典中將をその司令官とした。

六月六日乃木中將は鹽大澳に上陸したが、即日陸軍大將に任ぜられ旅順攻圍の任に當つたのであつた。東鄕司令官も同日大將となり、六月二十日陸軍の參謀長大山巖が滿洲軍司令官に任ぜられた。

二、陸戰重砲隊の誕生

六月二十三日旅順の敵艦隊十一艦が脱出を企てたが、わが驅逐艦に襲撃され、戰艦セワストポリは我水雷によつて損傷を受け、何れも港内に逃げ歸つた。以來敵艦は港内深く潜伏して出港しようとしなくなつた。

陸軍の第一軍は七月三十日熊岳城に到着し、楡樹林・樣子嶺を占領、第十師團は、第五師團と合し、第四軍を編制、野津道貫大將が司令官となり、七月二十七日分水嶺の敵を破り、三十一日析木城を占領した。第二軍は八月三日牛莊城及び海城を占領、かくてわが三ケ軍團は協力して遼陽に迫ることとなつた。

旅順攻圍に當つた第三軍はなか〳〵の苦戰であつた。海上封鎖に當つてゐた東郷司令官も乃木軍には痛く同情を寄せつゝあつた。當時陸軍には強力な大砲の準備がなく、また大砲の性能も遠距離に達しなかつたので、海軍の大砲を陸に揚げて使ふといふことが、東郷司令長官と乃木司令官との間に進められ、大本營の命令として出たのであつた。東郷司令

長官は六月十九日片岡第三艦隊司令長官に命じ、陸戰重砲隊を編制して大連に上陸せしめ、第三軍に附屬せしめることを命じた。最初、大連に横附になつてゐた軍艦扶桑から十二斤砲を揚げたが陸に揚げても砲架・砲床の道具が揃つてゐない。そこで機關兵・機關官などが智嚢を絞つて海軍の造船材料・鐵材・鐵板などを持つて行つて臨時應急的なものを拵へた。黑井陸戰重砲隊指揮官は教範にも操典にもない自己考案の砲架を作つた。十二斤砲に次いで十二糎砲が揚げられ、後に十五糎砲を揚げた。人員は黑井指揮官の下に、陸軍の上陸に際し先頭上陸を決行せる陸戰隊をも加へて七百五十名が配された。

かくて八月七日から旅順の背面に港内や市街に向つて遠距離間接射擊を開始したが、八日港内に碇泊中の敵艦を見得る觀測地點を發見して、八日・九日と終日八千米乃至九千米の距離で、十二糎速射砲を以て、連續港内の敵艦を砲擊した。

これがため敵旗艦フェザレウキチでは司令長官ウイツトゲフト少將が負傷し、戰艦レトヴイザンは艦首に近い水線下に彈を受け、七百噸からの浸水があり、大恐慌を起した。彈丸は十二糎だが、時間と數に制限なく、彈着修正は自由自在で面白いやうに命中炸裂する。敵はどこから來る彈丸か判らず應戰する手段なく、遂に坐ながらにして擊滅を待つよりは脱出するに如か

ずとなした。八月十日早朝東郷司令長官は、第一戰隊及び通報艦八重山を率ゐて圓島の北方にあつたが、午前六時半頃、敵艦脱出の警報が相踵いで來た。午後零時三十分、東郷長官は旗下艦隊に戰闘配備を命じ、敵を洋心に誘出するを圖つたが、我艦隊は時機少し遲れ、午後五時半頃山東高角の北方約四十五浬に追擊して砲擊を開始、午後六時三十七分、三笠の十二吋砲彈は敵旗艦ツエレウキチの前檣根部に命中炸裂し、前檣の大部分を破碎し司令長官ウイツトゲフトを斃し、幕僚の全員を死傷せしめ、艦長も負傷して人事不省となり舵柄の損傷で艦體が旋轉して自己の列中に突入した。これがため陣形崩れ、各艦は右往左往した。我艦隊は逃げまどふ敵艦を追ひ廻したが、惜しい哉、日が暮れてしまつた。午後八時、東郷司令長官は驅逐艇隊に襲擊を命じて戰闘を中止した。この夜驅逐隊、艇隊は敵を索めて襲擊したが奏功せず、四艦は旅順に歸り、ツエザレウキチは膠州灣に逃げ込み、アスコトリドは上海に、ヂイアーナは柴根に逃げ、何れも武裝解除の上中立國に監視されることとなつた。

オホーツク海に入り宗谷海峽を經て浦鹽に遁入を企てたノーウキクは、二十日我軍艦對馬・千歳の砲擊を受け樺太コルサコフ港の淺瀨に乘り上げて沈沒してしまつた。芝罘に逃げたレシーテリヌイは、八月十二日、我驅逐艦朝潮及び霞のために捕獲された。この黄海々戰に於いては、少し時機を失したため長蛇を逸することになつたが、この教訓が日本海々戰の大勝の前提となつてゐることを看逃してはならない。

第二艦隊は浦鹽方面に出擊してゐたが、八月十四日午前五時頃、敵旗艦ロシヤを先頭にクロモボイ・リユーリツクが蔚山沖に向つて出て來た所を邀擊し、三隻に大火災起さしめ、リユーリツクを擊沈した。クロモボイは傷手を負つて遁走した。

陸軍の第一・第二軍及び第四軍は九月四日遼陽を占領し、十月十四日、敵を沙河以西に擊退した。第三軍は八月十九日より十二月六日まで四回に亘つて總攻擊を行つた。二〇三高地に對しては十一月二十七日夜から死力を盡して攻擊、十二月六日朝まで激戰を續け、味方が占領すること五回、敵が奪回すること五回、六日朝の第六回攻擊によつて確實に占領したのだつた。

旅順攻圍軍に參加した我海軍陸戰重砲隊は八月十日の黄海々戰後、旅順に逃げ込んだ敵艦が陸上の背面から見えぬやう、海岸の山蔭近く繫留してゐるのを種々の方法で發見し、毎日射彈を注ぎかけて、敵艦の煙突や、通風筒等艦上の構造物を完膚なきまでに擊碎した。海面に浮んでゐるものの、戰闘航海が出來ぬのは固より、乘員は悉く陸上に逃れ、糧食・彈藥も陸揚げして全く生ける屍と化してしまつた。十二月六日赤坂山を占領し、六日より十一日に至る六日

間、二〇三高地から觀測する二十八糎巨彈の猛射擊を以て、港內の敵艦隊を砲擊し、全部擊沈してしまつた。たゞ敵艦セワストポリのみは港外に遁れ出たが、これまた十二月九日より十六日まで、六回に亘るわが水雷艇隊の强襲を受けて沈沒した。

明治三十八年一月、乃木軍は日砲臺・盤龍山砲臺・望臺を占領したが、敵は士氣全く沮喪し、野菜食糧缺乏のため壞血病が蔓延し、この上の抵抗は無用と觀念、午後五時頃、開城を申込んだ。二日午後四時開城協定成り、乃木將軍は水師營でステツセルと會見、十三日第三軍が入城式を行つた。

バルチツク艦隊が東航を急ぎつゝあつた際速かに旅順を陷れることは非常に必要なことであつたが、東鄕・乃木の兩將軍は、この大目的に向つて協同、陸戰重砲隊の活動となつたのであつて、旅順攻圍作戰は、實に立派な海陸協同作戰であつたと云へる。

大山巖大將の率ゐる四十萬の滿洲軍は三月十一日奉天を占領した。旅順陷落後、わが艦隊は愈々力を敵の增遣艦隊に對する準備に集注した。ロジエストウエンスキー司令長官の率ゐる敵艦隊（三十八隻、我が七割六分に當る）は五月十四日、佛領安南のヴアン＝フオン灣を發して浦鹽に向け北上を開始、二十七日朝鮮海峽に迫つた。東鄕司令長官は直ちに三笠を率ゐて加德水道

に出て、四十餘隻の艦艇を從へ、隊伍整々沖ノ島附近に向つて進み、かの有名な敵前大轉換を敢行して、敵艦隊を潰滅せしめたのである。この日本海々戰で敵艦船の擊沈及び自沈二十一隻、捕獲されたもの六隻、中立國港灣に遁入したもの六隻、自國港灣に到着したもの五隻、敵の戰死約五千名、俘虜六千百餘名。これに對し我が損害は、第三十四號艇・第三十五號艇が沈沒、第六十九號艇が驅逐艦曉と衝突して沈沒したのみ。人員の損害も全艦隊を通じ百十餘名・負傷五百八十名で、正に空前の大勝利であつた。

この大海戰の結果、東亞の制海權は全く我手に歸したので、列國は擧つてロシヤのために戰爭繼續無用を說き、講和の時機に達したと述べ、アメリカ大統領ルーズヴエルトは六月九日、日露兩國に講和勸告書を發した。兩國ともこれに應じ、北米ポーツマスに於て講和談判を開始することになり、我國は七月三日外務大臣小村壽太郎・駐米全權公使高平小五郎、ロシヤは前大藏大臣ウイツチ及び駐米大使ローゼンを全權委員とし、九月一日休戰條約を結んだ。この結果ロシヤ側は、

一、韓國に於ける日本の利益を認む。

一、滿洲に於ける野心を拋棄す。

一、關東州租借權を日本に讓渡す。
一、南滿洲鐵道及び炭坑等を日本に讓渡す。
一、北緯五十度以南の樺太を日本に割讓す。
一、北海漁業權を日本國民に許與せんがため日本と協定す。

等を約したのであつた。

三、樺太征討戰

日露講和條約の成立する前、わが國は新に樺太征討の計畫を樹てた。即ち明治三十八年四月一日陸軍においては原口兼濟中將を師團長とする樺太攻擊軍を編制した。海軍においては、片岡七郎中將を司令官とする北遣艦隊を編制した。この艦隊は、第三・第四艦隊（第一・第十艇隊を除く）及び第一驅逐隊より成り、八雲を旗艦とする戰艦・巡洋艦・驅逐艦・水雷艇等四十隻であつた。

樺太攻擊軍はその一部を南部に、その主力を北部に上陸せしめることとなつたが、北遣艦隊

は、陸軍部隊を護衞して前進、七月七日午前三時、樺太沖の豫定集合地點に達した。まづ廣瀨海軍中佐の率ゐる掃海隊が、掃海作業を行ひ、輸送船隊を掃海面に入らしめ、水雷艇隊は上陸地點たる亞庭灣內メレヤ村陸岸近くに進み、吃水の淺い砲艦宇治・赤城・鳥海・摩耶の四隻は索敵砲擊を行ひ、應砲なきを確めて、直ちに陸戰隊約一大隊を上陸せしめた。陸戰隊は丘上に占領旗を立てて萬歲を叫んだ。これを見て陸軍部隊も續いて上陸、直ちに進擊を開始、八日午前四時、南樺太の政治中心地コルサコフを占領した。十日陸軍兵を搭載した巡洋艦二隻と水雷艇四隻は樺太南端のノトロ岬（近藤岬）に進擊、威嚇砲擊を行ひ、陸戰隊を上陸させこれを占領せしめた。敵はコルサコフを退却して後、南樺太の策源地たるウラジミロカフ（今の豐原）に集つたが、我軍主力は十日から十二日拂曉にかけて猛攻を行ひ、これを擊退した。爾來敵軍は四分五裂となり、南端に上陸後六日にして南樺太の戡定を終へた。

原口師團長は南部の指揮を竹內少將に命じ、北軍を率ゐて北樺太征討に向つた。七月二十三日出羽艦隊は、アレキサンドロフスク付近の沿岸を偵察して掃海を行ひ、ヅーエ及びアルコフ河口を威嚇砲擊、二十四日片岡艦隊は、陸軍兵輸送船隊を掩護し、アルコフ付近に向ひ、陸戰隊を上陸せしめ、敵情を偵察し附近の安全を確めて陸兵上陸を掩護した。同日北遣艦隊の主力

は間宮海峡のカストリー灣に入り、バサルト島附近に進んだが、敵は陸上より、我艦隊に砲撃を開始したので、約一時間に亘つて砲撃戰を展開した。忽ち敵要塞と市街には火災が起つたので、我艦隊は一ケ大隊の陸戰隊を上陸せしめて敵を掃攘、八サンチの銅砲二門を鹵獲した。次いで陸戰隊は同灣の南方沿沿海州岸のポートニインペラトルスカヤ及びニコラヤ岬に上陸して、燈臺監守等を捕虜とした。

アルコフ附近に上陸した陸軍主力部隊は疾風の如く進み、樺太全島の統轄中心地アレキサンドロフスキの攻撃を開始したが、我威力に恐怖した敵（歩兵一大大隊、義勇兵二千、野砲八門）は戰はずして遁走した。我軍は更に前進、二十五日ヅーエを占領、又間宮海峡沿岸ムガヂは水雷艇と協力して占領、二十六日から追撃戰に移り、テルベンスコイを攻略、樺太三大市の一つルイコフに於て市街戰を行ひ二十八日完全に占領、俘虜五百を收容した。

敗敵は南方に潰走したのでこれを急追、二十九日、バレオ要塞を攻略、敵をオーロの密林に追ひ詰めたが、三十日樺太島軍務知事リヤプノフ中將が降伏を申入れ、三十一日我小泉參謀長と敵參謀ドリビケ少將との間に停戰協定を結び、我軍は、軍用品・官有動產不動產全部を受領、敗餘の兵三千二百を俘虜として戰鬪を中止し、八月七日ルイコフに於いて樺太回收の祝宴を擧げた。

尙ほ北遣艦隊は八月十三日、間宮海峡のラザレバ角を砲擊し、陸戰隊を上陸せしめ、守備兵と交戰、通信所を破壞して敵を擊退し、以來十七日までの間にサガレン・カムチヤツカ・オホーツク方面の制海權を完全にわが手中に收め、我海軍の威力を遺憾なく發揮したのであつた。

かくして二十年前ロシヤに詐取された我が領土樺太は、陸海協同作戰によつて回收されたわけであるが、この征討に當つての陸戰隊の活躍は相當目ざましいものがあつた。征討軍は九月二十九日東京に凱旋した。

日露講和は十月十四日成立、同月十六日　明治天皇は平和克復に關する勅語を下賜あらせられた。これより陸海諸軍は續々と凱旋し、二十三日横濱沖にて凱旋觀艦式が擧行せられ、十二月十日大本營を解散、明治三十九年四月三十日、東京青山練兵場に於て凱旋全軍代表部隊の大觀兵式が行はれた。

〔註〕日露戰役後、明治卅九年には戰利艦と新造艦を加へ、我が海軍は一躍して百九十八隻・四十五萬トン、世界第五位の海軍國となつた。

第一次歐洲大戰

日露戰以後暫くは海軍陸戰隊の活躍するやうな對外事件はなかつたが、大正三年七月、セルビヤ一學生の墺洪國皇太子狙擊事件を發端として兩國の間に宣戰布告がなされ、それより半ケ月を出でずして歐洲列强八ケ國が戰亂の渦中に投じ、歐洲大戰となつて再び活躍の舞臺が與へられた。日本は初め、この戰局が紛爭地の外に波及せぬやう冀望し、傍觀の地位に立つ意向であつた。しかし乍らイギリスが東亞植民地自治領及び香港・威海衛の據點を有し、ドイツまた青島を根據として東亞艦隊を常駐せしめてゐる以上、中立維持は所詮は不可能な事であつた。果せるかな、ドイツ海軍は東亞の英勢力範圍を脅し始め、イギリスは日本の援助を請はねばならぬほどに逼迫して來た。加ふるにドイツは、日本をイギリスとの同盟國として敵視し、我が商船を砲擊或は抑留するに至つたので、到底砲火相交るのは避け難い情勢となつた。

八月七日駐日イギリス大使グリーンは、我が外務省を訪ひ、イギリス政府の覺書を提出して我

が援助を求めて來た。こゝに於いて政府は同夜臨時閣議を開き、翌八日夜元老大臣會議を開いて日本の斷乎たる聲明を發表することを決議した。十五日　明治天皇には日光より還幸あり、御前會議を開き、ドイツに對して、

『日本及び支那方面より即時にドイツ艦隊を退去せしめよ、退去し得ざるものは武裝を解除せよ、ドイツは膠州灣租借地全部を支那に還付する目的を以て、一九一四年九月十五日を限り、無償・無條件にて日本帝國官憲に交付せよ、一九一四年八月二十三日正午までに、無條件の應諾の旨回答を受領せざるに於いては、帝國政府は、その必要と認むる行動を執る』

旨の最後通牒を發した。然るにドイツは右通牒に對し期日に至つても回答しなかつたので、日獨國交はこゝに斷絶し、八月二十三日對獨宣戰の大詔が渙發せられたのである。二十七日墺洪國と我國との國交も斷絶した。

一、青島攻略戰

日獨開戰の結果、東亞における我が當面の敵は、青島要塞及びドイツ東亞艦隊であつた。

ドイツは明治三十年十一月、支那の暴民が山東省に於いてドイツ人宣教師ハンウェリ及びニーエスの二名を暗殺し、その教會を破壞したのを好機とし、艦隊を派遣して青島及び膠州府域を占領し、支那を威壓して、翌三十一年一月暗殺と教會破壞の賠償金を支拂はしめると共に、三國干涉に對する感謝の特證として、同年三月六日膠州灣租借條約に調印せしめ、九十九年間膠州灣の周圍五十キロの地域を租借しその上山東鐵道の敷設權及び同線路の左右十五キロの區域内にある鑛山の採掘權を得、青島に立派な市街を作りこゝに堅固な要塞を築造したのである。

當時青島要塞陸正面防禦の第一線は、海泊河口より小湛山附近に亘つて延長約六キロ、海岸堡壘二箇、臺東鎭東堡壘・中央堡壘・小湛山北堡壘・小湛山堡壘の永久築城あり、これを鐵條網を以て連續圍繞し、第二線はその後方イルチス山よりモルトケ山に亘つて、延長約五キロ、イルチス砲臺・ビスマルク砲臺・ビスマルク山南方高地砲臺・モルトケ砲臺があり、これらの砲臺は海面にも向け得るものであつた。

海正面の防備は會前岬砲臺・ヤーメン砲臺・臺西鎭砲臺等があり、悉く最新式の築城法により、難攻不落を誇つてゐた。これを守備する兵は、第三海軍歩兵大隊約千百八十名・海軍野砲兵中隊百名・海軍工兵中隊約百二十名・第五海軍砲兵大隊七百五十名・北支那駐屯軍約四百六

十名・オーストリー海兵約八十五名等總計四千九百二十名で、砲百數十門・飛行機二機・繫留氣球一個を有し、獨皇帝カイゼルより、『一兵卒の存する限り青島を固守せよ』との訓令を受け總督ワルデツク海軍大佐指揮の下に死守の覺悟を定めてゐたのである。一方艦隊は墺國三等巡洋艦カイゼリン・エリザベス及びドイツ砲艦・驅逐艦・假裝巡洋艦九隻がをり、ドイツ艦隊の主力裝甲巡洋艦シヤルンホルスト・グナイゼナウ・輕巡洋艦ニユルンベルヒは八月二十二日獨領南洋マーシヤル群島のマジヤロ島を發して東航を開始したのであつた。

對獨宣戰と同時に、我が第一・第二・第三各艦隊は急遽出動した。第一艦隊はその主力を以て驅逐隊四隊を從へ、黃海より黃海北部に當る海面に於いて、敵艦船の搜索警戒に任じ、第二艦隊は、第三艦隊及び驅逐隊二隊・特務部隊を從へて、八月二十六日朝膠州灣に急行、二十七日膠州灣封鎖を宣言した。

これより前、先發として膠州灣港外に赴いた第一水雷戰隊は、掃海作業を行ひ、二十四日九分通り作業を終へ、二十五日、十二隻の驅逐艦は、軍艦秋津洲と共に大公島に進攻、島の中央丘上にある燈臺に發砲したが、何ら應戰がないので、秋津洲の兵員五十名を以て陸戰隊を組織し、カツターに乘つて上陸、燈臺の尖塔上に旭日旗を揭げ同島を占領、牧養してあつた多數の

兎を鹵獲し、萬歳を叫んで歸艦した。二十七日は三驅逐隊は塔連島に進攻、陸戰隊は同島を占領し、膠州攻略の先驅をなしたのであつた。

八月二十八日陸軍中將神尾光臣の率ゐる第十八師團の先鋒山田支隊が、青島攻略のため長崎及び宇品を出發したので、攝津・河內・安藝・薩摩の戰艦戰隊、矢矧・平戸・新高・笠置の巡洋艦戰隊、音羽及び驅逐隊四隊の水雷戰隊より成る第一艦隊は朝鮮南方海面に、第二艦隊の一部は黃海方面に於いて、相策應して航路の安全を確保し、山田支隊は朝鮮八口浦より、第二艦隊護衛の下に、九月二日山東半島の北岸龍口に到着、直ちに上陸を開始、五日これを完了した。かくて山田支隊は十二日即墨を占領、十四日膠州を占領して附近の鐵道を破壞し、師團主力も十七日平度を發し即墨に向ひ、我軍の先鋒隊は着々青島の背後に迫らんとするに至つた。九月十二日英戰艦トライアンフ及び驅逐艦アスクが、我海軍と協同動作をとるため、加藤定吉第二艦隊司令長官の旗下に入つた。

二、勞山灣の上陸作戰

第二艦隊の膠州灣封鎖は愈々峻嚴を極め、敵艦隊は青島灣內深く蟄伏して出擊せず、山東半島の南岸勞山灣の掃海は着々として進捗、九月十三日より逐次內地を出發した第二期輸送の陸軍堀內枝隊は、十八日愈々同灣に上陸を決行することとなつた。同地は青島より十三里、即墨より六里、灣深く大軍の上陸には恰好な場所である。こゝに上陸すれば一日か二日で青島に進み得る。敵も日本軍が、こゝから上陸するに相違ないと考へ、騎兵や歩兵の大部隊を派遣し、守備を嚴重にすると共に、灣內に多數の機械水雷を沈設したので、掃海には十餘日を要したほどであつた。

わが海軍は機雷處分を終了した後、灣內を隈なく强行偵察して敵兵を掃攘し、十八日未明、まづ海軍重砲隊を先頭とする約一千の陸戰隊を南岸に上陸せしめた。これを見た敵の監視兵は盛んに砲擊したが、我が重砲隊は巨彈を放つて沈默せしめ海軍飛行機は地上部隊に協力した。陸戰隊は步哨線を張つて敵襲に備へ、陸軍に安全の信號をなした。

かくて輸送船にあつた陸兵は揚陸を開始、午前七時十一分迄に上陸したが、漸次干潮となつたので、數十間を徒涉する外なくなり、深さ膝を沒する潮水を渡つて上陸、夜に入つて海上に驅逐艦を配置、陸上また警戒、翌日に至つて全部の上陸を終へたのであつた。この時陸軍少將

バーナージストンの指揮する英歩兵第二十四聯隊も勞山灣に到着、日本軍と共同作戰をすることとなつた。

勞山灣に揚陸した大砲は、攻城砲五十四門、即ち二十八センチ砲六門、十インチ砲その他の榴彈砲四十二門であつた。九月二十七日掃海作業を完了したので、第二艦隊もこゝに入り、翌二十八日、周防・石見・丹後及びトライアンフは青島に迫り、午前八時四十分、イルチス砲臺に對し一萬四千メートルの距離を以て、砲撃を開始したが、淡霧のため妨げられた。

同日午後二時、海軍中佐正木義太の率ゐる海軍陸戰重砲隊が勞山灣に到着し、常磐・八雲及び驅逐隊掩護の下に上陸を決行した。正木中佐は日露戰爭の旅順閉塞隊の勇士である。中佐が同隊編制の命を受けたのは八月二十九日で、九月三日に定員が定められ、幹部の任命があり、同時に第二艦隊附屬を命ぜられた。隊員は一粒選りの決死の勇士五百名、その過半は海軍砲術學校普通科砲術練習生で、九月二十二日、十五センチ砲四門・十二センチ砲四門を持つて、運送船鹿兒島丸で横須賀を出發し、途中佐世保に寄港、兵器・彈藥・諸材料・需品を搭載し、二十六日佐世保を出港して來たのであつた。

一行は砲床と一尺角三間の砲床用木材とを肩によつて運び、山また山の嶮路を辿り、一日僅

か二里づつの行進をなし、少からぬ勞苦を嘗めて、漸く孤山に到着し、北麓の四十メートル高地に十二センチ砲臺を置き、その東方千メートルに十五センチ砲臺を据ゑることに決定、硬質の岩盤に、一日僅かに一二センチの掘鑿作業を行ひ、十二センチ砲臺の据附を終へ、引續き兵員休養所・治療所・炊事場・彈藥庫・火工場・通信線架設・觀測所掩體等を完了し十月十四日拂曉には整備發射を試み、結果の良好なるを確めた。

これより先、勞山灣上陸部隊は次第に敵を壓迫し、敵が防禦上最も重要視してゐた孤山から浮山に亘る一連の全高地は九月二十八日占領、十月六日、濟南から青島に通ずる山東鐵道沿線の要地を占領し、敵の武器・彈藥・糧食等の輸送の道を斷つてしまつた。海には第二艦隊が頑張つてをり、かくて青島は海陸から包圍されるに至つたが、非戰鬪員及び中立國民の避難勸告を行つた後、第二艦隊は十四日午前九時を期し青島砲臺に對する砲撃を開始し、各艦は代る代る射撃を行つた。敵巡洋艦カイゼリン・エリザベス、驅逐艦S九〇などは屢々膠州灣内深く侵入して、我が攻圍軍の右翼を砲撃したが、我が攻城重砲隊の砲撃を受けるやうになつてからは灣内深くは侵入しなくなつた。しかし近海を航行し攻圍軍右翼に脅威を與へたので、我海軍陸戰重砲隊はこれに猛撃を與へる機會を狙つてゐた。ところが敵艦は毎日、日が暮れると馬啼

燈臺の南西約七八百メートル、我が陣地を距たる九千五百メートル附近に繫泊することが判つた。この位置は我が十二センチ砲臺から直接照準は出來なかつたが、射程の末端にかゝるので十七日拂曉、敵がまだ目覺めぬうちに、間接照準を以て猛擊を加へた。

敵は浮標から錨鎖をはづす遑なく、ボートを置き去りにして慌てて射程外に逃がれた。この日海軍陸戰重砲隊はS九〇がわが射彈を冒して岸壁に横附し、積込みをしてゐるのを見て直ちに第二艦隊に『S九〇脫出の模樣あり』と報告した。果して午後七時、S九〇は青島を脫出、翌十八日午前一時、ツアリング島方向に徐航する我が高千穗を認め魚雷を發射した。高千穗は直ちに應戰、その魚雷を爆發せしめたが、その際艦內にあつた機雷を誘發し、忽ち一大爆發を起して沈沒、乘組員は全部戰死した。S九〇は我艦隊のため退路を斷たれ、十八日早朝南方海岸に擱坐自ら爆沈した。

十月初旬大阪を發した獨立攻城重砲兵第四大隊・第二十九旅團も、十月中旬勞山灣に上陸し攻圍戰に加はり、天津駐在印度步兵第三十六聯隊の半大隊も十月二十二日勞山灣に上陸して、二十八日英軍指揮官の配下に參加した。この日我海軍陸戰重砲隊の十五センチ砲臺が完成した。

三、青島總攻擊と海軍陸戰重砲隊

十月二十九日より我艦隊の青島砲擊は、益々その威力を加へ、終日砲擊を續けることもあつた。海軍陸戰重砲隊は、十五センチ砲臺の据附け完了と共に、港內の敵艦艇を砲擊し、その潛伏所を清掃して防禦陣地を破壞した。青島の運命を決すべき總攻擊の幕は十月三十一日の天長節を以て開かれた。その部署は海軍陸戰重砲隊(孤山)・由良攻城砲第四大隊(水淸溝)忠海攻城砲獨立中隊(小水淸溝)横須賀攻城砲第二大隊(楊家群)・下關攻城砲第一大隊(會同附近)・廣島攻城砲第三大隊及び浮山重砲兵第三聯隊の一ケ大隊(浮山後前方)・横須賀重砲第二聯隊及び同第三聯隊の一ケ大隊(四房山附近)であつて、渡邊少將が總指揮官となり保兎觀測所にあつて命令した。

午前六時十分、田家村北方の我が加農砲より轟然一發の火蓋を切るのを合圖に、各陸上の陣地と海上の我艦隊と英艦隊とが一齊に砲擊を開始した。

敵の砲臺及び陣地は砲彈の爆音に包まれ、殷々轟々、天地を震動し壯絕極りなく、また海陸の飛行機は敵の頭上高く飛翔して爆彈を投下した。この砲擊のため午前七時には青島造船所附

近に火災が起り、八時には大港東端の石油庫に火を發し、焔々天に漲る。正午頃まで應戰してゐた敵の諸砲臺は次々と沈默して行つた。一日には大港第一埠頭及びスタンダード石油貯藏庫に火災起り、市街二ケ所にも火災が起つた。東方の湛山より西北の臺東鎭に到る三十餘ケ所の敵砲臺は抵抗力を失つた。蠕て我が重砲隊の送つた巨彈のため青島市街には大火災起り、黑煙濛々として天を焦がし、火と煤煙に包まれた。

二日青島本防禦線の第一線は破れ、臺東鎭北面砲臺より田家庄一帶は、我が軍の手中に歸した。一日以來の雨は二日には暴風雨となつたが、我が海陸軍は豪雨を冒して攻擊を續け、俘虜八百を得た。かくして數日我軍は敵陣を次々と屠り、海軍陸戰重砲隊・攻城砲隊は、連日猛烈且つ有效なる砲擊を繼續し、歩工兵の進擊に有力なる援助を與へた。

七日午前一時三十分中央堡壘を占領し、守兵二百を捕虜としてより、我軍は突擊また突擊、拂曉までには臺東鎭東堡壘・小湛山北堡壘・海岸堡壘・臺東鎭堡壘・モルトケ・イルチス・ビスマルクの諸山を占領した。形勢刻々非と見た敵は十一月七日早朝、市の東郊天文臺上に大白旗を高く揭げて降意を示し、續いて各堡壘に日章旗飜へり、萬歲の聲、曉天を震撼して要塞は全く陷落するに至つた。午前九時、我軍の山梨參謀長は敵軍使とモルトケ兵營に會見し、開城

に關する取極めを行ひ、十六日盛大な入城式を行つた。この攻略戰に參加した我が戰鬪員總數二萬九千二百七十二名・死傷千二百四十五名、ドイツ軍は四千九百二十名、內捕虜として日本內地に護送されたものは守將ワルデツク以下軍人四千五百六十七名・その他百二十二名であつた。

上述の如く青島攻略戰における海軍陸戰隊、就中陸戰重砲隊は、なか〳〵重要な役割を演じた。

四、南洋諸島占領

日獨交戰は、青島を攻圍して開城せしめると共に、ドイツ東亞艦隊の主力を擊碎するのが主目的であつたがドイツは、南洋の海軍根據地に據つて、尙聯合國の領土を侵す懸念があり、既に獨墺艦隊が赴援したとか、青島にあつたドイツ東亞艦隊の旗艦シヤルンホルスト・同巡洋艦グナイゼナウの二隻は再び南洋に向つたとの情報もあつたので、聯合軍に參加した日本としては當然、南洋裁定の軍事行動を執らねばならぬ必要に迫られたのであつた。

然るに日本の行動に對し米朝野は俄然非難の聲をあげ、紐育の獨米協會々長の如きは、

『日本は膠州灣の占領のみで滿足せず、必ず洋上の諸島を占領するに至るであらうから、米國は遂に日本と戰爭するやうになるかも知れぬ』

と加州知事に打電し、一流の新聞は筆を揃へて、

『日本は挑戰的だ。猛惡だ。カイゼルが二十年前に蒔いた收穫を盜み取る立場だ』

などと日本罵倒の論評を掲げた。當時二等書記官であつた松岡洋右が、在華府の新聞通信員に對し、開戰顚末を詳細說明してからは、論調もやゝ穩當となつたが、なほ釋然としなかつた。かくしてわが朝野も、このアメリカ輿論のために開戰後、南洋に艦隊を出すか、出さぬかについて、海軍省及び軍令部に於いて論議され、外務省も、

『南洋に艦隊を出したなら米國と問題を起しはせぬか』

と懸念した。軍令部次長山下源太郎少將は、

『兎に角、ドイツ艦隊が南洋諸島に據つて行動することは確實だ。これを擊破するためにも艦隊を卽座に出さねばならぬ』

と云ひ、海軍次官の鈴木貫太郎少將も、出す方の主張者であつた。この議論は中々決せず、

結局上層の意見を求めることになり、次官から八代海軍大臣に、次長から島村軍令部長に申し出た。上では、

『南洋を領有してゐるのでもなく、參戰もしてゐない米が、彼これ云ふべき理由はない。もし云へば不當の干涉になる。そのため開戰となるやうなことになれば、こちらは非常な敵愾心を生ずる。勝敗は別として、米國に戰意がある以上、やらねばならぬ。米國がやるといふのなら、米國が立つた時にやればよい。當然艦隊を出すべき場合だから、出さうではないか』

と、卽決を以て艦隊の派遣を決したのであつた。かくして九月十四日、山屋他人海軍中將の率ゐる第一南遣枝隊（鞍馬・筑波・淺間及び第十六驅逐隊）が横須賀を出發した。その目的は、マリアナ群島・東西カロリン群島方面を巡航索敵し、海上の保安を保ち、群島を巡視し、貯炭所・給炭所を破壞してドイツ艦隊に對する給炭の途を斷つにあつた。而して出發に際しては、

『南洋群島を占領するとか、或は陸上に國旗を揭げることは外務省が非常にやかましく云つてゐるから、それだけはせぬやうに。また陸戰隊を揚げることがあつても、すぐ撤退することにして、永く駐屯せしめてはならぬ』

といふ注意があつた。十月一日植松龍雄海軍少將の率ゐる第二南遣枝隊（薩摩・平戸・矢矧）

が、『最初西カロリンに赴き、敵狀によりニューギニヤに進出し、濠洲艦隊と策應して索敵せよ。また敵狀不明の時は、パラオ方面に引返し、同方面の給炭基地を占定して行動せよ』との訓令を受けて佐世保軍港を出港した。

第一南遣枝隊は十月三日ヤルート島に到着、淺間副長南郷次郎中佐を司令とする陸戰隊を上陸せしめ、忽ち武器・彈藥類を押收して、敵官憲の降伏を容れ、抑留中の英汽船エンジー號を解放し、拘禁中の日本人牛飼塚村兼吉を救つた。五日には同じく南郷中佐の指揮する陸戰隊がクサイ島を占領した。また同日香取はサイパン島占領の命を受けた。翌六日の夜、第一・第二南遣枝隊に對し、

『敵狀が變化したから、第一南遣枝隊はヤルート・クサイ・ポナペ・トラックの四島を占領して、その方面を警戒せよ。第二南遣枝隊は西カロリンの要地を占領して、その一帶の海面を警戒せよ』

といふ訓令があつた。そこで第一南遣枝隊は翌七日ポナペ島を占領した。同日午前八時頃第二南遣枝隊の薩摩がヤップ島に到着し、陸戰隊を揚げると、ドイツ人は無線電信機、上海に通ずる海底電線等を破壞してしまつた。また灣内にゐた六、七百トンの測量船プラネットは、薩摩

を見るとすぐ、キングストンを開いて沈めてしまつた。同島には日本人が四、五名居り、監禁同樣な扱を受けてゐたが、その人達の案内でヤップ島は大した事もなく占領してしまつた。

十月八日第二南遣枝隊の矢矧はパラオ島を占領し、翌九日アンガウルを占領した。アンガウルに陸戰隊が上陸して占領を宣告すると、燐鑛會社のドイツ人が、

『この島は全部燐鑛會社の純然たる私有物で、ドイツ政府と何等關係ない。從つて占領に應ずることは出來ない』

と頑張つた。第二南遣枝隊參謀濱野英次郎少佐は憤然として、

『我軍は會社を占有する意向は有つてゐない。しかし本島がドイツ領たる以上、敵地としてその領土を占領し、本島を管理するものである。萬一これに對して抗命する時はフン縛つて監禁する』

と嚴重に申渡し威嚴を示すと、彼は急に態度を改め、

『本島は既に英軍艦から占領を布告されてゐるから、再び日本海軍の占領を受諾することは自分の責任上、大いに恐るゝ所である』

と訴へ、九月二十六日付濠洲軍艦シドニー艦長署名の、『獨領ニューギニヤ政府は、その管

下の全領土及び島嶼を英政府に引渡した』といふ意味の書面を差出した。これを見た濱野少佐は、

『苟くも占領なるものには、實兵力の伴ふことが必要だ。又我海軍は英海軍と協同作戰をしてゐるのであるから、何れにせよ占領して差支ない筈だ。それにこの書面には、何等占領の意味はないではないか。我軍の占領は決して君の責任に關するものではない』

と云つて我軍艦旗を柳子樹の頂上に揭げ、占領の手續を終つたのであつた。十月十一日第一南遣枝隊はトラツク島を占領した。同十四日未明サイパン島のガラパン沖に達した軍艦香取は、投錨と同時に陸戰隊を出發せしめ、乘員を戰鬪部署につけた。すると陸戰隊の短艇と途中で擦れ違つたドイツ國旗を揭げたボートが香取に漕ぎつけ刺を通じて艦長に面會を求めた。艦長近藤常松大佐が名刺を見ると、島司代理ベエマーと云ふ者であつた。艦長室に通つたベエマーは、『數月來何等の音信も得ないが、今貴艦の入港を見て、遠來の勞を慰めに來た』と云ふのだつた。彼は日獨開戰を知らなかつたのである。

そこで近藤艦長は日獨開戰の次第を述べ、本艦は本日サイパン島を占領に來たものであること、途中で遭遇した兵員はこの目的のため派遣したものであること、今すぐ歸つて、我派遣

隊司令の命に從ひ、官廳明け渡し・武器引渡し、その他萬事派遣隊司令の指揮通りやつて貰ひたい旨を告げた。ベエマーは驚愕、倉皇として退艦引揚げた。我陸戰隊は何等の抵抗をも受けず棧橋から上陸し、同所に揭揚してあつたドイツ國旗を下し、我軍艦旗を揭げ、ベエマーの歸來を待つて午前九時頃までに無事占領の手續を終つたのであつた。同月二十一日、同じく香取陸戰隊はロタ島を占領した。

この頃イギリスとの間に『赤道以南はイギリスが占領し、赤道以北は日本が占領する』といふ協定が成立、我軍は赤道以北のドイツ領南洋諸島を全部占領し、要地に守備隊を置いて軍政を布いた。かくの如く、南洋諸島裁定は全く海軍陸戰隊の獨り舞臺であつた。

〔註〕その後、我が諸艦は南洋の警備、印度洋・赤道以南の南太平洋方面の索敵に從事したが、開戰以來黃海南部よりフイリツピンのルソン東方海面帶に於て警戒に當つてゐた第三艦隊は南遣枝隊と策應し、九月十日青島を脫出せる獨艦エムデンの追跡を行つた。エムデンは十一月九日、英艦シドニーがコス島に追ひ詰め擊沈したが、同艦をこゝに追ひ詰めたのは全く我艦隊の功績であつた。我艦隊は青島攻略後はその擔任區域を延長し、印度洋方面に亘る海上の警戒監視をなし、又英の濠洲陸軍輸送の護衛任務に當り、一隊は蘭印及び印度方面からアフリカの喜望峰に到る間の海面

守備に任じ聯合國の後顧の憂へを排除するに努めた。

米西海岸航路保安のため派遣せられた出雲・肥前・淺間の三艦より成る艦隊（司令官森山少將）は大正十三年十月十五日、獨艦ガイエルが運送船を從へ布哇ホノルル港に入るのを急追監視し、十一月七日米官憲に抑留せしむ。その後ドイツ東亞艦隊がチリー沿海に現れたので、英濠艦隊も協力して十二月九日、オークランド島沖にて撃滅した。又同艦隊の外に常磐・千歳及特務艦より成る一戰隊（司令官栃内中將）は、大正四年三月十日、敵の殘艦プリンツ・アイテル・フリードリッヒを北米の一港に於いて武裝解除せしめ、同月十四日ドレスデンはチリー沖に於いて英艦のため撃沈された。こゝに於いて同方面の作戰は一段落した。戰局の發展に伴ひ、我海軍は大正六年二月第二特務艦隊（司令官佐藤少將）を地中海方面に派遣し、英國艦隊と協力し、聯合國海軍の共同作戰に從事せしめたが、我艦隊は最も困難なる運兵船の護衛に當つた。驅逐艦榊は敵潛水艦の魚雷を受けて大破、艦長上原中佐以下五十九名戰死、重輕傷者十六名を出した。

東亞戰局の小康と共に我國は從來ドイツが膠州灣及び山東省において得てゐた權利・利益の處置を講じ、なほ日支兩國の利益を增進し東亞永遠の平和を保つ必要上、總ての問題を解決せんとし、大正四年一月十八日、これに關する提案二十一ケ條を支那政府に提出した。三月初旬

交渉は頗る行悩み日支の風雲甚だ急で、第一・第二艦隊が佐世保に集合したことがあつたが、その後支那側は大體我要求に同意したが、どうしても纏まらぬ點があり、四月から五月にかけて再び交渉行悩み、五月七日、四十八時間の期限附を以て最後通牒を發し、我國に於いては戰備を整へ、第二艦隊の鹿島・三笠、及び利根を旗艦とする第二水雷戰隊、第一艦隊の第三戰隊、生駒・鞍馬・筑摩を揚子江口馬鞍山に派遣し、南方にある第三艦隊、秦皇島にある我軍艦等と共に支那の要所々々に我艦隊を配置し、必要なる行動をとることにした。この我が決意を見て支那側は俄かに我最後通牒の全部を承認したのであつた。この日支交渉の結果、

一、關東州の租借期限を西暦一九九七年まで延長。

一、南滿洲鐵道還付期限を同二〇〇二年、安奉鐵道還付期限を同二〇〇七年とす。

一、日本政府は歐洲戰爭終結後、膠州灣租借地を支那に還付す。

その他山東省における權益、山東省・東部蒙古に於ける都市解放のことなどが決められた。

〔註〕同五年三月、横須賀海軍航空隊が出來た。

浦鹽警備

大正五年十二月十二日次第に苦境に陷つた獨墺は、聯合國へ講和を提議し、その斡旋方を米大統領ウイルソンに依頼したが、聯合國は誠意なしとして拒否した。大正六年二月ドイツが無制限潜水艦戰宣言を行ふに至つてアメリカが參戰し、大戰は愈々深刻なる樣相を呈するに至つた。同年三月ロシヤ共産革命が勃發した。七月から八月にかけてドイツ海軍にも叛亂が起つた。ロシヤは十二月六日休戰した。この頃ロシヤ過激派政府の勢力は益々猛威を逞しうし、シベリア鐵道幹線は勿論、北滿洲及び東支鐵道沿線は殆どその勢力範圍に歸し、ハバロフスクの政權もまた勞兵會の手に歸し、白黨唯一の殘壘浦鹽もまた十二月二十一日軍事革命委員の組織以來、市の秩序全く紊亂して、生命財産の保障は、殆ど絶望狀態に陷つた。

當時浦鹽には聯合諸國より歐露に輸送すべき目的を以てロシヤに供給した兵器及び軍需品が約六十萬トン堆積されてをり、萬一これが過激派の手に落ちたならば、危險極りない。そこで

帝國政府は浦鹽の居留民の生命財産と、この軍需品を監視するため、第五戰隊司令官加藤寛治少將の率ゐる石見・朝日を浦鹽に派遣することとしたのであつた。

石見は陸戰隊一中隊を載せて、大正七年一月九日夜吳を出港し、十二日午前九時三十分、張り詰めた堅氷を破つて浦鹽に入港し、朝日は横須賀に於て出來るだけの防寒設備を施して、同じく陸戰隊一中隊を載せ、十三日横須賀を發し、途中函館に寄港し、十八日浦鹽に到着した。

加藤司令官は帝國軍艦派遣の目的を闡明すると共に、十三日在留邦人代表を招いて輕舉妄動を戒めたが、十五日浦鹽市長は、わが軍艦派遣を、露國の主權侵害であると抗議して來た。

當時、浦鹽は州政を行つてゐたが、過激派が武力を賴んで極端なる暴政を行ひ、市中には强盜殺人が頻發、在留邦人及び一般外人に對しては苛斂誅求至らざるなく、極めて不安な狀態にあつた。六十萬トンの軍需品は浦鹽内港・外港の沿岸倉庫、ロスキー島、浦鹽市より北方にかけ南北約三里、東西約一里の面積及びシニータ島内に於て、利用し得る限りの倉庫に納め、又空地に露天積にしてあり、既にロシヤ官憲に引渡したものもあるが、大部分は單に船から揚げただけで、手續未濟中に政變が起き、所屬不明となつてゐた。

第五戰隊に於ては陸戰隊の警戒部署、萬一の場合の避難民收容その他を定め、石見に次いで

浦鹽に來た英艦サツフオーク及び三月一日入港した米艦ブルークリンと共に警備を嚴重にしてゐた。三月に入つて市の秩序紊亂は愈々激しくなり、二十五日以來、過激派は突然起つて郵便局・電信局及び義勇艦隊を占領して積極行動を開始し、海外との通信は、軍艦の無線電信による外、全部杜絶してしまつた。四月四日午前十時、四名の露人兇徒が石戸商會に亂入し、店員一名を殺し、店主外一名に重傷を負はせた。在留邦人は即日緊急會議を開き、在留邦人保護に關し、首相及び外相に電報陳情すると共に、『事態斯くの如きに至つてなほ陸戰隊を揚陸せぬならば、全體石見・朝日は陸戰隊まで載せて、何の爲に浦鹽に在泊してゐるのだ?』『目前にこの狀況を見て、司令官の決意を促し得ぬやうな總領事なら、あつても何の益もない。須く決意を促すため、大擧總領事館を襲ひ、まづ總領事を血祭りに上げ、以て政府の處決を迫るべし』『報復のため萬死を賭して露人を襲擊すべし』などといきまき、形勢甚だ不穩となつた。

陸上にあつてこの形勢を見た加藤司令官は、四日夕刻歸艦するや、米・英指揮官に交渉することを避け、また海軍大臣にも請訓せず、全く一身上に責任を負ひ、大臣及び第三艦隊司令長官に宛て、

『事件に鑑み陸戰隊を揚陸するから、永興灣にある肥前及び驅逐艦を至急增援せしめられたし』

と電稟し、夜半隱密のうちに一切の準備を整へ、五日午前五時半陸戰隊二ケ中隊を上陸せしめ、豫定の警戒配備に就かしめた。夜明けて街頭に出た露人は、要所々々に着劍せる我哨兵の儼然佇立せるを見て一驚した。加藤司令官は、

『陸戰隊の揚陸は日本臣民を保護するので、決して他意はないから、露國臣民は何等の不安なく、日常の職務に從事せんことを望む』

といふ意味の布告を發した。海軍省においては、この上艦船を增派することは却つて露國の反感を挑撥する惧れがあるといふ理由の下に、陸戰隊の揚陸は是認したが、肥前及び驅逐隊は浦鹽に派遣せず、羅津浦に待機せしめた。こゝに於て艦隊は、萬一のことがあれば、死力を盡し、邦人の保護に任じ、力及ばざれば浦鹽を我が官民數千の墓地となさんと覺悟した。

加藤司令官は米・英指揮官に必要な通牒を發したが、イギリスは午後五十名の陸戰隊を揚陸し、アメリカは揚げなかつた。過激派は市の北方一番河兵營附近に一千內外の赤色軍を集中し夕刻に至つては、當地勞兵會がハバロフスクより赤色軍二千を招致するとの情報あり、また總領事館前には、ロシヤ人が蝟集して喧噪を極め、大道演說をなす者あり、叱咤怒號する者あり

我哨兵がこれを制止すると、

『露國の領土内に於て、貴様等の干渉は許さぬ』

と傲語する有様で、いつ如何なる反抗的態度に出るか豫測出來なかつた。そこで我艦隊では陸上・海上の警戒を嚴重にして、翌日午前五時更に二ケ中隊の陸戰隊を增發した。この日州參事會・勞兵會・市會・在ハバロフスク東亞勞農コサツク自治委員會等から、日英陸戰隊揚陸に對して抗議して來たが、皮肉なことには、陸戰隊揚陸のため、市内の秩序恢復し、强盜殺人事件も頓にその後を斷ち、浦鹽は嘗て見ない平穩狀態を現出したのであつた。

五月八日、豫て肥前に乘艦中の佐世保鎭守府陸戰隊一ケ中隊は、特務艦靑島で浦鹽に到着したので、五月十一日これを上陸せしめ、朝日・石見より成る陸戰隊二ケ中隊を撤退した。

これより先四月二十五日、チエコ族の先鋒が突然浦鹽に現れた。チエコ族は元來スラブ人で、オーストリー人の治下にあつて獨立の機會を狙つてゐたが、歐洲戰勃發と共に、墺洪國軍に加はつて出陣したが、同人種たる露軍と戰ふことを好まず、遂に軍團を組織して露軍と共に獨墺軍と戰つてゐた。然るにロシヤ革命が起り、ロシヤが單獨講和を結んだので、彼等の行動は無意味になつた。そこで彼等は西部戰線の聯合軍に投じ、あくまでドイツと戰ふ決心をしたが、道が塞がれてゐるので、シベリアに出て、更にアメリカを經由して歐洲に渡らうとして、浦鹽に入つて來たのである。六月初旬までにこのチエコ軍は約一萬四千に達した。七月一日から英船によつて佛戰場へ輸送開始の豫定であつたが、後續兵團三萬四千は過激派に阻止され、イルクーツク以西に分駐して過激派と爭ひ、六月中旬に入つてその紛爭は漸く熾烈となつた。浦鹽地方の過激派は、この中部過激派を援助するため浦鹽にある軍需品を西送せんとしたので浦鹽のチエコ軍は武力を以て、これを防ぐと共に、東進中の友軍を援助せんとし、六月二十九日突如蹶起し、浦鹽要塞司令部・勞兵會本部・市役所・各官衙を占領し、一擧に浦鹽の過激派を掃蕩した。

こゝに於てアメリカは二十名、支那は八十名の陸戰隊を揚陸して、日・英軍と協力、市内警備に當つた。進退意の如くならなかつたチエコ軍は、同地に據つて反過激派政府を組織し、まづシベリアの秩序恢復に當ることとなり、過激派の掃蕩を繼續することとなつたが、ニコリスクには過激派軍三千・獨墺軍千三百あり、なほブラゴエチエンスクより二千の兵を增派し、ハバロフスクに於て十七歲以上の壯丁に動員令を發して後續隊を送る形勢があり、チエコ軍の進擊は容易でなかつた。

日・英・米・支四ケ國海軍の在浦鹽司令官は、この新情勢に對處するため會議を開き、各哨區を協定して浦鹽市街の警備に當ることとなつた。チェコ軍は浦鹽市街が安定したので、ウスリー河の線まで前進したが、敵兵は次第に增加しチマコフカまで擊退され、非運に陷り救援を絶叫した。漸く英・佛兩國の兵が各一ケ大隊ほど來援したが、敵勢は一萬五千に達し、聯合軍の形勢が日々に悲境に逼つて來た。こゝに於て聯合國は日本に出兵を促し、アメリカからも、日本に出兵してチェコ軍を救援すべく提議し來つた。

日本の出兵が確定しない時、イギリスは約一千(主として印度兵)・フランスは約千二百(主として安南兵)を浦鹽に增派した。アメリカはフイリツピンの正規兵第二十七、第三十一聯隊を中心にして派遣、イタリアは北支駐屯兵を、加奈陀は四千の兵を派遣すべき旨發表、支那軍も增派、ベルギーは義勇隊を派遣した。日本は朝鮮との國境防衛、南滿洲鐵道の利害等から、支那と共同防衛協定を結び、聯合國よりの提議を容れて八月二日浦鹽出兵の宣言を行つた。我浦鹽派遣軍の主力たる大谷喜久藏陸軍大將の率ゐる第十二師團は八月十二日浦鹽に上陸した。

第五戰隊の海軍陸戰隊は上陸以來の警備に任じてゐたが、その後も屢々浦鹽に起つた小事件に對して常に善處したが、陸軍部隊の到着と共に、陸上警備を陸軍に讓つて撤退した。

當時シベリア一般の形勢は依然として混沌たるものがあり、過激派は獨墺俘虜軍と呼應して、跋扈し、黑龍江流域も不穩となつたので、八月初旬、軍艦阿蘇・千早及び驅逐艦八隻をこの方面に派遣し、ニコラエフスクの警備と、獨墺俘虜軍の掃蕩に當らしめ、更に香取・鹿島を增派した。我陸軍がハバロフスクを占領するや、過激派及び獨墺俘虜軍の一部が、ニコラエフスク方面に潛入して不穩の形勢を示したので、九月九日陸戰隊はニコラエフスクに上陸、警備に當り驅逐艦四隻は陸軍の行動に策應してハバロフスク占領後、直ちに黑龍江を溯航して水路を清掃し、陸軍と連絡し、陸戰隊は九月二十四日ハバロフスク方面より下航した我陸軍部隊と交代して引揚げた。

〔註〕 大正七年十一月ドイツがカイゼルの退位を發表して聯合國に休戰を請ふに至つて歐洲大戰の幕が閉ぢられた。大正八年六月パリ講和會議による對獨講和條約が調印された。チェコ＝スロバキヤ・ポーランドが獨立し、ウイルソンの主張した國際聯盟は講和會議の際四十ケ國の加盟によつて成立した。この結果わが國はドイツが明治三十一年三月支那から得てゐた山東省に關する權利全部を讓り受け、なほ青島・上海間及び青島・芝罘間のドイツ國有海底電線をも讓り受けた。我海軍が實力占領した南洋諸島は大正十年四月委任統治となり、大正十一年には南洋ヤップ島と上

海間の海底電線も我國の管理となつた。戰爭中海上に跳梁した獨潛水艦を聯合國間で分け國民に觀覽せしめることになり、我國も七隻を受取つた。大正八年七月二日地中海に於て活躍した第二特務艦隊は横須賀に還つた。同月九日横須賀沖に於て地中海派遣艦隊及び戰利潛水艦の御親閲があつた。

一、尼港事件

大正七年九月陸戰隊と交代してニコラエフスクに入つた我陸軍部隊は、黑龍江沿岸の要地を續々占領し、遂にチタ方面まで制壓したので、シベリアの過激派の勢力は衰へ、反過激派の團體が起つて、それ〴〵小政府を組織して互にその勢力を爭つてゐた。大正八年五月第十四師團が渡航して第十二師團と交代し、八月二十六日陸軍中將大井成元が大谷大將に代つて派遣軍司令官となつた。

レーニンの過激派政府はシベリアに於ける反過激派の鎭壓に力を注いだが、シベリア各地の小政府は相踵いで倒れ、最も有力視されてゐたコルチヤツクのオムスク政府も倒れ、大正九年

一月上旬過激派が再び勢力を得た。この形勢を見たアメリカは一月八日シベリア撤兵を提議した上、兵を引揚げ、英・佛・その他もこれに倣つた。しかしシベリア情勢は直接朝鮮・滿洲に波及するので、我國としてはチエコ軍の引揚完了するまでは出兵目的を達したと云ふことが出來ない。そこでアメリカの諒解の下に撤兵を見合せ、九年二月、新に第十三師團の兵を浦鹽に派遣した。

この頃、ニコラエフスクから北樺太アレキサンドロフスク方面にかけ、パルチザンと稱する過激派が活動を起し、九年一月中旬には尼港は殆どその包圍に陷つた。當時尼港には我領事館があり、副領事石田虎松以下の館員、大隊長石川正雅歩兵少佐の率ゐる約三百五十名の守備隊、尼港東方二里半のチヌイラフ要塞の西約一里にある海軍無線電信所（大正八年夏竣工）に隊長石川光儀少佐以下四十三名の隊員、居留民約三百五十名を加へ七百餘人の邦人がゐた。

パルチザンは過激派と合流して、大正九年一月二十三日黑龍江を越えて尼港市街に殺到し、二十八日にはその數四千に達した。彼等はチヌイラフ砲臺の監視を行つてゐた我歩兵六十名を襲撃したが、我守備隊は血路を開いて海軍無線電信所に合した。敵はチヌイラフ砲臺を修理して我海軍無線電信所を砲撃し始めた。敵の砲撃は正確を極め、我軍必死の防戰にも拘らず電信

室は全く破壞され、

『四十三名の隊員は枕を並べて此處に戰死せん、後日救援隊來り、電信所と共に我等の死體を收容せらるべし』

と云ふ意味の電信を最後として六日午後十一時通信不能に陷つた。こゝに於て電信隊は自ら火を放つて電信所を燒き、重圍を突破、尼港に退いた。この報に接するや、我政府は浦鹽派遣軍司令官に對し尼港へ增援隊を送るべく電命したが、兵員・日程などの關係から增派は不可能との反電があつたので、二月十三日、第七師團より步兵一大隊と一中隊の混成部隊を編制し、行軍用橇數百臺を用意し、二月二十八日小樽を出發せしめた。

この頃樺太のアレキサンドロフスクもまた形勢險惡となつたので、同方面の在留邦人保護及び韃靼海峽氷原視察のために、軍艦三笠・見島を亞港方面派遣の命があり、兩艦は二月五日舞鶴を出發、流氷を冒して堅氷を破碎しつつ北航し、二月十五日亞港の南方約二十浬のアグネオ沖に達したが、それ以上の北上は絕對不可能であつた。

そこで三笠艦長は副長牛島潔中佐の率ゐる小部隊の陸戰隊を萬難を排して亞港に派遣することになつた。陸戰隊は四十名の同胞を救ひ出し、同地官憲との平和的折衝によつて內外人居留民の安全を圖る處置を講じたのであつた。なほ見島はデカストリー港方面に向ひ、飛行機を以て偵察せしめたが、尼港救援隊の派遣は到底不可能で、六月の解氷季を待つ外はないと云ふことになつた。こゝに於て小樽を出發した陸軍の尼港救援隊も引返し旭川に於て待機することになつた。

尼港方面パルチザン指揮官は二月十二日以後、我尼港守備隊と戰鬪を開始したが、死守を覺悟せる石川大隊の頑强な抵抗を受け、入市することが出來ないと見てとり、二月二十一日ハバロフスクに於ける我山田旅團長に對し、

『尼港に於ける日本守備隊が現在日本軍の政策たる嚴正中立・內政不干涉を知らず、戰鬪を繼續して無益の犧牲を拂ひつゝあるは頗る遺憾なり、露國無線電信を通じて、同守備隊に適當なる指揮又は訓令を與へられたし』

と云ふ意味の無線電信を發した。山田旅團長は九日哈府日本領事館內に於て露軍指揮官と會見し尼港の日本軍及び過激派軍に對し、

『無意義なる戰鬪は中止せよ』

と、山田日本軍司令官・ブルガコフ露軍司令官・杉野日本領事・デーツマン露外務次官・そ

の他二名の連署の電報を發した。恰も哈府に到着した第十四師團長白水中將もまた、二月二十三日石川守備隊長に對し、

『露國の政爭に一切干與すべからず、過激派軍に對しても、彼等が我居留民を害し、若くは守備隊に對し攻擊態度を採らざる限り平和的解決に努めよ』

と云ふ意味の無電を發した。この結果、二月二十一日より二十七日の交渉に於て休戰協定が成立、敵は尼港の包圍を解き、續々入市し、二十八日日露兩軍將校の懇話會を開いたが、これらの措置は何れも過激派の術策であつた事が間もなく判明した。即ち入市したパルチザンは我軍との協定を悉く破棄したばかりか、白衛軍・知識階級・有產階級二千四百人の大虐殺を行つた。これに對し石川大隊長が嚴重抗議するや却つて我軍の武裝解除を期限付で要求し來つた。

こゝに於て石川大隊長は決戰を決意、部署を定め、十二日午前一時三十分三隊に分れ、石川大隊長はパルチザン本部、後藤大尉はチヌイラフ砲臺、海軍無線電信隊は實業學校所在の敵砲を奪取する目的を以て行動を起し、不意に敵を討ち、一時は勝を制したが、何分味方は四百に足らず、敵は大軍、十二・十三日兩日に亘る壯烈なる市街戰の結果、石川大隊長以下殆ど戰死し、我居留民も又多く慘殺され、十三日最後の死守地點たる領事館に集つたものは軍隊を合せ

僅か二百四五十人であつた。

敵は夕刻より六吋砲その他を以て我領事館を砲擊し、日本人は老人も婦人も銃を執つて防戰したが、衆寡敵せず、殘るは二十八名となつた。夜半石田領事は夫人及び二兒を殺し、三宅海軍少佐と刺違へ、抱き合つたまゝ猛火の中に飛び込み、生き殘りのものも皆火中に投じて悉く灰となつてしまつた。

大隊本部の兵營には河本中尉以下七十一名の將卒及び五十九名の居留民がゐたが、敵は全力を擧げて、これを砲擊した。十七日午後五時、敵の軍使は捕虜になつてゐた河村通譯を連行し、在哈府の山田旅團長及び杉野領事より兩軍司令部に宛てた戰鬪中止の電報を示した。勿論僞の電報であつたが、河本中尉はこれを看破する由なく、軍司令官の命令があつた以上、戰鬪繼續することは出來ぬと、武裝を解除し、武器・彈藥をパルチザンに引渡し、河本中尉以下百二十一名は黑龍江畔の獄舍に投ぜられ、五月二十四日一人殘らず虐殺されてしまつた。

尼港救援隊として旭川に待機してゐた多門大佐の率ゐる五ケ中隊及び砲兵一中隊は、再び小樽より乘船し、四月十九日第三艦隊の三笠に護送されて小樽を發し北上した。その前日小樽を出た第三艦隊の軍艦見島は二十一日夜間に乘じ、亞港居留民全部を無事收容し、二十二日尼港

救援隊は、三笠・見島掩護の下に亞港に上陸、過激派を驅逐して東亞パルチザンの總指揮官と稱するグバノフを捕虜とした。

五月十四日多門部隊の先遣部隊は、デカストリーに上陸、キジに進出した。十九日には本隊も上陸した。五月二十四日海軍中將野間口兼雄の率ゐる第三艦隊鞍馬・伊吹・敷島・對馬・千早第七及び第三十一驅逐隊がデカストリーに到着(後に肥前も到る)、五月十七日陸軍の國分支隊を援護して、ハバロフスクから下航した海軍臨時派遣隊のシュクワル・ブリヤツト等の砲艦が二十五日にはマリンスクに到着、こゝで多門支隊と合同して下航を續け、六月三日朝尼港に進入した。この日ブロングにあつた北部沿海州派遣隊の一部及び海軍陸戰機銃隊も到着して同地を占領したが、この時既に尼港全市は敵の放火によつて灰燼に歸し、茫々一圓の焦土と化し、無人の廢墟となり、守備隊及び邦人は慘殺されてしまつてゐた。

陸軍の諸部隊は翌六月四日よりパルチザン追擊戰を開始し、海軍は、水路啓開、陸軍部隊と內地との連絡、沿海州・樺太・オホーツク海方面の警備、同方面の我漁業・林業の保護、沈沒露艦の引揚げなどを行ひ、十月十八日旗艦鞍馬の亞港出發を最後として亞港防備隊の外、全部內地に歸つた。

〔註〕 大正七年三月、佐世保航空隊と氣球隊設置さる。

二、スキー陸戰隊の誕生

カムチヤツカ漁業は日露戰爭後莫大な利益を擧げて來たが、大正八年十二月に過激派の革命が起り、冬の間にオホーツクにある日本漁場四ケ所が燒かれた。同九年一月首府ペトロパウロフスクに於てもマロペチキンが革命を起し、三月尼港の同志と連絡してペ港在留日本人の虐殺を企てたが果さず、九月一日にもペ港に革命が起つた。當時ペ港には日本領事館があり漁場番人もゐたので、我國においてはカムチヤツカ漁業權擁護のため大正九年より十年にかけて軍艦石見及び特務艦關東の二隻をペ港に冬營せしめることとなつた。

兩艦は大正九年九月二十四日横須賀を出發、十月一日ペ港に到着した。その後新高と交代して十月三十日冬營錨地に着いた。この時、兩艦は水上機一機・陸上機二機・山砲四門・機砲四門・露式五センチ砲二門・その他手榴彈等を準備し、兵員は全部小銃、士官には拳銃を持たせいつでも陸戰隊として活動し得るやうになつてゐた。漁場の番人としては在鄕軍人から募集し

た二百六十名に小銃・拳銃を持たせ、ウスチカムチヤツカに百三十名、ボルセツクに百名、オゼルナヤに三十名を配し、無電を以て互に連絡、萬一の場合我が兵力が強ければドン〳〵やつつけ、向うが強ければ軍艦に引揚げて、ペ港だけは完全にして置く方針の下に警戒に當つた。

氷が一面に張り詰め、十浬の半徑を有するアワチヤ灣が一大氷原となると、乘員は氷上の小隊訓練・戰鬪射擊・觀兵式などを行ひ、或は陸上雪中行軍などをやり、氷上に雪が積るとスキーに移り、スキー陸戰隊の訓練を行つた。我海軍陸戰隊にスキー陸戰隊が誕生したのは、この時が最初である。その冬は一般に政情平穩で何事もなく、兩艦は大正十年六月千歳と交代して歸還した。

〔註〕大正十年四月海軍航空戰隊が創設された。歐洲大戰後我が造船術は長足の進歩を示し、所謂八八艦隊の國產海軍計畫に邁進し、海軍は益々勃興すべき機運にあつたが、東亞に野望を有するアメリカ・イギリス等は、これを喜ばず、平和・軍縮なる假面の下に政治的・外交的謀略を以て、我が海軍勢力を削減すべく乘り出すに至つたのである。

大正十一年一月のワシントン條約の結果わが方は米英五・五に對し三の比率を以て海軍々備を制限され、肥前・三笠・鹿島・香取・薩摩・安藝・攝津・生駒・伊吹・鞍馬及び建造中の天城・

赤城・高雄・愛宕・加賀・土佐を廢棄し、敷島・朝日を非戰鬪用として保有し、計畫中の八隻はその建造を中止しなければならなくなつた（廢棄艦の中攝津は標的用、天城・赤城は航空母艦に改造すること、三笠は記念艦として保存、天城は改造中關東震災によつて破壞したのでこれを廢棄、改めて加賀を航空母艦に改造した）。

右條約によつて廢棄艦は永久に沈沒せしむるか、解體するか、專用の標的に變更するかして戰鬪に供し得ない狀態に置くこと、十八ケ月以内にそれを完了することと決められた。實に大東亞戰より廿數年前、日本新鋭艦多數はアメリカ・イギリスによつて、武器によらず、政治力・外交力によつて撃沈されたのである。更に同條約の一部として太平洋防備制限を强要され、日本本土・千島諸島・小笠原諸島・奄美大島・琉球諸島・臺灣及び澎湖島等の區域内の海軍根據地を條約調印當時の現狀を維持すること等が定められ、より以上の施設を抑止されるに至つた。この外太平洋四國協約・ヤツプ島協定・九國條約・支那關稅條約・山東條約等が相次いで定められ、米・英等は、日本の東亞に對する指導的地位を否認し日本を孤立化し本土に窒息せしめんとあらゆる謀略を行つた。

またアメリカは昭和二年二月補助艦制限の目的を以て日・英・米・伊・佛五ケ國の第二軍縮會議を提議し、伊・佛の拒否に遭ふや、更めて日・英・米三國會議をジュネーブに開催、驅逐艦・潛水艦制限に關する假決定がなされたのであつた。昭和二年四月海軍航空本部が設立された。